

fate/zeroにカリスが参加するようです。…
え？やさぐれブレイドも参加するのかい？??
完結しました

ハクリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

fate／zeroにブレイド映画版エンドを迎えた相川始が参戦！

…までは良かったんだけど…あるえー？デイクイドに出てきた、やさぐれブレイドさんもいるよー？

こんな2人が参戦する聖杯戦争。原作通りに行くはずがない！

追記2015／12／28

注意

この作品は、キャラ崩壊やら設定異常などの点も存在します。

原作通りの設定などを望む方は、閲覧する際ご注意ください。

面白いならかまわん！とか、キャラ崩壊？ばっちこい！な方向けになっている可能性大です。

目次

序章

序章 1

序章 2

戦争、開幕。

サーヴァント召喚…おや？遠坂くんの

様子が変だぞ？

不死の儂さと本当の夢と魔術師殺しの

英霊召喚

他陣営、始動…あれ？殺人鬼が…

27

聖杯除去と間桐家の家庭内事情と暗躍

者の謎

40

ようやく戦闘…あれ？切嗣さんナズエ

イルンデイスカ？

アーチャー、冬木を散歩する…お、アサ

シンさん、動くのですな？

番外編

番外編 イリヤ、sドリーム

番外編その2 考えてみたら、すつ

かり忘れてた！

聖杯戦争3日目。キャスター、始動。

3日目と進行状況と行動開始

考察と聖杯除去と飲み会

勘違いと仲直り

聖杯戦争5日目 Sを除去せよ／キャス

19

14

5

1

47

57

66

74

80

90

101

ターの急襲

Kの起源／殺戮のキャスター — 111

中身とキャスターの宝具と臨時収集

121

C討伐の緊急会議／水面下で動く者、

動かされる者

129

Cを止める／聖杯戦争最終局面

最終局面突入と大量召喚と決戦開始

143

Kが必須／殺人鬼VS暗殺者 — 151

Kよ急げ／それぞれの戦い — 159

Wの過去・FILE1／理性なき殺意

の影 — 170

Wの過去・FILE2／狂った刻印と

別れ — 180

綺礼、覚醒 — 197

両雄、到着。 — 206

劣勢とお父さんの到着とクラスカード

— 218

セイバーとアーチャー — 233

剣／弓／復／助 — 259

運命の最終決戦！時空を超えたブレイド

ライダーズVS14！

生存と戦う理由と『!?』 — 281

方針と心臓部と毒槍特攻 — 296

Kの意地／想い出との邂逅 — 309

Fにさよなら／高揚と腹パンと勝利への賭け

追加分② fate／GO風のステータス②（ブレイド）（超簡単仕様）

終章

411

終章1

追加分③ H達の長い夜・FILE.

最終回 第4次聖杯戦争にカリスが参戦していたようです。あ、やさぐれてたブレイドさんも参加してみたいです。

1／異界化トラップにご用心!? | 追加分③ H達の長い夜・FILE. 2／トラップから脱出せよ | 追加分③ H達の長い夜・FILE.

添付ファイル

3／再会と決戦 | 444

追加分① キャラの聖杯戦争終了後／ボツ案・裏設定倉庫

追加分③ H達の長い夜・FILE. 4／死霊vs生者 | 461

追加分② fate／GO風のステータス①（カリス）（超簡単仕様）

追加分③ H達の長い夜・FILE. 5／ご利用は計画的に。 | 493

369

388

400

351

327

434

422

444

461

493

追加分③ H 達の長い夜・F I L E.

6 / 重力の死神・グレイブ | 504

追加分③ H 達の長い夜・F I L E.

7 / 長い夜の終わり | 520

序章

序章 1

???

「……は……?」

青年は目を覚ました。そこは、見たこともないような空間だった。

「あ、気が付いたかい?」

その声に対し、青年は反応はできたが、目を覚ましてすぐだからか、体を動かすことはできなかつた。

「……誰だ……?」

そこで、声だけでも反応を返した。そして、その声はこう言った。

「僕はこの『座』の管理人みたいなものだよ。まあ、ここにはまだ君しか来てないけどね」

「……座?」

「ああ。僕はこの空間を、過去に偉業や逸話たらしめるような活躍をした英雄や反英

雄などの魂が訪れる場所…そういった解釈をしている。そしてこの空間はまだ無数に存在する」

「…ということは、俺は反英雄の魂としてここに来た…という事か」

そう言つて青年は自嘲するかのような表情をしたが、ここで予想外の返答を返される。

「え？君は、『英雄』としてここに来てるんだけど…？ほら、このリスト見てくれよ」

「ハア!?ふざけたこと言つてつとムッコロスゾ！」

ついついオンドウル語を使いながら、そのリストを見る。そこには…

『名前 相川 始

性別 男

年齢 おそらく20代?

性格 一匹狼のような感じだが、ロリコン。居候先の少女に対する態度はまさに、イエスロリータ、ノータッチのロリコン紳士である。そして、軽度のツンデレである。

正体 その世界の終わりを告げる何の祖でもないと言われながらもカミキリムシじゃね?とか言われてるジョーカー。』

このリストを見た、いや見てしまった「始」は…

「……なんだこれは……!?! いや、これはおかしい! まともな表記が名前と性別、強いて言うなら年齢までしか存在していない!?! しかもロリコンってなんだロリコンって!?! しかもなんで俺がツンデレなんだ!?!」

「僕に聞かれても困る! 渡されたリストがこれなんだから!」

「それに確かに俺はジョーカーだ! でも何の祖でもないはずなんだ! 似てるとはいええか
ミキリムシだと!?!」

「え? 違うの?」

「違うわ!」

……なんだかんだ漫才しているような2人だったが…

ペカー…

「おい。なんだあの光は?」

「あー。なんか、日本の…冬木? だったかな? そこで聖杯戦争つてのをやってるみたい
でね。その時に戦いの中心となるサーヴァントの召喚が行われてるみたいだ」

「…聖杯か…」

「君が『変身』してたのは、確かハートのイメージがあったね。その起源といってもいい
ようなものさ」

「なるほどな…それで?」

「ん? 『それで?』とは?」

「その戦争の勝利者の報酬は?」

「願いの成就だ。マスターとサーヴァントの願いが叶う」

「!?!」

聖杯戦争の報酬に驚く始。これなら、ジョーカーの呪縛から解放されるかもしれない
…。そう期待した…

しかし、現実はそんなに甘くない。

「でもね…その聖杯は…汚染されてるんだ…」

「…は?」

いきなりの発言に戸惑う始。そこにさらに追撃を加えるかのように…

「今のままでと、聖杯に願いを告げた時点で災厄でその願いを叶えようとするだろう…」

「ならどうすればいい!?!」

せつかくのチャンスは無駄にはしたくない…そう思う始に管理人はある提案をする。

「君…聖杯戦争に出場しないか?」

序章 2

「君…聖杯戦争に出場しないか？」

「……は？」

始は、突然の提案に困惑した。なぜなら。

「今のままだと願いは叶わないんだろ!? 出る意味がない!」

そう。始にとってはジョーカーの呪縛から解放されるかもしれないチャンス。しかしそれは聖杯の汚染という最悪の妨害要素により、叶わないも同然なのだから…

「あー…説明が足りなかったね。君が聖杯戦争に出場するのなら…」

『君を人間という器に受肉させる』

「………は？ 待て。もう一回言ってくれ」

「だから、君を人間として受肉させる。もちろんサーヴァントとして召喚されるのは変わらないけどね」

「それは、つまり…」

「ああ。君が聖杯戦争に出場するのなら、君を人間として受肉させよう。」

「…だが…俺にはジョーカーが…」

「もちろんその意識も無くしてあげよう。…けど、完全には無くせないかも…なにせ、それが君の本当の「言うな!」…」

「俺は…もうあの姿に戻りたくない…。自分の意思に関係なく大切なものを傷つける獣には…」

「…そうだよね…。ごめん。失言だった」

もうあんな獣に戻りたくない。そんな気持ちを管理人にぶつける始。管理人は、その想いの強さに驚きながらも謝罪をする。

「話を戻そう。君には人間の身体、精神、サーヴァントとしての身体機能とスキルに、「生前に君が使っていた変身アイテム」の改良版を与えよう」

「あ、ああ…って良いのか? そんなに貰って…返せるものなんかないぞ?」

「まあ、確かにここまでの補助があるのに、代償なしはないよ。そこで、僕からお願いなんだけど…」

「聖杯を、この戦争で壊して欲しいんだ」

「…なに？」

やはりと言うべきか、始は驚愕した。当然だ。聖杯戦争の核たる聖杯を壊してくれと言うのだから。

「なぜ壊すんだ？汚染を取り除けば…」

「それが不可能だからだよ。出来たら僕でもやってるんだから」

「さらにだ。サーヴァントは、聖杯により召喚されると言っていただろう。俺はまたここに戻るのか？」

「それはNOだ。君はサーヴァントでありながら人間…いや、人間でありながらサーヴァントという存在として召喚される。だから、核たる聖杯が破壊されても、君は消滅することはないんだ。体がほぼ人間だからね」

「なるほどな…。で、その後はどうすればいい？」

「それは君の自由。気長に生きればいいさ。それに、願いを災厄で叶える願望機なんか…あつて欲しくないからね。」

気長に生きればいい。

そんな言葉に始は考える。確かにそうしたい。人間として生きられるなら。しかし、疑問があつた。

「…なぜここまでしてくれるんだ？」

「ん？」

「確かに俺はジョーカーだ。でも人間として生きたいとも思っている。しかし、お前はここで知り合ったばかりだ。それに、お前はここの管理人なんだろう？なら、なんでそこまで、俺に肩入れして、『人間としての生』を与えたいんだ？」

それは管理人が、人間として受肉させると言った時から気になっていたことだった。

「…君が、ジョーカーとしての自分を嫌っていたからだよ。だから、『君だけでも人間にしておけたかった』んだ」

「…おい、待て。どういうことだ。君だけでもって…」

「君は…いや『並行世界の僕』は、14（『フォーティーン』）の生贄にされた天音ちゃん
の代わりに封印され、内側からその力を弱めるためにカードごと壊されて、死んだんだ
ろ？」

「…ああ、確かにそうだ。だが並行世界とはどういうことだ？」

「ああ…僕は…いや、俺は、並行世界の『相川 始』なんだ」

その言葉は、始を動揺させるには充分な言葉だった。

「!?どういうことだ!?なら、なんでお前はここで管理人をしている!?それに、お前も

ジョーカーなら、こんなところにはいないだろ!？」

「確かにそうだ。だが…お前とは、違う終わり方だったんだ…」

「違う…終わり方…!？」

「なら聞こうか。お前の世界での剣崎は…『人間』だったか？」

「…? 当然だろう。剣崎は人間だ! まさか、人間以外の種族…? よりにもよってアンデッドになったとしても言うのか!？」

「…ああ、そうだ…。しかも…ジョーカーにな」

「な!?! そんな兆しは無かったぞ!？」

「当然だ。お前の世界ではキングフォームになることが少なかっただろう?」

『キングフォーム』とは、彼らの親友ともいべき者の最強の姿である。

「…確かに、そうだが…」

「キングフォームは、その強さと引き換えに…アンデッド化の危険も孕んでいたんだ…」

「なら…なぜ…」

「俺を…救う為だ…」

「な…」

「ジョーカーとしての本能を抑えられなくなった俺を止める為に…バトルファイトを続ける為に、あいつはジョーカーになった。そして、俺に人間と共に生きろと言って…み

んなの前から姿を消した…」

「その後は…?」

「再会したのは300年後だ。その時は別の星に飛ばされたし、そのシステムを認識するのに時間かかったよ…」

「…マジか…惑星移動したのか…」

「統制者が『バトルファイト絶対なんらかの方法で終わらせるマン』と化していたからな…。しかも、なんか統制者、最後龍になったし」

「龍!?!」

「ああ。双頭龍だった…テカイ上に、上下左右が際限ない空間内での戦いだったからな…その世界でのライダー四人揃ってたといっても、倒すのに苦労したよ…」

「…よく倒せるな…」

なんか、少し気の抜けた話が入ったようだが、すぐに話は戻った。

「その後、地球に戻って、剣崎とは一年に一回会えるくらいまでにはジョーカーの衝動を抑えられた…」

「でも…何かが起きた…という…」

「ジョーカーの衝動を極限まで抑えることで、いつの間にか身体が人間に近いものになってたんだ。それで、剣崎は流行病になって、そして死んだ。俺も悲しかったよ。だ

から、ナイフを自分の腹に刺して、刺さったまま持ち上げた。そして直後に抜いて、頭に刺した」

「…うっ…」

その方法を頭に思い浮かべてしまい、吐き気を催す始。

こちらの始としては、あまり人が自分で死ぬのを見たことがない。それ故にそのような話に慣れているはずも無かった。

「そして、俺は死んで、ここにいる。これが、俺がここにいる顛末だ」

「待て。話や質問に微妙に繋がっていない。ならなんで俺を人間に…」

「…悲しかったからだ」

「え？」

「お前の死に方が自己犠牲みたいで…悲しかったんだ」

「だが…あの時はああするしか!」

「それで残された者の気持ち分かるか!? 確かにお前の死後、力が弱まった14は倒された! だが、お前が戻るわけでもない。お前がいなくて…一番誰が悲しそうにしていたと思っっている!!」

「っ!」

「…そういうことだ。だから、お前には人間として生きて欲しいんだ」

そんな並行世界の始の話聞き、本来の始は…

「分かった。やるよ。聖杯戦争」

「っ。…ありがとう…。ありがとう…！」

「泣くなよ…。仮にも俺なんだから？」

「ああ…。そうだったな」

数時間後

ペカー↑召喚の光。

「聖杯からのお呼び出しだな」

「これでお別れか…」

「まあ気にするな。…新しい生活。しっかり楽しんでこい」

「そうさせてもらうよ」

「じゃあな」

そして、始は聖杯戦争のサーヴァント召喚の光に包まれて…消えた。

「ああ。じゃあな。もう一人の俺」

ザザ…

サア、戦争ノハジまりダ。ドウなるかは、役者シダいの60ねンニいちドのおマツリ。
カいえんダ。

戦争、開幕。

サーヴァント召喚…おや？遠坂くんの様子が変わだぞ？

間桐家 蟲蔵

「あ…ガハ…ゴホツ…グハツ…」

「カカカカ。気分はどうじゃ？雁夜よ」

「ハ…ハ、最悪だよ…ゴホツ…」

そこには、体内を蟲の餌食とさせている「間桐雁夜」と、その蟲を操る張本人の、

「間桐…臓硯…このクソ…ジジイ、ゴホツ」

「間桐臓硯」がいた。

「カカカ…それより雁夜、貴様きちんと覚えてきたのであろうな？」

「…当たり前…ま、えだろ…お前…こそ、わすれ、てねえだろう…な…」

「当たり前よ。この戦争に勝利すれば、桜を解放してやろう」

「クツソ…足下…見やがって…」

「ほれ。そろそろ時間じゃ…早う用意せい」

言いながら、臓硯は自分の持つ杖で雁夜を叩く。実際音はかなり軽かったが、
「ガッ…アアア!」

身体の中がほとんど蟲の雁夜にとつては、それは恐ろしい激痛となる。しかし、それに耐え雁夜は立ち上がる。全ては、あの子の：「桜」のためだ。そのためには、この聖杯戦争に勝たなくてはいけない…。

「時間じゃ。さあ、召喚せい」

「グ、ウウ…」

時間となり、召喚陣に向き直し、英霊召喚の儀を行う。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

——— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者……」

本来、臓硯が雁夜に召喚させようとしたサーヴァントのクラス、「バーサーカー」は、この後に特殊な詠唱を加えることで、基本ランダムに選ばれるクラスをバーサーカーに固定させることができる。実際、あまり魔術師として優秀とは言えない雁夜には荷が重すぎるのだが、短期決戦にのみ焦点を絞るなら、狂化によるステータスの上昇が売りのバーサーカーはかなり向いていると言える。臓硯もここまでは予想の範囲内だった。

しかし、ここで間桐臓硯にとって予想外の事態が発生する。

「汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

なんと雁夜が、バーサーカー固定の詠唱をパスして詠唱を完了させてしまった。これ

には臓硯も驚いた。まさか、バーサーカー以外のクラスを呼ぶとは思わなかったからだ。

〔ハツ：あわて、てやがる…ちよつと…でも、抵抗して…みるもんだ…な〕

これは、臓硯を嫌う雁夜が起こした、ちよつとした抵抗。もちろん、後からとやかく言われるだろうが、関係はない。雁夜からしたら、理性がなく連携が取りづらいバーサーカーは論外だったのだ。だが、どんな英霊が召喚されるかはわからない。もしかすると、バーサーカーの方が良かったかも知れない…一瞬雁夜もそう思った。

召喚の光が失せ、そのサーヴァントを見るまでは。

「サーヴァント「アーチャー」、とりあえず召喚により出てきたが…

まあ、一応形式上問おうか。

お前が俺のマスターか？」

そこには、青年が立っていた。しかし、雁夜はこの青年を「画面越し」に、知っていた。

何の祖でもない生物。人の姿を得て、人の心、想いを知った自分の正体を嫌う者。

それは、

「嘘……だろ……!？」

相川……始……!？」

そんなことを呟き、意識を闇に落とした。

不死の儂さと本当の夢と魔術師殺しの英霊召喚

間桐家 臓硯の部屋

日中でもあまり陽の当たらないこの部屋には、部屋の主の臓硯と、さきほど召喚されたサーヴァントのアーチャー：「相川 始」がいる。…え？ かりやん？ 魔力空っぽ寸前なので自身の部屋でダウンしてるよ？

「で、何の用じゃ、アーチャー」

「惚けるなよ、蟲。お前が純粋な人間でないことは、とつくに知ってる」

「…なるほどのう…。で？ だからなんじゃ？」

何を聞かれるか分からないうえに、正体を知られているとなると警戒したほうがいい…そう思っていたが、

「お前は、体を蟲にしてまで、一体何がしたかったんだ？」

「…？」

「お前は、何が目的で自身を蟲と化した？」

「…ハア…そんな質問か…決まっておろう。根源にたどり着くためじゃよ…。そして不老不死になるためじゃ。それが？」

「それは魔術師の血統「間桐家」としてのお前の意見だろう。「お前個人」はどうなんだ？」

「ワシ個人…？そんなもん…決まってる…」

「決まってる？どうなんだ？」

「ワシが、そこまですたかったのは…」

なんだったんじゃ…？

「だろうな。お前は、自身を蟲にしてまで、死を乗り越え生きてきた。そのうちに、自身の本当の夢、理想、そんなものを忘れた…そんなところだろ…」

「うるさい！お前に何がわかる！高々、死を奉られただけの存在が！」

「…分かる。俺も生前は仮にも不死だったからな」

「なん…じゃと…？」

「生前は単なる獣として生まれた。だけど、人の姿を手にした時に感じたんだ…人のぬくもりを、心を、夢を。そして、不死の獣だった俺にも夢が出来た。それは、自分の後ろにいた少女と、その母を守ることだった。…でも、その中で大切な親友と、永遠の別れをしてしまった…残された者たちの気持ちも知らずに…特に、俺なんかを慕ってくれた女の子一人の気持ちにも…気がつきませずに…な」

「…」

「だからこそ、お前には聞きたいんだ。」

「お前が本当にしたかったことは…なんだ？」

「…そうか…思い出した…ワシは…世界の平和を願っていたのか…なのにワシは…やり方を間違っていたのか…」

「いや、間違っていたのなら、これから間違えなければいい。」

「そうか…そうじゃな…」

そして不死を求めた蟲老人は、自身の夢を思い出し、蟲に頼ることを辞めた…。

「…しかし、やはりまだ生きていたいのお…」

「なら、やってみよう」

「？」

『スピリット、リモート、リカバー』

「…」

「え？ちよ、待て。待つんじやアーチャー！：ワシらは仮にも不死じやった。そして理解し合えた仲であろう！？それなのにこの仕打ちは…」

「動くな。狙いが定まらない」

「ちよ…：ギャー…！」

「うっせえぞ！ジジイ！ゴホッ！グホア！

…あれ？体の中の蟲の気配が…消えた？」

「な、何をしたんじや…あれ？」

ペタ、ペタペタ。

「ワシ（俺）、純粹な人間に戻つとる（てる）…！？」

「…はっ！桜（桜ちゃん）は!？」

「えーと…：何があつたんでしようか？あ、雁夜おじさん！おじいちゃん！どうしたの？」

桜も、純粹な人間に戻っていました。

「アーチャー。何したんだよ？」

「世間話と、荒療治」

「??？」

こうして、間桐家の方々は、蟲に頼るような魔術をやめ、純粹な属性、水を使ってい

くことにしました。

所変わって…

ドイツ アインツベルン城

「こんな簡単な儀式でいいの?」

「ああ。アイリは驚くかもだけどね」

「裸同然の姿になって踊るとかしなくていいのね?よかつたわ」

「プフウ!?!いい、いやそんな必要はないよ…後は詠唱だけだからね」

「人身御供とかしなくて済むのはいいわね」

「だから、そういう考えからちよつとは離れてくれ!?!」

「なんだか、とつても惚気ながら召喚するようです!」

「惚気てない!」

「おや?聞こえたかな?まあ、いいか。そしてそこに、いかにも長生きしていそうな老人が来た。」

「フオツフオツフオツ…準備はできたか?」

「ああ。滞りなく」

「では始めよ」

（「アイリ。作戦は？」）

（「順調。そろそろ…」）

「キリツグー！母上ー！」

「見ているだけですよ？」

「たのしみー」

「ん？なんじゃ、誰かと思えば。そこで見ているだけじゃぞ」

「はーい！」

「では始める…」

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

現れたのは…

「サーヴァントセイバー…召喚により参上したが…誰が俺のマスターだ…？」

「僕だ」

「そうか…」

しかしその後、

「すまんセイバー。ちよつといいか？」

「…？」

ヒソヒソ…

「俺はいいが…いいのか？」

「いいんだ。でないとアイリが怖い…」

「あ、ああ」

そして、作戦が決行される。

「では、今回の聖杯戦争の方針だが」

「固有時制御…トリプルアクセル！」

「変身…そして、

『スピード10、J、Q、K、A。ロイヤルストレートフラッシュ』

ハア!!!

ドツカーーーーーン!!!

「な、わしの城が…アインツベルン城が…」

「ゴフツ…い、今だ！みんな！行くぞ！」

「うん！（ええ！）（分かったー）（はい！）」

「すまん…先導できるか!？」

「…当たり前だ…」

「くつ…逃げられるじゃと…？こんな…こんな…」

爆発オチなんて最低じゃーーーーー!!」

衛宮切嗣。アイリスフィール、イリヤスフィール、セラ、リズ、セイバーを連れ、日

本に逃走。

他陣営、始動…あれ?殺人鬼が…

衛宮サイド

飛行機内。

切嗣は、自身の子（と書いて天使と読む）である、イリヤを見つめていた。

「zzzz…」

「よく寝てるね。イリヤは」

「なんだかんだ一番楽しみにしていましたから…私もそうです…（ボソッ）」

「セラ、照れてるー」

「っ!／／／黙りなさい!リーゼリット!あなたもはしゃいでいたでしょう!」

「…騒いで迷惑になるくらいなら、アイリの相手をしてあげてくれ」

「すごい…ほんとに鉄の塊が空を飛んで…あ、何かしらこれ?」↑なぜか酸素マスクが落ちてくる。

そこには、外を知らない子供のようなアイリスフィールがいた。

「あ。静かにしましょう。リーゼリット」

「さんせー」

「ふう。じゃあ僕も少し寝るよ。おやすみ」

「おやすみなさいませ（おやすみー）」

衛宮家御一行が、冬木市に降り立つ日は、近い。

所変わって

ケイネスサイド

「あら、ごはんできたわよ。デイル。さ、座って。あ、ケイネス。あなたは自炊してね？」
「フツ。自炊とはいえ、夕食にありつけるのは素晴らしいではないですか。マスター。
まあ、私にとっては、ここにいる美しい花を愛でることに精一杯なので……」

「もう！デイルったらく／＼／＼」

「ぐぬぬぬぬ……これか!?これがNTRか!?日本のドラマで幾つか見たことはあるが、私
がされるとは思わなかったよ!」

「自身のフィアンセを取られて、どんな気持ちですかあ?どんな気持ちなんですかあ!?’
「黙れ!うう……なぜ……こんなことに……」

数日前

「征服王イスカンダルの触媒は失ったが、まあ、これでもなんとかなるであろう」

「ふーん…まあ、頑張つて」

「ふむ…では儀式を執り行う。」

素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ(みたせ)。閉じよ(みたせ)。閉じよ(みたせ)。閉じよ(みたせ)。閉じよ(みたせ)。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!」

「サーヴァント、ランサー召喚により参上した。その御麗人。あなた様が私のマスターですか？」

「いや、この私、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトこそがお前のマスターだ」

ランサーが近くにいたソラウをマスターと誤認しようとしたこと以外は通常通りの召喚だった。

次の言葉を聞くまでは。

「は？いや、あなたのような、将来確実にハゲそうな方がマスターなのですか？こちらの御麗人がマスターではないのですか!？」

「おまえがなんと言おうと、私が、このケイネス・エルメロイ・アーチボルトこそがお前のマスターだ！」

「……………御麗人…：自害させていただいてもよろしいですか？」

「ま、待て！自害など許さんぞ！」

「あなたには聞いていない！それにあなたのような者がマスターなど、やる気が起きない！御麗人にマスターの資格の全てを譲渡しない限りは、自害させてもらう！」

「そういうわけだから、さあ、左腕を出しなさい。ケイネス」

「(ガタガタガタガタガタガタ…) 分かりますました…」

この時のソラウの背後には、黒いカソックを着た神父のような男の姿が見えたという…。

また所変わって

ウェイバーサイド

「くっ…よし!ここだ!行け!」

「ほう…なかなかの腕ではないか。そこはこうしたらもう少し早くやれるのでな。試すといい」

「分かった!よし。やるぞー!」

「あらあら、あの子ったら…」

「楽しいならいいだろう。孫がいなくなつた今、あの子はわしらにとっての孫同然なんだからのお」

「あつちの大きいお友達も遅しくていいわね」

ウェイバーは、マッケンジー宅に居候しようとしたのはいいが、暗示に失敗し、流石にまずいと思つたが…

「おまえは、わしらの孫同然なんじゃ。ここから出て行かせる理由などないよ」

と、許可をもらえたので、居候を続けている。また、召喚したライダー、征服王イスカンドルは、なぜかゲーム好きで、最初はそれを否めていたものの、いざやらされると、時計塔で溜まったストレスを発散するかのごとく熱中。最近は、ライダーと一緒に日雇いのアルバイトをしながら、居候代、ゲーム代、食費を賄う生活が続いている…これでもいいのか魔術師よ。

「良いのではないか？どう生きようが、本人の勝手だろう。それにケチをつけるとなると…其方、結構歪んでおるな？」

また聞こえる人か…まあ確かに歪んでいる自覚はありますが…

まあ…そんなこんなで、ウェイバーはライダーを召喚したとともに、新たな発見「ゲームは楽しい」ということを知れたのである。

「やった！ゲームクリアだ！」

やはり所変わって

綺礼サイド

（「私は、聖杯に託すような願いが…ない…」）

自らの師、遠坂時臣が「うっかりの連続発動」によりサーヴァントを召喚した直後に

敗退という、聖杯戦争で類を見ない敗退をってしまったため、自分がその事後処理、つまりは聖杯戦争で勝利しなければならなくなった。しかし、先ほど話していた通り、願いが無い。つまり、このまま行けば、時臣の願い（根源の渦への到達）が叶えられないという事態が発生しているのである。

「だが…仕方がない…闘いの中で望みを知ることとしよう…」

そうして、綺礼は腹をくくり、英霊召喚に臨む。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

—— 告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

「聖杯の寄る辺に従い、アサシン「ハサン」参上しました」

「…アサシンか…戦闘向けではないが…やるしかないか…とここでアサシン。おまえの願いはなんだ？」

「いや…実の所、多重人格に困っておりまして…それを治すのが望みでございます」

「おまえの宝具は？どんな「ザバーニーヤ」だ」

アサシン「ハサン」の宝具「ザバーニーヤ」は、名前の読みこそ同じだが、召喚されるハサンによって内容が違うという珍しい宝具である。

「自らの多重人格を召喚できます」

「…やってみろ」

「はっ。では…妄想幻像…」

ズズズズズ…

「私がザイド。先ほどからマスターと話していた者です」

「アサ子です。数少ないこのハサンの中での女です」

「…」

「で。こちらがちびアサシン。こちらも女の子です。ですが、この人格が生まれた経緯が尋問を受けていた時なので、あまり話さな…」

「アサ子お姉ちゃん。おなかすいた」

「あ!ちよつとだけ待つてね? マスターにみんなを紹介しなきゃだからね? いい子だから、ね?」

「うん♪」

「くう…やはり天使だねえ!ちびアサシンは!あ、マスター。このまま、この子を愛でていてもいいですか?」

「好きにしろ…もう諦めた…」

しかし、ここで言峰はふと思った。

「おまえたち」

「はい。(ちびアサシン以外全員)」

「そのままいれば多重人格どうたらこうたらは解決できるのでは?」

「……………ああ! (同じくちびアサシン以外全員)」

「やれやれ…」

言峰は呆れながらも、少し感じるものがあつた。

そうか…これが友情か…

このようなものも、良いな。

アサシンを召喚し、コント染みたことをしながら、なぜか友情を学ぼうと決めた言峰であつた。

何回も申し訳ないが所変わつて

???サイド

「よし…これでいいか。まあ、連続殺人鬼にはもつてこいな死に方だろ」

そこには、2人の青年がいた…いや、1人は人とは呼べない状態だつた…。そして、その青年は、「雨生龍之介」という。

頭、両腕、両手、胴体、両足、両腿、両脛の12分割されているにも関わらず、無駄な傷は一切なく、寝ているような表情で、化粧もされているようだ。しかし、その青年が形作っているのは…

植木のようにも見える。

胴体を土台にし、両腿、両脛を縦につなげ、その上に頭を置かれている。そして、耳にあたる所からそれぞれ腕が。そして頭の上には両手、両足が木に生い茂る草のように置かれていた。そして、なぜか、継ぎ接ぎになっているような痕が一切ない。

「ま、これに至っては魔術さまさまか…。しっかし、起源が「殺人芸術」って…使い辛いつたらありやしない」

そう。この「魔術師」は、青年を強力な睡眠魔術で眠らせ、切断魔術を使い無駄な傷や出血のない12分割。その後に化粧を行い、青年で木を形作り、接ぎ目がでないように固定魔術で固定したのだ。

「でも…患者退治した報酬は…相当なものだったみたいだ…」

その手にあつたのは、木にされた青年が持っていた小さな本だった。

「しかし…ほぼ一般的な家庭から、英霊召喚の詠唱が記された書物が掘り出されるとは…偶然も重なり合えば必然…ってことか…ま、英霊召喚の詠唱だけがどうしてもわからなかったからな…丁度良かった。ここには陣を描くための血もあるし。儀式。始めるか」

そして10分程で準備を完了させ、儀式を始める。

「えー…素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。」

降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。閉じよ（みたせ）。……この後
もか？閉じよ（みたせ）。

繰り返すつどに：四度じゃなく、五度か。

ただ、満たされる刻を破却する

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——。

こんな感じか……？うお？」

「キャスター……おまえか？マスターは？」

「…ああ。俺がマスターだよ。よろしくな。キャスターさん」
ここに、身元不明。しかし、マスターの資格を得た魔術師と、これまた真名が不明の、黒づくめのキャスターのコンビが誕生した。

ザザ…

さア、おレハ召喚されタぞ。たのしモウじやないか。

英霊ども。

聖杯除去と間桐家の家庭内事情と暗躍者の謎

衛宮家サイド

「ようやく着いたか…冬木市に」

「そうですね。となると、まずは…」

「家探しよね?」

「いや、そうすると僕がアイリの作戦（アインツベルン城爆発オチ大作戦）に乗った意味がなくなってしまう」

「え? 私からしたら、爆発オチまでで満足だったんだけど?」

「いや、『アインツベルン城爆発オチ大作戦』は、僕にとっては計画の第1段階だったんだ」

「え? これまでのアハト翁からの嫌がらせで貯められた鬱憤を、晴らすため…だったのでは?」

「最初はそうだった! でもここまで来たら、とことん運命に抗ってやる! 聖杯!? そんなもん知ったこっちゃない! 僕はイリヤが産まれた時に1を捨て10を救うなんていう正義の味方はやめたんだ! 恒久的世界平和なんか必要ない! 僕が欲しいのは、家族みんな

などの平穩だ！」

「あらあら切嗣つたら／＼／＼」

「もう／＼／＼キリツグは、イリヤがいないとダメなんだから／＼／＼」

「あの、その、直接言われると照れますわね／＼／」

「うれし／＼／／」

「…！」

嬉しさから照れる衛宮家女性陣に対し、セイバー「劍崎一真」は、「俺は今…無性に腹が立っている…」とでも言いたいようなしなめつ面でこう言った。

「運命に抗うなんてことはな、そんな簡単に口にして、どうこうできるような事じゃない。抗えば最後、一生苦しみながら生きる選択だ。そんな簡単に言えるなら

この世界は、とつくと昔に平和だよ。それにな、結果が伴わない抵抗なんかムダなんだよ。それを認める勇気を持った方がいいぞ？マスター…」

「…なんだと？」

「何度でも言おう。結局成功しない限りは無駄だ。何をしようとな」

「なら、僕のしようとしていることもお見通しかい？」

「そんなもん知らない。結局無駄な抵抗…」

「聖杯をね、

アイリの身体から取り除こうと思うんだ」

「……………ウェイ!?Σ(owo)」

「確かに、無駄な抵抗かも知れない。けど、これしか家族みんなで暮らす方法がない。そのためには、使えるものはなんでも使う」

「…方法はあるんだな?」

「向こうが受けてくれたらね」

あーだこーだ…ウソダドントコ、ホントダウェイウェイ。

「何を話しているのかしら?」

「さあ?」

ここに、聖杯戦争をとんでもない方法で終わらせようとする父親(夫)がいた。

所変わって

雁夜サイド

「……………なあ、アーチャー」

「…なんだ?」

「そういえばさ、

飯、どうしよう」

「え？」

そう、今、間桐家の食卓がヤバかった。ここまでは、置いてあったものを食べるだけで済んだ…が、それも切れた今、何を食えばいいか分からないのだ。

「どうする…？ここは臓硯でも食うか…？」

「俺に人食趣味はない」

「おい雁夜、さらつと人食い宣言するな」

「あの一…」

「なんだかんだ家族も増えたからな。食費も考えないと…」

「まあな。しかし、うちの資産も余るほどあるが、限りもあるぞ」

「うちには、料理を作るやつはいないのか？」

「あの一」

「始は…ダメか？」

「毎食たこ焼きならイイぞ」

「あ、やめときます」

「とかいう臓硯も出来ねえし、俺も無理だ…」

「どうするべきか…」

「あの一」

「外食行くか？」

「一番無難だが…入り浸りもどうなんだ…？」

「仕方ない…カップラーメンでも食うか…」

「あのだ!!」

「「うわ!!」」

「一応、料理…出来ますよ？」

「え? いや、桜ちゃんにさせるわけにはいかないよ。まだ小さいんだから。ケガでもしたらどうするんだい?」

「確かにな。君の身体は、君だけのものじゃない。君がケガをして心配する人がいることを忘れちゃいけないよ」

「雁夜おじさん…始さん…」

「…でも、今から覚えておいた方がイイかもな。将来こういうことは役に立つ」

「…確かにな。よし。桜ちゃん。俺たちも手伝うよ。みんなで作ろう」

「ワシも手伝おう。伊達に何百年生きてないからな」

「…うん!」

こうして、間桐家は家族みんなでご飯を作る事となった。なお、桜が以後、料理番の長になったのは言うまでもない。

また所変わって

オリキヤラ『崇身 渉(たたみ わたる)』サイド

「ふう、キャスターの固有スキル、陣地作成の腕前はつと、…うーん…なんか、びみよーだな」

「オレは、全体的にスキルランクが、低い。その代わり、ステータスは、高い。それは期待、していい」

「へえ、ま、期待してるよ」

「今日から、聖杯戦争、始まるが、どうする?」

「とりあえず様子見。3日目から動く」

「なぜ?」

「そこまで行けば少なくとも進展はあるだろ。そこに突っ込む」

「分かった」

このキャスターのマスター、崇身 渉は、本来は時計塔の魔術師だった。しかし、行動阻害、敵対勢力弱体化、逃走補助などの魔術「しか」できない魔術師だった。

少なくとも表向きは。

その実、渉の起源は、「殺人芸術」。

殺害した者の遺体で芸術作品を作るための魔術に特化した異端の起源である。上記の他に、切断、固定、化粧、催眠などの魔術なども極めて高いレベルなのである。危険すぎるために封印していたが、聖杯戦争の話聞き、自分の望みを叶えるためにこの冬木に来たわけだ。その願いは、

「さーとと…俺の願望、『俺以外の全人類死体アート大作戦』の一步、頑張りますか」

その望みは、純粹で、しかし歪み、汚れていた…。

ようやく戦闘…あれ?切嗣さんナズエイルンディスカ?

聖杯戦争1日目

夜

倉庫街

ここに、サーヴァントの気配を察知した、セイバーと衛宮切嗣がいた。

「ココか…確かにサーヴァントの気配がするな…」

「一応、警戒はしておけよ?マスターに死なれたら俺が生きてても負けなんだからな」

「もちろんだ」

「装備は?」

「いろいろ持つてきたよ。いざとなったら『アレ』もある。そっちは頼むよ?」

「任せておけ」

するとそこに

「来たか。サーヴァント、セイバー」

凜とした男性の声でした。

その男性…いやサーヴァントは、『槍』を持っている。ということは、

「サーヴァント、ランサーか…」

「敏捷性が高い機動型のサーヴァント…」

「話をしているところ悪いが…攻めさせてもらう!」

「くっ!?変身!」『turn up』

「ほう、それがお前の鎧か!来い!俺がお前に引導を渡してやる!」

言うが早い、ランサー『デイルムッド・オディナ』は、ブレイドに対し、自慢の槍でランサーの特徴であるスピードを生かした素早い攻撃を繰り返す。対してブレイドは、その攻撃のスピードにギリギリで追いつき、自らの剣「ブレイラウザー」で受け止めながらも攻撃を加えようとするが、なかなか当たらない。

(「こいつ…速い!」)

「悪いセイバー!ここは頼む!僕はマスターを直に叩く!」

「死ぬなよ!」

「分かってる!」

「!マスターのところになど行かせぬ!」

切嗣がランサーのマスターの下に向かおうとするのを見て切嗣を妨害しようとするが、

「いや、ここは足止めさせてもらう!」

「ちいー」

それはブレイドが許さない。切嗣に向かおうとするランサーの進路上にブレイラウザーを投げつけたのだ。これにはデイルムツドも思わずその場に留まる。その隙に剣に追いつき、向かい合う。そして、

「固有時制御!ダブルアクセル!」

切嗣は、自身の有する魔術『固有時制御』で、デイルムツドのマスターの下に向かう。それを攻撃せずに見届けたデイルムツドに、ブレイドは疑問を感じた。

「…なぜ攻撃しなかった?」

「これでも騎士だからな。わざわざ離れようとする者を執拗に追うことはせんよ」

「そうか…なら…」

「殺り合おうか」

ここに、セイバーVSランサーの対決が始まった。

槍で貫かんとすれば剣でいなされ、また剣で斬ろうとすると、やはり槍で受け止められる。と、そのとき互いの武器がはじけ飛び、両者ともそれを取りに行く。その間、わずか2秒ほど。そして、デイルムツドがそのスピードでブレイドに攻撃を加えようとする。そこでブレイドは『あるもの』を取り出す。それは

カッ
!!!!

「グッ！これは…閃光弾か!」

デイルムツドの視界が眩んでいる隙に

「よし…」『サンダー、スラッシュ。ライトニングスラッシュ』

「…ようやく視界が…ハッ!」

「ウエーローイー!」

「くっ!?うう!」

ブレイドがコンボの一つ、『ライトニングスラッシュ』が発動し、肩から切り裂こうとしたが…

「…チツ。仕留められなかったか…」

デイルムツドは、斬られかかった際に、肩の犠牲を覚悟にバックステップをして、完全に斬られることを避けたのである。

「…電撃を纏う斬撃か。かなり効いたぞ…まだ肩が痺れる…」

「今のはいい手応えだと思っただけだな…」

「いや、バックステップをしなければ危なかった…!」

フォン…

「…消えた。…令呪による強制召集か。そして気配は…あちらか!」

『マッハ』

ラウズカード『マツハ』は、使用者に高速移動の恩恵を与えるラウズカードである。このカードを使って高速移動する理由は、切嗣に令呪を使わせないためである。

「チツ…間に合え…!」

所変わって

切嗣サイド

「…どちらがランサーのマスターだ?」

切嗣は困っていた。目の前でランサーのマスターらしき2人が所有権について争っているからだ。

「デイルは、私をマスターとして認識したのよ!?つまり、デイルは私のサーヴァントよ!」

「何を言う!ソラウ、君も見ていただろう!私が!水銀で!陣を描き!聖遺物を配置し!私が詠唱し!召喚したのを!そして!マスターの証明である令呪が!私の手にある!つまり!私が!私こそが!ランサー!デイルムッド・オディナの!マスターだ!」

「…なんだ…この茶番は…」

切嗣が持っている、おそらく対魔術師においては絶対の強さを誇る切札『起源弾』は、使える数がかかなり限られている。無駄な弾は、決して出せない。そこで切嗣はマスター

らしき男性に威嚇射撃を行うことにしたのだが…

「…あれ…!? コンテンダー以外…ない…!?」

そう。ここで切嗣はなぜか自らの拠点に、『トンプソン・コンテンダー』と呼ばれる自身の魔術礼装以外の武装をほとんど置いてきてしまっていたのだ。それ以外で使えるものといえば…

「……………なんでこんなものが入ってるんだ?」

なぜか存在している無音性のバリカンだった。

また所変わって

ケイネスサイド

「なぜ分らない!? この私が! ケイネス・エルメロイ・アーチボルトこそが! ランサーのマスターだ!」

「いくら証明があっても、マスターを選ぶのはサーヴァントよ! サーヴァント本人に選ばれたのだから、私がマスターよ!」

未だに言い争いを続けている2人。しかし、ケイネスの背後に切嗣がいた。なぜか手にしているカンペには、

へそこの女。今から、こいつの頭を刈る。気づかれないよう、時間稼ぎを

(…報酬は?)

〈ランサーのマスター権〉

(乗った)

そうしてソラウは、適当なことを言いながら切嗣の接近を補助する。

そして、

「む!?なぜだ!なぜ私の髪が刈られているのだ!!誰だ!私の髪を刈っているのは!」

「あ、待て、ランサーのマスター。今後ろを向いたら…」

しかしケイネスは、グルッと後ろに首を回した。いや、回してしまった。その結果、

ゾリツ…

「ギャーーーーー!頭がーーーー!」

刈っている途中に動くなどすれば、頭の地肌を傷つけるのは当然である。ケイネスもこの例に洩れず、頭から大量の出血をしてみました。

「あーあ、ケイネスったら。髪を刈っている時に動かないなんて、当然じゃないwww

…で、あなた、報酬」

「これを使え。そうすれば令呪が1画減るが、マスター権を持つことができる」

そう言いながら、冷静を装い、内心では疑問符があふれた状態で、やはりなぜか持っている偽臣の書をソラウに手渡す。

「助かるわ」

「き、貴様ら…」

「じゃあね。『ランサーのマスター』ケイネス」

「ぐっ…くそが！令呪をもって命ずる！ランサー！今すぐここに来い！」
「!?」

しかしここでケイネスは、ランサーを令呪で呼んだのである。

「不本意ですが…ランサー、ここに」

「再び令呪をもって命ずる！ランサー！この男を殺せ！」

「…はっ」

（ぐっ！まずい！マスターだけならともかく、サーヴァントまで来るとは！このままだと…！）

そして、ソラウの前だからカツコつけようとしたのか、ケイネスの目の前から動かず、切嗣に対し背を向けたまま槍で貫こうとした。

「アラララララーイ！」

ドゴン！

「グホアウ!?…!?ゴフツ…」

しかし、そこでライダーがデイルムツドを神威の車輪『ゴルディアス・ホイール』で轢いてしまった。

そしてデイルムツドは、カッコつけて背面突きをしようとしていたので

「グハツ…」

その自慢の槍が、

自身の心臓…を貫いていた。

「グハツ…!?クソ…そこまで…そこまでして聖杯が欲しいか!?ライダーと組み2対1な
ど!卑怯にもほどがある!我が恋慕を!踏みにするなど!万死に値する!馬に蹴られ
て!死んでしまえー!グハツ…」

「うう…デイル…」

そしてランサーは、自らの認めた愛するマスター、ソラウに涙ながらに看取られ、その場から消えた。

「…なんか勝っちゃった…」

「マスター!?大丈夫か!?!」

「あ、ああ…なんか…後味の悪い勝ちだった…」

「…？そうか」

衛宮切嗣、聖杯戦争初日を後味の悪い勝利で終えた。

「しかし…なんでトンプソン以外の武装が無かったんだ…？」

アーチャー、冬木を散歩する…お、アサシンさん、動くのですな？

始サイド

繁華街 新都

「さて、どうしようか…」

この男、アーチャー『相川 始』は、呆然と立ち尽くしていた。何故なら…

回想

《アーチャー、お前から見てどんな感じだ？冬木の街は》

《賑やかで…どこか闇も多いように感じる…地理的に言えば…少し、人がいるところが多いな…そして、新都のほうはかなり遮蔽物があるな…》

始は、冬木の街を散歩…と言いたいが、立地などを調べていた。基本的にアーチャーは、弓などの飛び道具で戦うクラスだ。こういった立地の確認は意味のない行動に見えて実はかなりの意味があることなのである。

《このようところで魔術での戦争か…あまりしたくはないものだが…》

《仕方ねえだろ…それが聖杯戦争なんだから…それより、金は持つてつてるよな?》

《…? ああ。 雁夜がうるさかったからな。 3000円くらいなら》

《せつかくなんだし、そつちで楽しんでこいよ。 晩飯も食つてこい》

《は? なんで》

《せつかくこつちの世界に帰つてこれたんだろ? なら、ちよつとくらい楽しんでもいいんじゃないの? 今を生きてるつてことをさ》

通常の魔術師と価値観の違う雁夜は、始にこの世界を少しでも楽しんでもらいたかつたのだ。

《…》

《決まりだな…こつちで話はしとくから、そつちは楽しんでこい。 良いな?》

《…わかつた》

《OK。 じゃあな…》

回想終了

こんなことがあつたのだ。

つまり、楽しまないと帰れませんという状況になつたのだ。 そして始は、

「…その辺の店回るか」

考えることを一時やめることにした。

居酒屋 『CANJARRADA』

「お前も何かと苦労してるんだな…」

「分かってくれるか…師はうっかりで敗退するし、その癖して事後処理はお前の仕事って…はあ…泣きたい…」

「その…前を見て生きろ…そう言うしかない…」

「そうだな…確かにアサシンも頑張ってくれてるしなあ…」

なぜか始は、うなだれながらやってきた言峰綺礼とともに度数の軽い酒を飲みながら、唐揚げを食べていた。言峰？キープボトル（度数高めの高級ワイン。キープ主はもちろん時臣）を勝手にグイグイ飲んでるよ？にも関わらず、ほぼシラフな言峰。パネエ…。

「代金は私が持つておく。師の金庫から『ちよつと』だけ拝借させてもらったのでな…金には余裕がある」

「…そうか…まあ、事後処理はしてるんだから、それなりのリターンはあつてもいいだろう…」

その頃の時臣

「な!?!金庫から…金が盗られてる!?!しかも100万つて…誰だ!?!」

「今日は非常に、楽しい酒だった。ありがとう」

「いや、こつちも楽しめたよ。しかも、代金まで持ってくれるなんて、助かった」

「そうか…ああ…その…なんだ…」

「…？」

帰り際に別れようとする言峰と始だったのだが…言峰が、何か言いたそうな顔をしていた。そして数十秒が経ち、言峰はようやく口に出した。

「…その、私と、『ともだち』に、なってはくれないだろうか？」

「え？」

それは、意外な言葉だった。特に、今は聖杯戦争中だ。サーヴァントが敵マスターの友人になることなど、もつてのほかだ。しかし、始は。

「…俺なんかでよければ。また愚痴りたい時にはここに来よう」

「…ありがとう」

「それくらい、どうという事はない。また、困ったら俺を頼ってくれ」

「…分かった。私もお前が…いや、『始』が、ピンチなら、できる限りの助力はしよう」

「…！ああ…よろしく頼むよ『綺礼』」

「もちろんだ。では私はこれで…」

「じゃあな」

始は、突然呼び捨てで呼ばれて、その様子にかつての親友を重ねたが、すぐに返答して綺礼と別れた…。

ここに、アーチャーはマスター、アサシンはサーヴァントが知らないまま、友人関係というアーチャー・アサシン同盟が成立したのである。

所変わって

綺礼サイド

《アサシン》

《はっ。ここに》

綺礼は、霊体化させているアサシンを呼んだ。

《喜ぶべき事があった》

《なんでしよう？》

《…友人ができた》

先ほどの事を話すと、

《!?おい！皆の衆！マスターにご友人が出来た（デレた）そうだ！》《それは真か!?》《マスター直々に聞いたから間違いはない！》《ウォーラー!!?》

《いや、待てアサシン。そこまで言うことか…?》

《当然です！あなた様に我々以外の友人ができる事は、我々にとつても大きな喜びなのです！して、誰でしょう？》

少し考え、そして腹をくくり、友人が誰かを話した。

《…アーチャーだ》

《…え？》

《サーヴァント、アーチャーだ》

《《…えー！?!》》

《…うるさい》

《はっ！すいません…》

《いや、当然か…マスターとサーヴァントが友人になる…しかも、敵同士など…》

やはり、間違いだったのか…一瞬そう考えた綺礼だったが…

それを意外な人物が止めた。

《…でも、…それでもアーチャーさんは、マスターと、ともだちになってくれたんですよ

…？》

《…ちびアサシン…》

《…だったら、大切に、しよう？…わたしたちは、いつ、うらぎられても、おかしくなかつ

た…から》《…》《…確かにそう…だったな…》

《…そうだな。すまん、アサシン達。私は父も、師も裏切ることとなる…それでも、付いてきてくれるか？》

《《…当然でございませう！》》

《…ありがとうございます。こんなことを話してすぐになんだが、偵察をお願いしたい》

《分かりました！》

《…散！》

バババババ…

こうして、綺礼は始と友になり、アサシン達とも絆を深めて、冬木の夜の闇へとアサシン達を放った…。

所戻って

始サイド

「ただいま…」

「お、帰ってきたか」

「お帰りなさい！ 始さん！」

「おう、帰ってきたか。アーチャーよ」

始は、十分楽しめたと思ったので、こうして間桐家に帰ってきた。しかし、所持金が

ほとんど使われてないことに疑問を覚えた雁夜は、

「…おい、お前…もしかして、タダ酒飲んできた…とかないよな?」

「それはない。たまたま飲みに行ったところで、気前のいい神父がいてな…話をしていたら妙に気があつて、代金をあちらが持つてくれたんだよ。で、その後こそいつと友達になつた」

「ほう…で、どこの誰じゃ?」

「綺礼」

「…?ちよつと待てい、そいつのフルネームは?」

「言峰綺礼」

「はあ!?アサシンのマスターではないか! (じゃねえか!)」

「雁夜おじさん、おじいちゃん、近所迷惑、うるさい」

「あ、すいません」

「ははは…」

こちらでもやはり驚かれた。特にアサシンは『マスター殺しのサーヴァント』として知られている。不意打ちでの敗退を危惧したのだろう。しかし、

「でも、あいつは多分俺を攻撃したりしない」

「!?なんでそう言える!?そいつはサーヴァントのマスターなんだぞ!?表面上ではいくら

でも誤魔化せる！」

「それでも!!俺はあいつを信じる!あいつは、俺に友達になってくれと言う前、言いにくそうだった!恐怖しているようにも感じた!一瞬、俺がサーヴァントだからとも思った!けど、違った!あいつは、ただ友達が欲しかっただけなんだ!俺が友達になるって言った時!あいつは!本当に幸せそうだった!ハア:ハア:もし、あいつに攻撃するようなら、俺が!お前達に牙をむく!」

つい、熱くなつてしまった始の横にいた桜が、

「始さん…怖いよ…」

「……」

始は、その一言があるまで、桜が横にいたことをすっかり忘れていた。そして罪悪感が湧き、

「……ごめんな…桜ちゃん。すまん雁夜、もう寝る…」

「あ、ああ…」

「おやすみ…」

バタン

「綺礼…お前は俺の友達だ。だからこそ、お前を失うくらいなら…俺が消える…」

そう呟き、自分が死んでしまった時のことを思い出し、眠りについた…。

番外編

番外編

イリヤ、Sドリーム

イリヤサイド

???

「…んゆ?…あれえ!?ここどこお!?えーと…確か…冬木でキリツグが見つ付けてくれたお屋敷でお母様と一緒にお昼寝してたはず…それなのに…」

いきなりの事態に困惑するイリヤ。そこに、宝石で出来ている剣のような物を持ったおじいさんが現れた。

「君は、ワシが連れてきたのじゃ。あ、ワシの名はゼルレ…あ、いや、『ほうせきじいさん』とでも呼んどくれ」

「ほうせきじいさん。ほうせきじいさんはなんでイリヤをここに連れてきたの?キリツグとかお母様じゃダメなの?」

「…えーと…言ってしまうてはいけないのかも知れんが…ここは夢の中じゃ。そして、ここに連れてこれるのは、子どもくらいなんじゃ」

「へー」

「そして、君には大事な話があるんじゃない」

「…?」

「わからないこともあるかも知じやが、まずはこれを見ておくれ。これは『あるかもしれない』事じや」

そして、映像が流れた。

ザザ…

そして映し出された映像には、

『グハツ…くっ…ここまで、かな?』

『生きてるか!? マスター!』

『ちよつと…厳しい、かな。けれど、ボクたちが諦めたら…』

『アイリスフィールに、イリヤ、リズや…セラもあいつに、狙われる…』

血まみれの切嗣とブレイドに変身してはいるものの、頭や肩などのアーマーが壊されている剣崎がいた。

「キリツグ! セイバー! なんぞ!?!」

「落ち着けい。まだ終わつたらんからの」

そして、映像には『鎌を持った化け物』がいた。

『ギャギャギャギャ！無ダ…すベテはム駄だ！ひとしく、無ザマに死んでロ！』

『くつ…ウエエエイ！』

ブレイドは、掛け声とともにブレイラウザーで斬りかかる。が、

『ぎやウー！』

バグ…バギイ！

『…なっ!?!』

『ギャギャ…シね！』

『グア!?!』

『セイバー…グフ…』

なんとその化け物はブレイラウザーの刀身を、喰うことで破壊してしまった。

そして攻撃を受け続け、動けない2人に化け物が迫る…

『ギャギャギャギャギャ！もうお前ラはオワリだ！とつとトシね！』

ザシユ…

そして2人に、逃れられない死が与えられた…

ブツン…

「…なに…? なんなのこれ? こんなイリヤに見せてなんになるっていうの!」

「すまん…それにもう一つ見てもらいたい…」

「また…人が死ぬの?」

「…すまん…」

「…もういいよ…そんなに悲しい顔した人、放っておいたらキリツグに怒られる…」

「…すまん…」

「そればかりだね? ほうせきじいさん」

ザザ…

次の映像には、

『ハハハハハ!これが!俺の!芸術だ!ギヤハハハハハ!おい、お前ら!これが!俺の
真正正銘の魔術だよ!ギヤハハハ!』

『狂ってるな…』

『あ、ああ…そう…だな…桜ちゃんは…お前の力でも、ダメなのか?』

『…すまない…死者蘇生までは…不可能だ…』

『…そうか…』

渉が老若男女、様々な人間の死体を椅子やベッド、楽器にドア…その他にもいろいろな芸術に変えられてしまっていた…そして、その中には、ただ殺され十字にかけられただけの桜の姿があつた…

「なに…これ…ウツ…」

「あまり…見ない方がいいかものお…」

「…見るよ。我慢する…」

「無理になつたら言うんじゃよ？」

「うん…」

『しかし、あいつの魔術は厄介だな…』

『…ああ…グツ…』

『!? 雁夜…お前、腕を…!?』

『ああ…ちよつと切られた…だけど、まだ大丈夫…』

『そんなわけねえじゃん』

なんと渉が話していた2人にナイフを投げ、また出刃包丁を持って突っ込んできていたのだ。

『!?』

反応しきれなかった2人には…

グサグサ…ザシユ…

ナイフが刺さり、そして

首から上を飛ばされた…

ブツン…

「ウウ…オエ…」

「すまん…本当にすまん…」

「ううん、大丈夫…それより、ほうせきじいさんは？」

「…？」

「あんなの見たら、ほうせきじいさんも嫌でしょ？」

「…まあ、あまり見たくないはないの」

「…じゃあ、本題は？」

「…強いな…」

「…え？」

「あのようなものを見ても逃げないその姿勢、ワシらも見習いたいもんじゃ…」

「大人はみんな逃げちゃうの？」

「大人はな、強い力を目の前にするとな、よほどの者でない限り逃げてしまうもんなんじや…」

「…そつか…」

「そういうものじや。そして、本題じやが…これをやろう…」

ほうせきじいさんは、イリヤにカードのような物を2枚渡した。

「もし、どうにもならないようなことになったら、それをこちらはセイバー、こちらはアーチャーに渡してくれ」

「なんなのこれ？何に使うの？」

「…それはまだ言えん……ネタバレになるからの」

「？ネタ…バレ？」

「さあ、夢が覚める時間じや。またの」

「え!?!ちよ…」

ブウン…

衛宮邸

「…夢…?だったの…かな？」

先ほどのことはやはり夢だった…そう思ったイリヤだが、

「え!?!これって…あのときのカード…」

最後に手渡されたカードがイリヤの横に置かれていたのである。

「ふわくあ。あらく?イリヤ、どうしたの?」

「あ、お母様!?!ううん?何でもないよ?」

「…?」

そう言いながらカードを後ろに隠すイリヤだった…。

番外編その2 考えてみたら、すっかり忘れてた!

作者「そういえば…」

セイバー（剣崎）さん（以下セイバー）「どうした？作者」

アーチャー（始）さん（以下アーチャー）「おおかた、何かを忘れてたんだろ。リアルでも結構あるようだしな」

作者「それは言わないでください…！ってそうじゃなくて！」

アーチャー&セイバー「じゃあ何なの？」

作者「えー、あのー…『最終局面突入と大量召喚と決戦開始』で、キャスターのステータス出しましたよね？」

セイバー「あー。何かと近接系なキャスターな。何であんなのになるんだ？」

作者「出典から考えたんですよ。キャスターらしく無いけど、ギリギリキャスターになるようにはしたつもりです…まあ、それでもおかしくはありますが」

アーチャー「まあ、あれはおかしかったな。で、そのステータスが何だ？」

作者「考えてみたら、お二人のステータスを、まだ作ってなかったなって思い出しま

して。なので今回、簡単なステータス情報を、この番外編で公開しとこうかと」

アーチャー「なるほど…」

セイバー「設定自体は考えてたんだろ? 何ですぐに出せなかったんだ?」

作者「実は…今作書いてたら、設定してた方向性とちよつと違つてて…急遽、修正とかしてたら…」

アーチャー「ここまでお蔵入りだったと」

作者「はい…その通りです」

セイバー「まあ、とりあえずどんなのかを見てみようか」

作者「そうですね。じゃあ、まずはアーチャー、皆さんからです」

アーチャー

真名：相川 始

出典：仮面ライダーブレイド

性別：男

属性：中庸・混沌

ステータス

筋力B+ 耐久B

敏捷A+

魔力B

幸運C-

宝具A+

クラス別スキル

対魔力／B＋ 単独行動／EX

固有スキル

変身／不明（特定の姿に変身できる）

騎乗／A（幻想種など、一部の乗り物以外を乗りこなせる）

心眼（偽）／A＋（経験による先読みや危機察知）

人の想い／EX（今作オリジナルスキル。他の人の想いを力に変換できる。更にこのスキルは、宝具にも適用される）

作者「こんな感じですね」

アーチャー「このオリジナルスキルは、どういったものなんだ？」

作者「これは、他人から始さんへの想い（善意や感謝、尊敬などの正の想い）の強さの合計を自動的に数値化して、その一定量ごとに、ステータスが上昇していくという感じですよ」

アーチャー「なら、悪意や侮蔑、卑下などの負の想いの場合は？」

作者「それはほとんどノーカウントですが、あまりにも強すぎると、このスキルが機能しなくなります。その場合、ステータスの上昇も消え、再発動にも少し時間がかかります。でも、その度合いは全人類の約6割から受けたらぐらいなので、実質このデメリットは無いようなものです。」

アーチャー「このスキルが発動された形跡が無いんだが……」
 作者「これは終盤に使うので」

アーチャー「なるほど。あ、早く剣崎のも紹介してやってくれ……剣崎が拗ねてるから」
 セイバー「……拗ねてねえよ……ただ遅いから体育座りして、のの字書いて待つてただけだ」

アーチャー「それは拗ねて無いとは言わないだろ……」

作者「はい、すいません！続いてはセイバー、剣崎さんです」

セイバー

真名：剣崎 一真

出典：仮面ライダーブレイド

性別：男

属性：善・中立

ステータス

筋力A＋ 耐久B

敏捷B＋

魔力B

幸運D

宝具A＋＋

クラス別スキル

対魔力／B＋ 騎乗／A＋

固有スキル

変身／不明（特定の姿に変身できる）

魔力放出（剣）／A＋（武器や自身に魔力を付与し、瞬間的に放出することで、能力を向上させることができる）

カリスマ／E（軍団指揮のスキル。少人数のグループでなら、かなりの統率ができる）
心眼（偽）／B（経験による回避能力など）

人の想い／A＋（上記と同様）

セイバー「…なんで同じスキルなのに、ランクが落ちてるんだ!？」

作者「あー…それは、あなたが『仮面ライダーディケイド』に出てきた『剣崎さん』だからです」

セイバー「…?どういうことだ?」

アーチャー「作者の言うには、本来の『仮面ライダーブレイド』でのお前ならともかく、『仮面ライダーディケイド』に出ていたお前には、運命に対して一種の諦めみたいなものを感じたらしくな…」

作者「そういう解釈があつて本来ならEXランクなんですが…A＋まで落とさせてもらいました」

セイバー「…ウゾダドンドコードン!」

作者「すいません…本当にすいません…!」

アーチャー「あと、俺たちともに宝具の説明が無いのは何故だ？」

作者「それやったらネタバレになるので……」

セイバー「それもそうか……」

アーチャー「（それだったら、人の想いのスキルもネタバレだと思うが……）魔力放出（剣）の（剣）については、f a t e / g oのハロウィンエリザベートの魔力放出（かぼちや）のようなもののバリエーションだと思ってくれ」

作者「今回はこんなところで、終了したいと思います。いつも、こんな駄作であり駄文な今作にお付き合いいただき、本当にありがとうございます」

セイバー「もし指摘とかあれば言ってみてくれ。なるべく対処するらしいから」
アーチャー「感想も励みになっているようだしな。一応、感想が来たら返事をするつもりらしいが、時間の都合もあるから、すぐに返らないこともあるだろうが、その時は待つておいてやってくれ」

作者&セイバー&アーチャー「それでは、今後ともよろしくお願いします」

聖杯戦争3日目。キヤスター、始動。

3日目と進行状況と行動開始

3日目

教会

綺礼サイド

「ほう…今回は展開が早いのうち…バーサーカーとランサーが既に敗北しているとは…」

「確かに、かなりの早さです。『バーサーカーはともかく』、ランサーが敗退するのはかなり早いでしょう。なにせ、三騎士のうちの一クラスですので」

「そうだな…『バーサーカーはともかく』な」

「…申し訳ありませんでした…」

「全く…うっかりでバーサーカー召喚し、うっかりで令呪による自害!?!とんだうっかり誤爆だな!もう少し考えて冷静に…」くどくど…

「—?—〇」↑説教くらい過ぎて心が滅されてゆく時臣

「全く…それなのに師は、私に事後処理は全て任せるし…教会は何でも屋ではないことを自覚してもらいたいのですが…」

「…返す言葉もございません…」

教会では、聖杯戦争の進行状況を確認している綺礼と、その父、璃正が時臣に説教をしていた。

「…ハア…もう済んだことだ…このくらいで止めておくかの…」

（「いや、もう師が粒子になって消えそうになっているのですが…ま、いつか。事後処理は全てこちら持ちなんだから…」）

「…サー…」↑説教くらい過ぎて本当に滅されようとしている時臣

「しかし…綺礼、お主かなり嬉しそうな顔をしているが…どうした？」

「いえ、少し友が出来ただけですよ…」

「ほお…なら良いが…」

所変わって

切嗣サイド

切嗣は、ある人物に連絡を取っていた。

「ああ…頼む！あんただけが頼りなんだ！」

「……………」

「報酬!?そんなものいくらでも払う!頼む!アイリを助けてくれ!」

「……………」

「本当か!?分かった!こちらでも準備する!」ガチャ。

「…OKだったみたいだな」

「ああ!これで…アイリを救える!」

「あらく?私がどうしたのかしら?」

「うわ!」

期待していた返事を貰い、喜びに身を震わせていた切嗣と内心冷や冷やしていた剣崎の元に現れたのはアイリだった。

「…誰に電話してたのかしら?舞弥さん?あの人も女の子なんだから、ちゃんと女の子させなきゃダメよ?」

「ちゃんと女の子って…?どういうことなんだい?しかも、電話の相手は舞弥じゃないよ」

「…………ふくん?そう…私や舞弥さんに飽き足らず、他の女にも手を出してるのね!?この浮気者!人でなし!色情魔!」ダッ!

「」

「…おい。アイリスフィールが勘違いしたまま何処かに行ってしまったぞ?」

「……………はっ!急いで追いかけないと!」

「やれやれ…俺の分の準備をしとくか…」

切嗣はアイリを追いかけ、剣崎は電話の人物に会う準備をしていた。

所変わって

渉サイド

「そろそろ。動くのか」

「まあね。…バーサーカーとランサーが退場してるのか…どつちも戦闘力が高いクラスだから…キヤスターのステでもちよいきついし…」

3日目に本格的に動くと言っていたので、それまでは本当に動かずに過ごしていた。そして、どの陣営を狙うかの話題になった。

「どうする?どこを狙う?」

「…ライダーか、アサシンだな…」

それは意外な答えだった。基本的に三騎士のサーヴァントに劣るクラスを狙うと言ったのだ。これにはキヤスターも理由を問う。

「…何故だ?」

「アサシンはマスター殺しだからな。あと偵察に徹されて後々不利になっても困る。ライダーは宝具が複数…最悪、2、3個は覚悟したほうがいいからな。後々厄介になるなら先に潰しかかったほうがいいってこと」

「なるほど」

確かに渉の言い分は的を得ている。敵がどのようなサーヴァントかは、ずっと動かずにいたので分からないが、基本的にアサシンとライダーのクラス特徴は掴んでいた。

「では、夜に動くか…そろそろ体が鈍ってきてた所だ」

「そうだな。…そういえば、最初の頃に比べてお前、かなり言語が流暢になってきたな？」

「この世界にも慣れてきた。そろそろ慣れもする」

「ま、それもそっか。さ、準備するか」

「ああ…」

ここに、最悪のマスターとサーヴァントが動き出す…

所変わり、時間も過ぎ

夜

ウェイバーサイド

「ここなのか？サーヴァントの気配がしたのって」

「おう。しかし、かなり禍々しい気配だったわい。生前でも、あれまでの気配を持つもの

は、両手で数えられる程度だったからな…気をつける、ウェイバー」

「ああ…？待て！ライダー！」

「あん？どうしたウェイバー！」

「これは…結界!? まずい！退路を塞がれた！」

「!?ほう…そこまでできるのか…ということとは相手は…」

「ああ…」

「キヤスター！」

「…よく気付いたな。確かに、結界を張れる時点で気付かれるだろうな」

「ま、いいだろ？キヤスター。俺も殺し足りなかつたんだよ…さあ、暴れようぜえ！」

「…！来るぞ！ライダー！」

「分かっておる！」

マスターも前線に立ってるタイプか…そうウェイバーは思っていた所、

ガキン！

なんとキヤスターが、そのクラスに合わない接近戦を仕掛けてきた。だが、早々に攻撃を喰らうことを良しとしないライダーは、その攻撃を自らの剣で受け止める。

「…チツ…さすがに、いきなり首は狙いすぎたようだな…」

「…初手から迷わず首を狙うとは…かなり自信があると見た。そして…その得物は、黒いモヤに紛れてはおるが…鎌であろう?」

「今の一瞬のつばぜり合いで、そこまで知られたか…さすがはアレクサンダー大王…その戦闘センスは抜群…ということか」

「…!」

ライダーは、一瞬の攻防でキャスターの得物は特定できたが、キャスターはなんと、ライダーの真名を言い当てたのである。

しかし、その程度では弱さを見せないことが、このライダーの強みでもあった。

「ああ! そうだ! 我こそが! 若き名をアレクサンダー、今生の名は征服王! イスカンダルである! 真名がバレた? だからどうした! 我は! そのような小さなことは気にせないのでな!」

「ゲツ…真名バレしてもビビらずに突っ込んで来るパターンの英霊かよ!」

「落ち着け…こちらは武器がバレただけだ…」

「…それもそうか。じゃ、俺も頑張りますかね…」

渉は、自分の着ている、黒に限りなく近い紺色のコートの中から、自らの魔術礼装を取り出す。それは…

「なんだあれ…!? 鉈!? 鉈があいつの魔術礼装なのか!?!」

鉈。それも、両刃式の極めて殺傷能力の高いものだった。

「じゃあ…殺らせて貰おうか! まずはこれだ!」

「!? これは…移動障害か! ライダー! そっちは!?!」

「少し、体が重くなった程度だ! そちらは!?!」

「ちよつと…きついかな!? だけど、そっちは抑えててくれ!」

「ウエイバー! お前にやれるのか!?!」

「…やれるかじゃない! やってみる!」

「へえ…なら、耐えてみるよ! クソが! ああん!?!」

「くっそ…」

イスカンダルに対し大口を叩きはしたが、やはり相手は刃物を持った殺人魔術師。移動障害をかけた相手に容赦なく斬りかかる相手には、ウエイバーも回避に徹するしかない。しかし、その中でウエイバーの隠れた才能が開花しつつあった。それは、

（「あれ? なんだ…? この感じ…。あいつ、少し…焦ってる…?」）

そう、洞察力である。そしてその読みは的中することとなる。

「うーぐあ!?…ガアアアアア!」

「どうした! マスター!」

渉はいきなり頭を抑えて苦しんでいた。渉の魔術は、かなり強力なものの代わりに、脳への負担が異常に大きく、半強制的に短期決戦を強いられ、しかも20分持つかどうかという世界なのである。さらにキャスターの焦りから

ジジ…

「…ライダー! 結界が弱まった!」

「そうか! こちらに來い! ウエイバー!」

「ああ! ここは一旦退くぞ!」

「おう! 神威の車輪!」

結界が弱まった際にライダーは宝具を呼び寄せ、ウエイバーと共にその場から離れた。

「ぐあ…くつそ…逃げ、られたか…」

「こちらも今日は、退いたほうがいい。アサシンに見つかつても厄介だ」

「確かに…そうだな…」

ライダーが退き、アサシンの存在を警戒したキャスターは、渉を連れてその場を離れ

た。

考察と聖杯除去と飲み会

4日目 朝

切嗣サイド

?????

切嗣は、剣崎とアイリを連れてある場所へと向かい、到着した。

「ここか…待ち合わせの場所は…」

「ああ。ここで待つていれば、使いの者が来ることになっている」

そして、待ち合わせの手順を確認していたのだが…。

「なるほど…しかし、切嗣…」

「…なんだい？」

「アイリスフィールがめっちゃめっちゃ怖いんだが…」

剣崎が指さしているのは…

「ふふふふふふふふ…さあ来なさい！泥棒猫！私から王子様を奪うなんて60年早い

「のよー……ここで血みどろにしてあげるわ……！」

「切嗣……あれじゃヤンデレになるぞ……作者もタグの文字不足に悩んでるんだから、考えて接してやれよ……」

「いきなりメタいな……まあ善処してみよう……お、来たか」

そして、切嗣一行の前に現れたのは……

「もう！人は待たせちゃダメって、小さい頃から教えてたよね!?なんで守ってくれないのかな?」「ケリイ」は……

「ああ……ごめんね「姉さん」。僕の奥さんが少し怖かったんだよ」

「……………え?」

「姉さん!?!」

所変わって時間も少し戻り

3日目 夜

ウェイバーサイド

ウェイバーとイスカandalは、先ほどの戦いの考察をしていた。

「なるほどのう。負担持ちのマスターか」

「ああ。多分、本気でやろうとすればするほど、負担が大きくなるタイプだ。魔術のレベ

ルは高いけど、そこを突けば「マスターは」なんとか攻略できる、けど…「マスターは」ヤバイ」

「ほう。何が見えた？」

「…ステータスが…キャスターの域を大きく超えてる…！魔力Bで、筋力、敏捷がAっておかしいだろー！なんの英霊なんだよ、あいつ！」

「ふむ…そのような輩に心当たりはないが…」

「…ライダーには何が見えたんだ？」

「なんとというか…内側側面にバケモンでも飼ってるかのような気配だったわい…おそらく、出させたら危険なタイプだな…」

「…」

そう、キャスターのマスターに弱点があることは知れたが、キャスター自身の情報が圧倒的に不足していた。当然と言えば当然だろう。近接戦闘をするキャスターなど、おそらく世界中を探しても、そういないはずなのだから。

「…この度の聖杯戦争…相当荒れるのよなあ…」

「…こんな規格外が居るんだから…」

ウェイバーとイスカンドルは、聖杯戦争の雲行きが怪しくなったことを肌で感じていた…

所戻って

切嗣サイド

使いの者は、

「もう！また姉さん呼び！ここではちゃんと名前でも呼んでよね！」

「あ…ははは…ごめん「シャーレイ」。謝るよ」

シャーレイだった。

「うん♪許す！じゃあこっちきて！」

「あ、シャーレイ！待ってくれ！すまんセイバー…」

「どうした？」

大方、アイリを連れてきてくれとだけ言われるのかと思っていた剣崎。

しかし、そこで受けた言葉は、

「アイリをお姫様抱っこで連れて行くから…置いてかれるなよ？」

「？（OWO）ウエイ!？」

ある意味の死刑宣告だった…

なお、お姫様抱っこをされていた時のアイリの顔は、見事なまでに蕩けきっていたという…

「ほらほら！早く！あの人待つてるよ！」

「よし、ようやく…ハア…ハア…追いついた…ゼエゼエ」

「切嗣！またやってね？」

「ああ…ハア…ハア…約束するよ」

「…わざわざ変身して、マツハ使って来た俺には、労いの言葉はないわけだな？」

「ほら、行こう」

「スルー…か…」

着いた先にあつた木の小屋の中にいたのは

「やあ、久しぶりだね切嗣。固有時制御の乱発、してないだろうね？」

「切嗣…教えてやろうか？あんたがここに来るまでにあたしが吸い終えたタバコの吸い殻の数を…」

「…待たせてごめん。父さん、母さん」

切嗣の父の父「衛宮矩賢」と育ての母「ナタリア・カミンスキー」だった。

数時間後…

「また来るよ、母さん」

「…ああ…またね」

「切嗣…無茶はするなよ？お前だけの体じゃないんだからな？」オロオロ…

「大丈夫だよ、父さん。僕も、頑張るからさ」

「キリツグ、近いうちに会いましょう…」

「ああ…その時は…ね」

「ケリイ…死なないでね…？また、一緒に遊ぼうね？」

「分かってるよ姉さん。また、ここに帰ってくる…行こう、セイバー」

「ああ…アイリスフィールを頼んだ」

「…任せておけ（任せときな）（任せて！）」

「じゃあ…」

「…いつてきます」

切嗣は、自分の両親と姉に妻を任せ、再び聖杯戦争に足を踏み入れる…

「しかし…まだ夜まで時間があるな……それに移動とかで疲れたし……セイバー、今日は動

かずに、飲みにも行くかい？もちろんセイバーの分も出すよ」
「…なら、行こうか…」

それでも、自陣営の疲弊が分かるくらいには、余裕があるようだ。

所変わって

居酒屋『CANJARADA』

「で…」

なんでアサシン陣営とアーチャー陣営が飲み合ってるんだ!？」

そこには、串カツ（豚とミノ）と鳥の軟骨のから揚げをつまみに、酒を飲んでいる始とキープワインを飲んでいる綺礼、そしてキープしてある焼酎（キープ主はやはり時臣）を飲んでるアサシンと雁夜がいた…。

「…どうしてと言われるてもな…」

「友人同士で飲み合うのは悪いことかね？衛宮切嗣…」

「…！お前！言峰綺礼か！」

「まあ座れ。お前たちも飲みに来たのだろう…」

これでは他の客に迷惑になると考えた綺礼は、とりあえず座らせようとする。しかし

…

「…!?」

「…!!」

「「どうした？アーチャー（セイバー）？」」

「ちよつと来い…」

「…ああ…」

「…？すまん、アサシン。少しトイレに行ってくる」

「承知しました」

その場から離れた剣崎と始に不審感を持って、それについていった…

所変わって

綺礼サイド

CANJARADAの裏の路地

「どうなっているんだ？」

2人のことを遠目で見ていた綺礼。そこにいたのは、

「なんで、ここにいるんだ！始！」

「……こちらの台詞だ……どうしてこの聖杯戦争に参加している……？ 剣崎！」

お互いの存在に疑問を持つ2人の姿だった。

なぜここにいる、そう詰め寄る始。だが、

「……ハッ！来るな！」

その手は、剣崎によって弾かれた……

「来るな！来ちゃダメだ！近づいたら、ジョーカーが……」

「大丈夫だ！俺の手を掴んでくれ！剣崎！」

「嫌だ……暴れさせたくない……来るなくなるなクルナ来るな……」『turn up』

「……!? 剣崎!?!」『change』

その異変に気がつき、変身する始だったが……

「……来るなああああああああああ！」

『スピード10、J、Q、K、A、ロイヤルストレートフラッシュ』

「……!?」『ファイア、ブリザード、ロック、メタル、リフレクト』

いきなりのロイヤルストレートフラッシュに驚きながらも、始は手持ちの防御に使えそうなカードを全てラウズした。そして手を前に出すと、そこから前方にオーロラのよ
うな盾が幾層にも重なって出現した。

「…ウエエエエエー！」

「ぐっ…！耐え切ってくれ…！」

照射版ロイヤルストレートフラッシュをギリギリで抑える始。だが、

ビシ…ビシ…

それでも盾を壊そうとしている。そして…

バリン！

「くっ…！剣崎…お前は…どうしてしまったんだ…！」

「ウアアアアアアアアア！」

勢いをギリギリまで殺した所で、盾が壊れた。

照射版ロイヤルストレートフラッシュを受け、倒れた始を見ていた変身解除後の剣崎の目には

泪の跡があつた。

そして剣崎がフラフラと立ち去った後、

「大丈夫か!? 始!」

綺礼はようやく出てこれた。

「…ああ…なんとか…」

「今、回復魔術をかける! じっとしている…」

「助かる…」

綺礼は、自身の得意とする回復魔術を使用し始の体を癒す。しかし、

「剣崎…お前とは…戦うことでしか…分かり合えないのか…?」

そう言つて意識を落とした…

勘違いと仲直り

セイバー（劍崎）サイド

「はあ……はあ……」

始に、ロイヤルストレートフラッシュを浴びせた劍崎は、その眼の中の光を失くしたまま、ふらふらと歩いていった。

（「俺は……何をしたかったんだ……」）

その疑問に答えを出せないまま、衛宮邸に戻ろうとした。

「待てセイバー。お前には、やらねばならぬことがある」

「……!?!」

そこに現れたのは、

「お前は、私の友に許されざることをした。それを懺悔する義務がある」

綺礼だった。

所変わって

切嗣サイド

「なあ衛宮。お前のところのサーヴァント、遅くないか？」

「そういうお前のところのアーチャーも遅いだろう。いちいち気にするのか？」

「いや、別に……」

さすがの切嗣と雁夜も、酒を飲みながら自身のサーヴァントの帰りの遅さを心配していた。そこで、

「そういえば、綺礼も遅いですなあ……ん？　そういえば……」

「どうした？」

何やら、気になる含みを持たせているアサシンに、切嗣と雁夜が詰め寄る。

「いやあー……話していいことなんだろうか……」

「話せ。さもなければ、僕のコートの内ポケットにある、コンテナーが火を噴くことになるが……」

「あ、はい。話します」

さすがのアサシンも、近距離から銃弾を撃たれるのは避けたいのだろう。その意思をすぐさま返す。

「…あれは、聖杯戦争の本格的開始の数日前…」

回想

遠坂邸

「…」キョロキョロ…

何かを持ってキョロキョロしている綺礼さん。そこに、

「どうされました綺礼。そんなにキョロキョロして」

「…!!アサシンか…」

と言いながら、アサシンの死角に、持っているものを隠した。

「何かありました?」

「いや、なんでもない。…今から少しトイレに行ってくる」

「??はあ…」

数分後

アサシンは、トイレに行っただけの綺礼がなかなか帰ってこないことに、気掛かりを感じていた。

「なかなか帰ってきませんなあ…探しに行きますか」

さすがに探しに行くことを決意したアサシン。その数秒後、

「おや？あれは綺礼。そしてあそこは…機械系に疎すぎるこの家庭で、唯一パソコンがある部屋ではないですか…」

そう、何故か存在するパソコンがある部屋に、綺礼はいた。それを覗き込むアサシン。だが綺礼は、なんだかソワソワしている。そしてその手には、

(「…?…なんだ?あの円盤は」)

「…」スチャ、ウイーン…

そしてパソコンの画面に映し出されたのは、

『天ノ川学園高校の伝説の学生が教える!同世代や先輩、はたまた後輩や子供との友情の育み方!』

「ブフウ!!」

「!?誰だ…!…しまった…アサシンか…ウアアアア!なんとということだ…師のお金を使つて無断で購入した資料の存在を、知られて…しまうとは…」

「いや、見るつもりはなかったんですよ。ただ、帰りが遅い上にどこにいるか分からず、探していたところ、ここにいた…それだけです!」

必死に弁解するアサシン。しかし、

「ここで見たことは口外するな…いいな?」

「は、はい…」

恐怖は、すぐ近くにも存在する。そんな当たり前のことをアサシンは、身をもって味わった。

回想終了

「…」

「すいません…綺礼も綺礼なりに、自身の他人との価値観の違いに、少なからず苦悩しているんです…。そして、その最中に友情に目覚めたと本人は言っています」

「…言峰綺礼に対しての考えを少し、変えなきゃいけないな…」

「あいつ…本当に友達が欲しかったただだったのか…」

「…だが、そんなことを話して、お前は何が言いたい?」

綺礼のことを考える二人だが、切嗣はすぐに本題に戻す。そして帰ってきた答えは、

「いえ、そういう経験から、綺礼の『少しトイレに行ってくる』は、暗に『誰にもバレないように行動したい』という意味を持つことと考えているのです」

所戻って

セイバー（剣崎） サイド

「くっ！この！」

「ふん！はっ！」

剣崎と綺礼は、裏路地で殴り合いをしていた。しかし、やはりと言うべきか、身体機能が人より優れているサーヴァントである剣崎が優勢だった。

だが、

「はあ…はあ…」

「ひとつ言いたいことがある…」

「なんだ!?!」

「私は、始からお前たちの生前の事情を少なからず聞いている」

「…！だからなんだ!」

「確か、お前は近づいたらジョーカーが暴れ出す…暴れさせたくない…そのようなこと

を言っていたな……」

「…そうだ！あいつはジョーカーだ！でも、心を持った人間でもある！だから…」

「なら、なおさらだ。言ってしまう。なら何故、お前の手を取れるほどの距離にいた始が、

ジョーカーにならずお前に手を伸ばし続けられたのだ？」

「あ、ああ…アアアアアアアアアアアア！」

そう、この世界にサーヴァントとして召喚された剣崎と始。しかし、その違いは『終わり方』にある。

劇場版での終わり方、つまりバニティカードに自ら封印され、内側から壊すことで14に対しての突破口を開く代償として、その命を落とした始。

それに対し、本編での終わり方、つまりジョーカー（始）との最後の戦いで、キングフォームの多用からアンデッド化（ジョーカー化）した剣崎が、仲間の前から姿を消し放浪していき、世界の破壊者を止めるストッパーとして動いていた剣崎。

その世界線、時間軸の違いに両者（始は、座にいた時に管理者に、少しながら教えて

もらっていたので、結果的には剣崎のみ）があまり気がつけない状況になっていた。つまり、

「俺は…勘違いで…始を…？」

そう、勘違いから引き起こってしまったことだったのである。それを十分悔いたと思つた綺礼は、

「ここに行け。そこに始がいる。もしもの時は私の使いで来た、とでも言えばいい」

そう言いながら、間桐家の場所と住所が書かれているメモを手渡した。

「始は今ここにいる。何せ私が連れて行ったからな。もし、謝りたいのなら、行ってこい」

「…分かった」

そうして去る剣崎を見ながら、

「…始の苦悩を本当に理解してやれるのは、私ではなくセイバー…いや、剣崎一真。お前だけだ」

その独り言は、綺礼以外の耳には入らなかった。

「…ここか」 ピーンポーン…

「はい…こんな時間にどなたかのか？」

「あの、すみません…」

「ん？あまり見ない顔だの。誰じゃ？」

「…言峰綺礼の使いの者です。始…さんの様子を見に来ました」

「ああ、なるほど。そしたら上がっていきなさい。始は奥の部屋で寝ておるからの」
「…ありがとうございます」

始の部屋

「…スウ…スウ…」

そこには、ケガの跡が少し残ってはいるが、穏やかな寝顔の始がいた。

「…始…ごめん…俺が、お前の事を聞かなかったから…」

そうしてうなだれていた剣崎の頭を、

ガシッ

いきなり掴んでくる手があった。

「…!？」

「…全く…お前は勘違いが多いな…それにどれほど振り回された事か…でも、今ではそれが懐かしい…」

久しぶりだな、劍崎」

「ああ…！本当に久しぶりだ！始！」

二人は互いの友情を確かめ合うように抱擁をした。そして、

「…悪かったな…今から飲みに行くか？さっきのところで」

「…そうだな！」

なんだかんだ、この二人は相性が良いようだ。

聖杯戦争5日目 Sを除去せよ／キャスターの急襲

Kの起源／殺戮のキャスター

5日目

衛宮サイド

山小屋

「あらー！切嗣ー！」

「おはよう、アイリ。1日顔を合わせなかったただけなのに、ずいぶんと会ってない感じがするよ」

「もう、切嗣ったら〜…私もよ♪」

「やっぱり一緒が一番だね、アイリ」

そんなラブラブ空間にいる二人の女性は

（「ねえ…ナタリアさん…」）

（「ああ…分かってるよ。シャーレイ…」）

(「雰囲気が甘すぎる！その上、あんなにラブラブだったら……」)

「奪えないじゃん……」ボソツ

略奪愛上等な方達だった。だが……

「ふっふっふ……奪えるなら奪ってごらんなさい！切嗣は私だけの王子様よ！」

「!?まさか……」

「聞こえてたつてのかい……」

この正妻、略奪に対しては地獄耳なのである。

「ははっ、ケリイは小さい頃から私といたんですよ？私を選ぶに決まってるじゃないですか。」

「ハッ……そんなもの。私はね、あいつが今のような立派な姿に育て上げたんだ。その際にもいろいろやつてるからねえ……私を選ぶに決まってるよ……」

「あら、今の正妻たる私を忘れて、そんなことを言えるのね。今の切嗣が私を選んでるのだから、私が正妻で当然じゃない……」

「「……………」」

「「……………」」

それを見ていた切嗣と劍崎は、

「女性怖い女性怖い女性怖い…」

「…切嗣、その…頑張れ」

「こんなものを見て頑張れと言えるお前が羨ましいよ!」

「…だが、こうも考えられるぞ?」

「…?」

「切嗣がただの甲斐性なしか、女性に無自覚に好意を持たせることをしているか、それか、あんなことになるほどに愛されているのか…? 感じて感じにな」

「うーん…甲斐性がないわけでもないし、無自覚に好意を持たせること…したかな? まあ、愛されるのなら、それはそれでいいかもね」

「…ダメだこのマスター。早くなんとかしないと…」

こんな正妻戦争と、恋愛^ごことに対して知識があまりない（作者もあまり知識あるとは言えない）切嗣の相手に困った劍崎を救ったのは、

「あー、その…君達? 本題、忘れてないかい?」

「「「…あ」」」

「…ハア…」

矩賢だった。

所変わって

渉サイド

「…暇だ…」

「暇だな」

聖杯戦争は魔術の秘匿を理由に、夜に行われることが暗黙の了解となっている。それは知っているが、やはり退屈なのは変わらないようだ。

「…あー…なんかテキトーに子どもでもささろう？」

「…それもいいかもな」

「じゃあ、そうしますか…あ、そういやキャスターはさ」

「…なんだ？ 渉」

「変装とかできる？」

「まあ、可能だが…」

「それやっというて。バレると厄介だから」

「分かった…だが、驚くなよ？」

「……？」

キャスターの最後の言葉に疑問を持つこと数分、

「やあ！ さ、行こうか！」

「……誰!？」

「いやだなあ！ キャスターだよ！ さっきの！」

「……………ハア!？」

「あ！ この姿での僕は、『志村純一』と呼んでください！ あ、『海東』ではありませんからね！」

「……？ なぜに海東？」

「……そういえばなんででしょう！」

そして二人は街へと足を運んだ。

新都 繁華街

「あれえ？ おかーさん！ どこー？」

そこには親とはぐれた男の子がいた。

「あれ！ どうしたのかな！ ぼく！」

「えっと、あのね、おかあさんがね、いなくなっちゃったの！」

「どんな人だったのかな？」

「えーつと、あ！みどりのしましまのふくきてた！」

「ああ！その人ならさつき見かけたよ！君のことを随分探してたからね！」

《…？おい、そんな奴見てねーだろ？》

《まあまあ落ち着いて…》

「うう…どこいつちやったの？おかあさん…」

「あゝ、じゃあ、連れてってあげるよ！」

「ほんと!？」

「ああ！じゃあ離れないように捕まってる！」

「うん！」

「あれ!?!○○!?!○○!?!どこに行ったの!?!○○！」

そして、その子どもはその時を最後に姿を消した…。

所戻って

切嗣サイド

「さあ、聖杯を取り除こうか」

「ああ…そうだな。父さん」

「とは言っても、やることは簡単なんだ…『やることは』ね」

「…どうということだ？」

「そこからの作業が難しいんだ…特に切嗣、お前は絶対に必要なピースなんだ」

「…ああ、分かっている。で、どうすればいいんだ？」

「二人で話している所に口を挟んだのは

「まあ、あなたの『起源』を借りたいんだよ」

「…『起源』を？」

「ナタリアだった。」

「そう。あなたに作った『起源弾』。あれを一発貸しな」

「…分かった」

「ということだ…アイリスフィール、覚悟はいいな？」

「ええ…。いつでも」

「ちよつと待て!!覚悟はって…!」

そしてナタリアは、

ドス

起源弾をアイリの体に打ち込んだ。

「?!?!? アイリイイイイ！ウワアアア！ウワアアア！ナダリアア！オンドウルルラギツタン

ブイスカー!!」？（OMO）

「落ち着け切嗣！なんか顔が橘さんみたいになってる！しかもそのセリフは俺のだ！」

「そのセイバーの言うとおりだ！切嗣、少し落ち着け！」

「そんなこと言ってる場合か!？」

「いや、あんた…『起源弾』の特性、忘れてないかい？」

「…えーっと…かれこれ何年も使ってないから…忘れちゃったよ…ごめんねナタリア。せつかく作ってくれたのに」

「あ、いや、反省してるならいいけどな…////べ、別に感謝なんかしなくてもいいんだからな!?!////」

「うん…でも、ごめん」

「…ま、今の家庭でこんなにも優しい切嗣にしてもらって忘れたのなら、それはそれでい

いかもねえ……」

「あはは……で、『起源弾』の特性って？」

「ああ、『起源弾』自体の開発工程は、覚えてるね？」

「あはは……肋骨を削られた時は本気で痛かった……」

「あんたの起源は、『切断』と『結合』。『切って、繋ぐ』……そんな感じだよ」

「……なるほど……」

「でもね、それは『元どおりに戻る』わけではなく、必ず『切れ目や解け目、結び目』があるんだ。『切断したロープは決して元のロープに戻らない……結んでもそれは元の形とは言えない』……とても言えばわかりやすいかい？」

「……まあ、ギリギリ」

「その性質を利用するんだ……お、そろそろだね」

「!?何だ……!?これは……!」

そうして切嗣が目にしたのは、

「そう。これが、あんたが当初欲しがってた

「聖杯だよ」

黒く、おぞましき気配を漂わせている聖杯がそこにはあった…。

中身とキャスターの宝具と臨時収集

切嗣サイド

「な……これが……聖杯!?!こんな禍々しいものがか!?!」

「ああ、そうさ。これが聖杯さ。どう思う?切嗣、あんたはこんなものに、願いを叶えてもらおうとしてたんだよ?それも、『恒久的世界平和』なんてのをね」

「……イリヤが産まれてくれてよかった……そんな願い……こんなものを見たのなら、絶対に願い下げだ!」

「だろうね。でも、すごいのは……やっぱりか。ほら、見てみな」

「……?」

ナタリアに促され、聖杯の中を見る切嗣。そこは

死ね

死ねしね

死ねしねシネ

死ね死ねしねシネ死ねシネシネしね死ねしね死ねシネ死ね

「うわ!?!な、なんだ…これ…」

「これは、聖杯の泥とされるものだ。とつくの前…聖杯は汚染されてたんだよ」

「原因は!?!」

「…アインツベルン家だ」

「!?!」

切嗣は、聖杯の汚染の原因が、意外なところにあることを知った。

所変わって

渉サイド

あれから、かれこれ数十人を殺し、その死体からも魔力を奪い続けてきたキャスター陣営は、廃墟を陣地としていた。

「ふう…やっぱ殺しは気持ちいいな…キャスター、そっちの魔力は？」

「かなり貯蔵出来た。そろそろ宝具を解放できる」

「へえ!?!どんなのなんだ？」

(「これは…ヤバそうですな…」)

「次のニュースです。この一週間で冬木市には、大量の変死体が発見されています。夜道や、人ごみには十分ご注意ください」

「へー…綺礼、こんなことになってるのね。今の冬木市は」

「とか言つて、外に出るのはダメだ。お前の身が心配だからな」

「…／＼／」

《綺礼、そのニュースの殺人はおそらくキャスター陣営が犯人です》

《…マズイな…このままだと…》

《どうします？綺礼》

そして綺礼は決心する。

「キャスター陣営以外の全ての陣営に、臨時収集を掛ける。この街を…冬木市を屍の街にするわけにはいかん！」

「ふふっ！がんばって！綺礼！」

「ああ…行ってくるよ、凜」

所戻って

切嗣サイド

「まさか…アインツベルン家が原因とは…しかしその原因はどういったものなんだ？」

「切嗣、あんたは『第三次聖杯戦争』でアインツベルンが何を召喚したか知ってるか？」

「…？いや…」

いきなりのナタリアアからの質問に答えることができなかった切嗣。だが、その答えは

「クラス名はアヴェンジャー。そしてその正体はゾロアスター教の悪神、『この世全ての悪』と呼ばれる物、その名をアンリマユという」

「アンリ…マユ…」

「…この話題はもういいか？とりあえず聖杯は取り出せた。後はこれを起動できなくするだけだ。矩賢、『あれ』を」

「分かってる」

「…？あれって？」

そして矩賢が取り出したのは

「……………」

「冷蔵庫?」

「ああそうさ、冷蔵庫（中古品9800円）さ。これで、聖杯の起動を限りなく遅れさせられる」

いきなりの展開に頭がこんがらがる切嗣。

「いやいやいや、ちよつと待ってくれ。冷蔵庫!? 冷蔵庫で聖杯の動きを遅れさせられるのか!」

「……………そうか……」

ここで、ほとんど空気だった剣崎が口を開いた。

「余計なお世話だ」

おつと……久々に聞かれてたよ……こつちの声。

「どういうことだい? セイバー」

「切嗣、あんたの魔術はなんだった?」

「……? 時間操作だ。正しくは、体内や小因果の時間を操作する魔術……つておい……まさか……」

「そう、そのまさかさ。この冷蔵庫の中はその小因果で形成されている。だから、この中に聖杯をぶち込んで、あんたらの魔術でこの中の時間の進みをほとんど0にする。そうすれば、聖杯は動かない」

「…まさか、そんな方法があつたなんてな…」

「さあ、執り行おう。この戦争はこれで終わ…」

ピーコン…

「おい切嗣、なんだ今のは」

「あ、僕…とセイバーのケータイだ…L I O Eきてる…ん？言峰から？」

弓劍殺の素晴らしき飲み会 (5)

キレイ綺礼「キャスター陣営がヤバいなう。(。o。…できる限り早急に言峰教会に来て、――」

雁夜ん「マジか!?(。D。) おけ。10分くらいで着く」

始「上に同じだ…」

あ、ライダーも見つけた。連れて行く(▽)(「

キレイ綺礼「おけ(▽)(「b」

「これは…すまない。僕とセイバーは行かなくちゃならないみたいだ…行くぞ、セイバー」

「分かった！」

既読4 「分かった。僕も今から行くが時間かかる」ケリイ

一真 「上に同じ！」

一時間くらいかかる！ (〽|〽)」

一時間後。

所変わって

綺礼サイド

言峰教会

「集まったか…ここに、キャスター陣営討伐の緊急会議を開催する！」

綺礼は、声を高らかにそう宣言した。

C 討伐の緊急会議／水面下で動く者、動かされる者

綺礼サイド

言峰教会

綺礼は、切嗣と劍崎、雁夜と始、ウェイバーとイスカandalが席に着いたことを確認し、口を開く。

「席に着いたところで、今回の件について説明しようと思う。」

この度キャスター陣営が、魔術を用いて罪無き冬木市の市民、特に女性や子どもを、魔力収集の為に殺害していることが発覚した」

この発言の「子ども」のところでも過剰に反応する者達がいた。

「…なんてやつだ…。そんなことの為に…子ども達を…。これじゃあ、桜ちゃんもターゲットにされるんじゃない…」

「その通りだ…。ただか魔力収集の為に小さな女の子…ムツホン、ムツホン…子ども達を殺してるだ…」

「最悪だ…。こんな状況では、イリヤを連れて散歩したり、アイリとのデートを楽しめな

いじゃないか…」

雁夜、始、切嗣の3人である。

この発言を聞いた綺礼は、

「…お前達…充実してるな…」

「「悪いか？」」

所変わって

渉サイド

魔力収集を行っていた渉たちは、その手を少し止めていた。

「どう？魔力の量は」

「集まりはしたが少し不安定だ。安定させる為に日数を置く必要がある」

「へー…じゃあ、そんな時くらいまで、特等席はお預け？」

「まあ、あと数日だ。気長に待ってくれ」

「へいへい」

キャスター、宝具解放まであと〇〇時間。

所戻って

綺礼サイド

「とりあえず、集まったからには話し合おう。何か、キャスター陣営に関しての情報を持っている者はいるか？」

「…あ」

綺礼の問いかけに反応したのは、ウェイバーだった。

「何かあるのか？」

「僕たちは…キャスター陣営と戦闘したことがある」

「本当か!？」

「ああ。ライダーが言うには、キャスターの武器は鎌で、黒いモヤみたいなもので、体を覆ってた。そしてマスターは…恐らく対象の行動に障害をかけるタイプの魔術だと思う。あと、マスターの方は、全力だと長期戦ができないタイプだと思う」

ウェイバーは、キャスターと涉との戦闘を思い出しながら話していく。

「…マスターの方の確証は？」

「そいつは僕に、鉈を振り回してきたんだけど…その最中に焦ってる感じがしたんだ」

「ほう…」

「その直後、そいつが頭を抑えて苦しみ始めたんだ。それでキャスターが一瞬動揺した隙に、逃げおおせたんだ」

「なるほどな」

「待て、そのキャスターのステータスは？何故そこで勝負を決められなかった？」

納得した綺礼に対して、ステータスと勝負の行方に疑問を感じた始が口を挟む。

「流石にあつちも、逃げの姿勢ですぐに逃げられる感じだったからな…。あと、こつちが言ってもないのに、戦いのセンスだけでこいつの真名を当てられるし…。それと、ステータスはこんな感じだった…。あ、メモあります？」

「ここにあるが」

「ありがとうございます…よし、書けた。これがキャスターのステータスです」

そのメモには

クラス キャスター

身長 約200センチ

体重 約100キロ

属性 悪・混沌

筋力A

耐久C

敏捷A

魔力B

幸運D

宝具A+

クラス別スキル

陣地作成Cー

道具作成Cー

固有スキル

『 Bー

『 A

『魔術』特殊

まず反応したのは、雁夜と始だった。

「なんだこれ…近接戦闘向きキヤスター!?!」

「俺としては真名と固有スキルの一部が隠蔽させていることが気になるな…。」

「宝具もどんなものかわからないしな…。まず表記すらしてない…。モヤにステータス

の一部を隠蔽する効果があるのか…。」

そうこうして、会議は進んでいった。

「…とりあえず、こうなってしまったからには、聖杯戦争を一時中断し、キヤスター陣営

討伐を行う。異論は?」

綺礼のこの言葉に、反論するものはいなかった。

「では、今日はこれで解散しよう。今後のことは、追って連絡する」

所変わって

始サイド

始と雁夜は、今日の会議について話していた。

「なあ、アーチャー。キャスターについて心当たりはないのか？」

「…何故俺に聞く？」

「てことは、あるんだな」

「うっ…まあな。ただ…」

「…?」

「もし当たってたら、冬木市どころじゃない。この世界の危機だ…」
「!？」

「驚くのはいいが、その震えは桜ちゃんには見せるなよ？」

「あ、ああ…」

そして、

「お帰りなさい！始さん！雁夜おじさん！」

「ただいま」

2人は、表面上は笑顔で、しかし内面では不安を抱きながら、自分たちの家へと帰った。

所変わって

切嗣サイド

切嗣と劍崎は、ナタリアたちがいる小屋に戻っていた。

そして、ようやく…

「…よし！聖杯除去、完了！」

「…終わったか…！ようやく…！」

「あとは起こすだけだよ、切嗣」

「ああ！アイリ…起きてくれ」

しかし、起きない。

「…あれ？おい…アイリ？もう終わったよ？ほら、起きてくれ」

やはり、起きない。

「…!?なぜだ…!?どうして起きてくれない…!?」

アイリが起きないことに焦る切嗣。しかし、他の4人は…

（「ああくなるほどねえ」）

（「切嗣、男の…いや、夫としての愛を見せる時だぞ」）

（「マスター…これは俺でも気付くぞ…アイリスフィールドが何して欲しいか…それを考えろ…」）

（「ケリイの〜カッコいいとこ、見てみたい！ハイ！」）

約1名少しズレているが、思うことは同じだった。そして…

（「切嗣からのキスはまだかしたら♪最近、セラとかリズとかイリヤとかが居たから、あまりキス出来てないのよねえ〜…」）↑実は、最初の呼びかけの時点で起きていたが、タヌキ寝入りしている。

そして、こんな雰囲気にならざるに、シャーレイが切嗣にこんな助け船をだす。

「そういうえば、難病で植物状態の女性が居ただけど…」

「…?」

「その人、夫からのキスで、植物状態から回復して、さらには病状も一気に改善したんだって!」

「…!?!」

そんな根拠も事例のない、白雪姫みたいなでたらめで大丈夫か…?

そんなことを他の3人は思っていた。

だが、

「…そうか…今必要なのは、僕からアイリへの、愛の証明か。ありがとう、シャーレイ」

「へ!?!あ、うん!?!どういたしまして!」

(「信じた……!?」)

そして…

「アイリ…起きてくれ…一緒にまた、君と過ごしたい…」

アイリに対し、熱い口付けをした。

(「アイリスフィールが羨ましいねえ…こんな夫を貰えるなんて…」)

(「流石だな!切嗣!」)

(「…見ているこつちが恥ずかしくなるほどのキスって…マスター、少しは加減してくれ…」)

(「キター…あれ?なんだろう…何も食べてないのに、口の中に甘みが…」)

「…ふふ…おはよう、切嗣。これからも、ずっと一緒よ?」

「…アイリ!うう…起きてくれてよかった…死んでしまったのかと思った…!」

「これくらいのことですんで死んじゃう訳ないでしょ?私は衛宮家のママなんだから♪少しは

信じてよね？ダーリン？」

「そうだったね…ハニー」

(「「あ、ダメだ。甘すぎるわ、これ」」)

そんなこんなで、

聖杯の除去、完了。

「あ、そういえば…セイバー、ちよつといいかい？」

「どうした？ナタリア」

「そのバツクルなんだけどさ…」

所変わって

綺礼サイド

「えー？綺礼く遊んでよー！」

「すまないな、凜。だが、これからのことを考えると、重要なことなんだ」

「あ、それなら、私たちがやっておきます」

凜に遊んでと迫られる綺礼を助けたのは、アサシンだった。

「…良いのか？」

「まあ、皆さんに渡す偵察報告くらいなら。それに、それを書くとなると、直接見た私たちの方が、よく書けると思います…」

「…それもそうか…。すまない、アサシン。やっておいてくれ」

「承知」

「ねえ、なんの話してたの？」

「凜、少しだけだが遊ぼうか。今、あの人たちが時間を作ってくれた」

「ほんと!?!なら、おままごとしよ!」

「その後は、少し手合わせ願いたいんだが…良いか？」

「もちろん!あ、手加減はしてね!」

「分かってる。では、遊ぼうか」

「うん!じゃあ、綺礼が旦那さん役で、凜が奥さん役…べ、別に変な意味はないよ!」

「…?なんのことかわからんが…まあ良いだろう」

(「綺礼のお嫁さん…綺礼のお嫁さん…／＼／＼プシュー…」)

「大丈夫か?凜。…熱はないようだが…」→おでことおでこがピタッ

「……！……！／／／↑恥ずかしくて悶絶してる

「…体調が悪いなら、やめようか？」

「ううん！大丈夫！むしろ絶好調だから！／／／」

「…なら良いが…」

（「綺礼よ…凜は渡さんぞ！私から奪いたければ、私を倒してから行け！」）

（「時臣さん…凜もそういう年頃なのよ。察してあげるのが、親の役目でしょ？」）

（「葵…念話無しで、脳内に直接…!?!」）

2人の様子を見て思う事のある親たちだった。

所変わって

??? サイド

『ご飯できたわよ?』

『分かりました…!?!なんだこの蜘蛛の大群は!え、ちよ…ウワァー!』

『!?!』 『!?!』 『!?!』

どこかの誰かが、小さな蜘蛛の大群に襲われていた…

Cを止める／聖杯戦争最終局面

最終局面突入と大量召喚と決戦開始

8日目

渉サイド

「…よし。完了だ。これで大規模な召喚が可能になった。これでスキルでの眷族召喚が出来るうえに、宝具の魔力も安定した。」

「おーマジか！ようやくかく。これでもかなり我慢してたんだよなあ」

「ならば、その我慢を解き放とうではないか。さあ、こんな戦争早く終わらせて、この世界を蹂躞するとしよう。マスター」

「ああ！今日はその第一歩！場所はこちら！」
『だ！さあ、徒党を組むであろう各陣営諸君！』

俺たちを、止められるかあ!？」

「無より出でよ！我が眷族であり下僕！『アルビローチ』よ！」

「「「「「ギヤシャシャシャシャ！！！！」」」」」

その脅威は静かに、しかし騒がしくも『ある場所』に迫っていた。

キヤスター、宝具解放まで、あと10時間

（「…な、なんだ！あの白いゴキ〇リのようなものの大群は！そして方角は…!?馬鹿な
！」）

アサシンは、慌てて綺礼に念話を繋げる。

《綺礼！緊急報告です！》

《どうした!?》

《キャストが大量に下僕を召喚した模様！さらに、マスター共々…》

『
《…なんだと!?!》

』 に向かっていきます!》

所変わって

切嗣サイド

切嗣とセイバーは、以前の時のようにナタリア、矩賢、シャーレイにアイリを任せ、冬木市に戻ることにした。アイリと一緒にしないのは、巻き込まないためだ。

「切嗣…行くのかい?」

「ああ。世話になったな…父さん」

「ま、どうでもいいさ。あんたは私の息子だ。もし、本当にどうしようもなかったら、私達に言いな。出来る限りは何でもしてやる」

「何から何まですまないね。ナタ…母さん」

「…ぜーつたいに、また会おうね!お姉ちゃんとの約束だよ!」

「うん。分かったよ、姉さん。約束する」

「セイバー、真名剣崎一真と、そのマスターであり、わたしの愛する夫、衛宮切嗣に勝利の祝福を…」

「祈ってくれてありがとう、アイリ…でも、そろそろ行くから裾を離してくれ!」

「嫌! また生き死にの戦いになるんではない!? もうする必要も無いのよ!? 何で…」

「それでも、戦争は終わらせなきゃならない…大丈夫! 今度はイリヤも連れてくるから!」

「…信じてます…」

「…よし! 行くぞ、セイバー!」

「とか言ってるが、一番待ってたのは俺なんだが…」

「…すまない…」

なんだかんだ締まらない切嗣だった。

車内

「ん?…!?!」

「どうした!?! セイバー!」

「…綺礼から…LONEが来ててな…」

「それで!?! なんて書いてある!?!」

「…」

劍崎が見せた携帯に表示されていたのは、

劍弓殺騎の心温まる素晴らしきサークル（7）

キレイ綺礼「最悪の事態だ…これは真剣に受け取ってくれ。キヤスターが、下僕を引き連れ、

この冬木市の中心部に侵攻している。」

「…嘘だろ…まだ、冬木にはイリヤたちが！」

「俺が冬木に残る！マスタ…いや！切嗣！あんたはイリヤたちをあの小屋に連れて行って来い！それまでは時間を稼ぐ！」

「…！分かった！絶対に死ぬなよ!?!」

「これでも生前は不死に近かったんだ！そうそう死にはしない！」

そう言いながら2人の乗る車は、法定速度を大幅に超えながら、冬木市に向かっていった…。

所変わって

始サイド

こちらにも、綺礼からのLONEを受け取っていた。そのLONEのすぐ下には、その下僕やキヤスターの写っている画像もあった。そしてキヤスターは、黒いモヤを取っ払っていた。

「そんな…どうすればいいってんだ！こんなの！」

「…この下僕、キヤスターの正体は…まさか…本当に、『あいつ』が…なのか…!？」

「おい！どうした!?!顔が青いぞ!?!…ま、まさか…」

「ああ…悪い予感的中した…こいつは『アルビノジョーカー』…俺の生前の世界で『邪神』を召喚したやつだ…」

「なんだって!?!てことは…あいつの狙いはその『邪神』を冬木市の中心部で召喚することか!?!」

「恐らくな。いずれにせよ、冬木市はもうすぐ戦場になる…」

「そうだな…よし！行くか！」

「そうだな雁夜！これがおそらく最終局面だ！俺も全力で行く！」

「頼むぞ！！始！」

2人は覚悟を決め、最大の戦場となるであろう、冬木市中心部に向かった。

所変わって

ウェイバーサイド

「あいつは…！」

「久方ぶりだのお…」

ウェイバーとイスカンドルが出会ったのは、

「確かに久しぶりだ。さあ、やりあおうではないか。英霊同士の殺し合いを！血湧き肉躍る闘いを！」

マスターである渉と別行動をしているキャスターであった。

「おうともさ！そちらは大量に使い魔を呼び出すんだよなあ！実にいい！なら…これで相手だ！王の軍勢『アイオニオン・ヘタイロイ』なり！」

イスカンダルも、召喚の固有結界である王の軍勢『アイオニオン・ヘタイロイ』を發動し、それぞれがぶつかり合う。

「さあ！雌雄を決しようではないか！キャスター!!」

「そうだな…それもいいか…!」

キャスター『アルビノジョーカー』VSライダー『イスカンダル』スタート。

キャスター、宝具解放まで約7時間。

Kが必須／殺人鬼VS暗殺者

渉サイド

時は、アルビノジョーカーとイスカンドルが戦闘開始して間もない頃、渉は写真を片手に繁華街を歩いていた。

「はあ…まだ足りないものあるんだったら、早めに言っと思ってくれよ…探すの面倒いじゃねーか…」

そう言いながら、キャスターから渡された写真を見て溜息をつく。その写真に写っていたのは、

「うーん…髪は紫色みたいな感じか…探せば一発か？てか、目が死んでるじゃん…」

始が召喚される前の、死んだ目をした桜の姿だった。

所変わって

切嗣サイド

「みんな！早くここから離れるぞ！」

「え!?いきなりどうしたの、キリツグ!?」

切嗣は、自分の購入した家にいたイリヤとセラ、リズを帰ってくるなり、最低限の用意と結界をさせ、車に乗せた。「あの…さすがにいきなりすぎるので、説明を」

「どうかーん。あ、読者から見て4行で説明してー。」

「え!?あー…キャスターが、ゴキ…人型使い魔を大量に従えて冬木市に迫ってるんだ！アイリはすでに逃がしてるからイリヤたちも早く！」

「なんですって!?!」

「たいへーん」

さすがに切嗣もゴキブリ型の使い魔とは言えず、人型使い魔とぼかした。まあ辛うじて人型なので、あながち間違っではないだろう。

「よし乗ったな!?!出るぞ！」

そして切嗣は、法定速度ギリギリを超えたスピードで走っていた。

「あ、その車、止まってください。スピード超えています」
「あ、はい…すいません…」

けどやっぱり、切嗣はなかなか良い感じには締まらないのであった…。

所変わって

臓硯サイド

「ねえ、おじいちゃん。始さん達、いつ戻ってくるかなあ？」

「んっ!?!ゴホツゴホツ!」

「…おじいちゃん、汚ないよ」

「…すいません」

茶を飲んでいた臓硯は、桜にいきなり質問され、蒸せ返してしまった。

「…すぐ帰ってくるだろう。それまで待ってれば良いさ」

「でも帰ってこなかったら…」

「そういう気持ちが悪い方向に繋がっていき、そして実際に悪いことが起こってしまう…大丈夫。あの2人は絶対に帰ってくる。なにせ、ワシの息子だからな」

「…うん」

そんなことを話していると

「ハハッ。ここにいたのか…ん？目がいきいきしてるな…？まあでも、こいつに間違いないだろ」

「…!?桜！後ろに隠れておれ！」

「うん…でも、誰?!」

庭に突然、渉が現れた。

臓硯は、とっさに桜を背中に隠すも、いきなりの奇襲で頭をフル回転させることに時間がかかる。

「そいつさ、『虚数属性』だろ？俺たちのやることに必要だからさあ、こつちにくれない？」

「断る！この子は戦いには巻き込ません！」

「チツ…」

「じゃあ奪い盗るか」

「…!?!」

そう言うど渉は、足に強化魔術を施し、一気に桜を攫い、その場から離れていく。

「おじいちゃん!」

「ハッ!俺は、真正面から戦うなんて柄じゃねーんだよ!じゃあなあ!!」

「桜!ぐっ…逃げられた…!あやつらに知らせなければ…!」

そこからの行動は早く、すぐさま始と雁夜にLONEをした。

間桐家の一族(3)

「緊急事態!桜が連れ去られた!キャスターのマスターだ!」ゾオルケン爺さん

既読2

始「なんだって!?!それは本当かい!?!」

雁夜ん「ネタ言ってる場合か!?!ヤバい!今は家から大幅に離れてる!」

「くっ…!どうにかなんのか…!?!」

どうにもならない事態に嘆いていると、

「その話、聞かせてもらった」

「そ、その声は！」

「ここは私に任せてもらおう」

この事態を脱するための、

「言峰綺礼！」

救世主が現れた。

所変わって

渉サイド

廃工場に逃げた渉は、桜の口にガムテープを貼り、ロープで体を縛った。
「んー！んー！」

「チツ…黙ってるよ…」

トムトム…

自分の上寄りの正面にある窓が割れ、驚く渉の前に現れたのは、

「さて、崇身渉。友の家族を返してもらおう」

「同じく。我々アサシンも、抵抗するのならば手加減はせん」

綺礼とアサシン達だった。

「追っ手か…早すぎんだろ…！ま、来られちまったんならしようがねえ！やってやるよ

！」

「その娘は返してもらおうぞ…！」

崇身渉VS綺礼&アサシン 『百の貌のハサン』 スタート。

キヤスター宝具解放まで、あと5時間。

Kよ急げ／それぞれの戦い

ウエイバーサイド

「ムーン！」

「ハア！」

ガン！ギン！

イスカンダルとアルビノジョーカーは、己の得物をぶつけ合い、

「「「ギャギャギャギャギャギャ！！！！」」」

「「「うおおおおおおお！！！！」」」

その2人の召喚した軍勢の実力もほぼ拮抗していた。

「お主、なかなかやるなあ！このような出会いでなければ！我の下に欲しかったのだがなあ！」

「フーン！オレはオレの意思でしか動かん！お前ごときに従うとも思うか！」

ガツ！ガギン！

そう話している最中にも、ぶつかり合う2人の武。

しかし、そんな場所で場違いな者もいた。それは、

「うわあ〜！なんなんだよアレ！あんなのゲーム以外でも出てくるのかよ〜！」

「「「「「ギヤギヤギヤギヤギヤギヤ！」」」」」

イスカンドルのマスター、ウェイバー・ベルベットだった。

基本的に凡才な彼には、アルビローチの集団に怯え逃走していた。

が、

（「…？？…？？…あの時と、同じ感覚…？」）

それは逃げ惑いながらも、相手を観察していたウェイバーが、以前の渉の焦りを見抜

いた時のような感覚に陥った。それは自らの実力には直結しないながらも、かなりの練度を誇る観察眼であった。

そして、

（「こいつら…ライダーが呼び出してる兵隊たちより、魔力の残滓が…かなり弱い…？もしかして」）

「くらえ！」

ウエイバーは、自身の行使できる攻撃魔術をアルビローチに対して行ってみた。すると、

「ギャギャ…!？」

いとも簡単に崩れ去ってしまったのだ。これにはウエイバーもビックリ。

「え!?! 本当か!?! 本当に倒せたのか!?!」

「どうしたウエイバー!？」

いきなり驚きの声を上げたウエイバーにイスカンドルが問いかけた。

「このゴキブリみたいな奴ら！ ともに一発攻撃できれば簡単に消せる！ なんせ、僕みたいなやつは魔術でも一発だったから！」

「真か！皆の者！」

「「「オオオオオオオ！」」」

「「「「ギヤギヤギヤ!?!?!」」」」

（「チツ……！急ごしらえの数だけなのがバレたのか!?!」）

この事実には気づかれるとも思わず、心の中で舌を打つアルビノジョーカー。しかし、

「だが、マスターのほうは、完全にお留守のようだな！」

「!?!」

ウエイバーに、凶刃が迫る。

所変わって

切嗣サイド

切嗣は、アイリたちがいる山小屋にイリヤたちを預け、また冬木市に帰ろうとしてい

た。

「すぐ帰ってきてね!?約束だよ!キリツグ!」

「ああ。パパとの約束だ」

「うん!」

「できるだけ早くねー」

「奥様もお待ちですので」

「そういうセラも、早く帰ってきて欲しいくせに」

「なっ…!?／／何を言い出すんです!リーゼリット!」

「へっ…セラ、あなたにも「O☆H A☆N A☆S H I」しないとイケないかしら…?」

「」

「…どんまい?」

「…僕は行くよ。そしてみんなで、またあの家で一緒に暖かいごはんを食べよう!」

「うん!キリツグ!いつてらっしやい!」

「ああ、いつてきます」

そして行くこうとして車に乗る直前に、ナタリアがアタツシユケースを切嗣に向けて放り投げた。

「…あ痛ア!?!」

「…あ、しまった…まあいいか）切嗣、それを持って行きな」

「…これは？」

「セイバーのベルトを解析して、切嗣でも使えるような形にしておいた。もしもの時は使え」

「…！ありがとう。恩にきるよ、母さん」

「フツ…早く帰って来なよ？あんたには、待つてる家族がいるんだからな？」

「…ああ！」

そして、決意を新たに切嗣は冬木市に向けて車を走らせた。

「あ、すいません。ここはただいま臨時の工事中でして…少し迂回されたところをお通り下さい」

「クソ！こんな時に！」

締まらないというか、ツイていないだけなのかもしれない切嗣だった。

所変わって

綺礼サイド

こちらは、ややワンサイドな戦いとなっていた。それもそのはず。渉は1人なのに対し、綺礼側は綺礼自身を加えて「80人」。分割された存在とはいえ、アサシンたちの圧倒的な数での有利がある綺礼側に分があった。そこから抜け出そうにも、

「各自、フォーメーションAを保ちながら、ヒットアンドアウェイ！逃がす隙間を作るな！」

「「承知！」」

綺礼の指令とアサシンたちの連携の隙が見えず、抜け出すこともできない。正に多勢に無勢である。綺礼はその隙に桜を解放する。

「ぶは！はあ…はあ…」

「大丈夫か？」

「うん…大丈夫…雁夜おじさんたちは？」

「少しいる場所が逆方向でな…近い場所にいた私が助けに来た、ということだ」

「…ありがとう。神父のおじさん」

「…綺礼でいい。少し待っていてくれ。あの者を捕まえないならん」

「うん…気をつけてね」

「分かっている」

その頃アサシンと渉は。

「クソ！オラア！」

ブオン！ブオン！

なかなか速いアサシンに攻撃を加えようとするも、空振って当たらない。そして

「ハッ！」「デアア！」「しゃあ！」「セイヤー！」「お前はどこのメダルの王だ！」「行くぜ行くぜ行くぜえ！」「そっちはどこの迷惑な桃太郎だ！？」

…何やらボケとツツコミをしながら、ヒットアンドアウェイで攻撃していくアサシンたち。

そして、

「ウグ!?ガアア!?!」

「あの時間が訪れたか…アサシン！フォーメーションCだ！警戒しながら事に当たれ！」

「『承知！』」

以前同様、頭を抑え苦しむ渉。その間にも攻撃は休まらず、少しずつダメージを蓄積させる渉。トドメに、

「…フン！」

「が、アア…」

綺礼が自身の拳で敵の胸を穿ち、渉は気絶した。

「フォーメーションDだ！速やかに捕獲せよ！」

「『承知！』」

そして綺礼は、アサシンに捕獲を任せて、桜を連れて帰ろうとした時にある言葉が聞こえた。いや、

聞こえてしまった。

「あーあ…もうしーらね…」

アサシンたちの胸を、貫いていた。

「…!?残っているアサシンに告ぐ！今すぐこちらに来て！」

「承知！」

「…くっ…！残っているのもお前だけか…ザイード」

「…申し訳ありません。流石に想定外でございました…」

「なんとしてでもこの娘だけは…！」

なんとか桜だけでもと思う綺礼。

しかしそこに、

「アヒヤヒヤヒヤひやひやひや！」

「…!!」

あの尻尾が向かってきていた。

Wの過去・FILE1／理性なき殺意の影

綺礼サイド

くっ！この位置はマズい！右…いや、左に！

そして、私が避けた直後に、右にあの尾が5、6本刺さっていた。

「ア？なンデ読まレテンダ？」

…危なかった…！右に避けていたら即死だった…！…ハッ！アサシンは!?

「大丈夫です！綺礼！」

よかった。桜も抱えてくれていたか。しかし…あれは何だ？まるで、

「妖狐の尾ではないか…！」

所変わって

渉サイド

あーあ…。

やっぱこうなるか…でも、もういいや…

「『あの時』、失うもんは失ったからな…」

「…!?!」

あの神父が驚いてるように見えるが、まあ関係ねえか…

暴走か…

あ…何でこんな時に思い出すんだろ…『あの時』のこと…
忘れるって…決めたはずなんだけどなあ…

時を戻して

7年前

この時、渉14歳

崇身家

「…よし、魔術刻印の移植が完了した。よく頑張ったな、渉」

はあ…こんな才能はちつとも欲しくなかつただけだな…ま、使えないよりマシか…

「ああ、ありがとう。父さん」

俺の親父、『崇身 陣介』は5代目崇身家当主。ま、家の取り決めで、刻印を移植したら当主は退くって事になってるから、今この時を持って、俺が6代目崇身家当主ってなるんだけど。

「明日から新学期だが、当主であるという自覚を忘れるなよ?」

「分かってるって。じゃ、おやすみ」

この時、この刻印がどんな物かを確認していれば、あんな事にはなんなかつたのかもな…。

次の日

中学校（日本の）

「おい！こいつ、まーたココに来てやがるぜ！」

「ハッハー！まだ懲りてねえのかよ！イジメられ足りねえんじやねえか!？」

「とりあえずボコられとけや！アアン!？」

ま、こうなることは分かってたけどね。俺いじめられっ子だから。あ、言ってなかったっけ？まあ、言ってないんだけどね。

ん？こんなにやられてるのに、なんでみんな助けしてくれないのか？簡単だよ。自分がやられたくないからさ。自分の身の安全欲しさに、助けようとしな。教師もそんな感じだ。注意もない上に、イジメを隠蔽するんだから、余計に夕チが悪い。ま、でも、そんな俺にも救いはあったんだ。

「コラ、てめーら！渉に何やってんだ！周りの奴もだ！どうして助けようとしねえんだ!?! やられたくない？それでやられてる奴が死んだら、お前らどう思うんだ!?! 言ってみよ！」

そう言われると、他の奴らはどっかに行った。

男言葉だから分かんねえかもだけど、こいつは女だ。名前は、『又倉 楓』。小4の時に知り合ってたからの仲だ。

「…いつも悪いな…楓…」

「良いって…あたしは、あんたがイジメられてるのを見たくないだけだから」

「…ハハ…お前に助けられてばっかで、情けねえなあ…」

「良いんだよ、それで。だから、あたしに甘えとけ」ぽふ

「わぷ!?!／／学校でそういうことやめろよな!／／結構恥ずかしいんだから!」

「…ダメ?」

「……ダメ／／／」

こいつ、実は着痩せするタイプで、普段は目立たないが、結構包容力あるんだよ…そして、時々出してくる女の子の表情(今回は首ちよい傾げと口の下に人差し指もあり)にやられるときもしばしば…

あ、一応楓とは…まあ、その…付き合ってる。告白は俺から中1の終わりにした。まあ、今となつては『いた』なんだけどな…

楓は、結構人気者だった。

成績は、常に学年上位20位以内に入り、スポーツも万能。絵も上手いし、アニメと

かにも精通してる。さらに実家は小さな教会もやっていて、1日30人くらいは参拝に来ていたんだそうな（楓はそこでシスターもしてた）。

そして、まあ…やっぱり、可愛いんだよな…。髪は黒のセミロング、目はくりくりしてるし、スタイルも良い。背は少し高めで170センチほど…なお、俺は『現在』168センチ…もう伸びないから、勝ち目はないなあ…。そして何より、自分が可愛いって絶対言わない。俺は、そんなところにも惹かれた。

ここで、おそらく読者の気になっっているであろうことの1つを解消しよう。多分、『何故こいつが、こんな好物件な女の子と付き合えたのか』だと思いが。

答えは、

「あ、放課後に屋上な？」ボソ…

「…ああ。『あれ』ね」ボソ…

放課後 屋上

俺と楓は、こっそり複製した屋上の鍵を使って、屋上に来た。

ここで何をするかというと、

「じゃ、いただくね？」

「確認はいいよ。…ほら」

俺は手首を差し出して

「…がぶ…」

「…！」

楓は、その手首に噛み付いた。

あー…これだけじゃ分らないよな。

楓は、少々生まれが特殊なんだ。その関係で、定期的に血を摂取しないといけない。しかも男子の。それで周りに俺以外で付き合いのいい男子がいなかったという感じ。…まあそんなこんなで、結果的に付き合ってる方がいいって結論に至った、というわけ。楓の家が教会なのも表向き。裏では魔術系のことを結構やってる。そういった後ろ盾があるから、今まで魔術協会とかに殺られずに済んでるんだ。あ、俺の家が魔術師の家柄ということを知ってるのも、学校の中では楓だけだ。

「…ふう…あゝ、美味しかった」

「血はあくまでも飲み物じゃねえからな？それになんか言ってることも吸血鬼っぽい」

「そこは雰囲気だ。ノリが足りねえぞ？」

「さいですか…よし。これでいいか」

俺は手首に包帯を巻き、楓と共に屋上から出た。

俺は、楓にイジメから助けてもらう。

楓は、俺から血を定期的にもらう。

端から見たら、ギブアンドテイクも良いところだけど、俺たちは確かにお互いを好んでいた。

「今からどっか行くか？」

「ゲーセン行く？ガンゲーしたい」

「乗った！…今日こそ楓のソロスコア越してやる…！」

「やってみればー？出来るならな♪」

「…ああ、もう！可愛いなお前は！」

…なんかそう言った時の顔が可愛くて、衝動的に撫でてしまった…。何というか…
今思うと、何やってんのさ俺…。

「ふえ！あ、その。え？可愛い？」

「ああ！お前は可愛いよ！そして優しい！何てだったって、俺なんかと付き合ってくれて

るんだし…」

「あー…なるほどね。実は、な？」

「…ん？」

「お前から告白されたとき…実はその日、そっちから来なかつたら、こっちから行こうと
してたんだ」

「…へ!？」

「告白する前から…両思いだったんだよ。あたし達は…」

この時、本当に驚いた。ドキドキしすぎて、鼓動の速さがバレるんじゃないかってほ
ど。

「そうだったのか…なんか幸せだな…」

「あたしも!さ、ゲームしよ?」

「そうだな!」

ちなみに、ガンゲーのソロスコアは越すことができず、それどころかハイスコアを更
新されてしまったとだけ言っておく。

この時までには、俺も楓も、間違いなく幸せだった…

『この時』までは。

Wの過去・FILE 2 / 狂った刻印と別れ

渉サイド

数日後

「じゃあ、今日はこっちだから。じゃあな、楓」

「うん。また明日な〜」

その日は、楓と別々に帰る日だった。というのも、他の奴らには楓と付き合ってることをバレたくないからだ。俺はもちろん、あいつも傷つく。それは許されない。

でも今思えば、無理やりにでも…一緒に帰っておくべきだったな…。

その帰り道で

♪

突然、電話が掛かってきた。開くと、画面には『楓』の文字。俺はすぐに出た。
「もしもし？楓か？」

「残念だったね。又倉さんは、こちらで預かってる」

でも、聞こえてきたのは、聞いたかった楓の声じゃなく、どこか気色の悪い男の声だった。その声を聞いて俺は、

「…誰だ？お前。…少なくとも、俺をイジメてるやつらの中にはいなかったよな？」

6割くらいの殺意を込めて、そいつに言ってやった。するとそいつは、ひいひい言いながら誰かに変わった。

「おう、崇身。こつちにはく、お前の愛しの、愛しのプリンセスが転がってるんだ。返して欲しけりや…分かるよなあ？」

こいつは、俺をイジメて来るやつらのリーダー格だ。そして俺は、そいつに指定された場所に走った。

所変わって、時間を少し戻して、

楓サイド

「じゃあ、今日はこっちだから。じゃあな、楓」

「うん。また明日な」

ふうく。今日も楽しかったなあ…渉といると、ほんつとーに楽しい。…ま、イジメは無くなってるないんだけどな…。

そんなこと考えながら歩いていると

「おう、又倉さんよう。ちよい顔貸せや」

「…！」

渉をイジめるやつらのリーダー格の男が、いきなり出てきた。しかも明らかに、あたし達が別れたところを狙って。やられた。しかも囲まれて逃げ場がない…！

「ま、さすがのお前も、女だからなあ。多勢に無勢だろ？どうでもいいがなあ！」
そして抵抗する暇もなく、眼鏡をかけた、いかにも勉強だけが取り柄だっというよう
なやつに、縛られた。

「よーし！あそこに連れてくぞ！お前はこいつのケータイであいつに連絡入れろ！そし
たら嫌でもあいつは来るからなあ！」

「おう！あー！早くあいつ殴りてえなあ！最近殴ってなくてイライラしてんだ！」
「ひひひ…コレで、又倉さんは僕のものだ…！ひっひっひ！」

…ヤベエ。明らかにヤベエやつがいる…！殴られるのは見たくないから、来て欲しく
はないけど…

助けて…渉…！

所変わって

渉サイド

俺は、あいつらに指定された公園に行った。そこには、

「おう来たか！とつととサンドバッグになつとけよ！」

「ひひひ…来たね、崇身君。君なんかには又倉さんは似合わない。僕みたいな勉強が出来る、秀才な僕こそが！又倉さんと釣り合うんだ！」

「…涉…こいつ、ヤバイ。早く逃げて！」

楓が縛られていた。よく見ると、制服が少しズタズタになってる。ナイフを持って、変なこと言ってる眼鏡のやつがやったんだろう…。そして、それを囲むように俺をイジメてるやつらが3人、楓を囲んでいる。それを見た俺は、

「…楓を傷つけるなんてな…覚悟は出来たか…？」

魔術回路を解放した。

俺の回路を解放する感覚は、段階を踏んだ数だけ回路の解放する数が増える特別製だ。

ナイフを持つようなイメージで、第一段階。

そのナイフで敵を斬るイメージで、第二段階。

そして、その後に出てきた血飛沫が自分にかかるイメージで、最終段階。

俺は、第二段階まで解放した。

その後、足に6割、手に4割の強化魔術をかけた。

そして、

「お!?なんだこいつ!?!…ぐえ!」

「ちっ!くそがあば!」

「く、クソつたれぐあ!?!」

「ひっ!く、来るなわば!?!」

とりあえず、黙らせるだけで止めておいた。そして楓に掛けられた縄を常備してる小型ナイフで切る。

「…渉…」

「…ああ。俺だよ」

「怖かった…怖かったよう…!」

「…ああ。早く帰ろう」

「うん。…痛っ！」

どうやら、足を痛めたらしかつた。それを見かねた俺は…その、えつと…うん。

「ほっ、これでいいか？」

「ふえ!?!な、何してんだ!?!／／／／」

「何って…おんぶだよ…／／／歩けないんだつたら、これしかないだろ…／／／」

「…うん…／／／」

そうして、俺たちはそこから離れようとしたんだ。

「クソ…! 又倉さんは、僕のものだ! お前のような野蛮人に、渡してたまるかあ—————!」

「…え?」

「…!?!」

その眼鏡は、俺たちの『後ろ』から、ナイフを持って突っ込んで来た。俺は今、楓をおぶってる。つまり、楓を守るには……!

ザシユ……

「……ゴハ……!」

「……あ、あれ? さ、刺さっちゃった……。そ、そうだ! こいつがこつちを向いたから悪いんだ! だから、僕は悪くないんだ! コレで、又倉さんは、正真正銘僕のものだ!」

「……テメエ……!」

俺は、楓が眼鏡に突っ込んで行くのを見て、意識を落とした。

それでも、やっぱり刃物相手には不利。しかも楓は足を痛めてる。

嫌だ。

イヤだ。

嫌だイヤだいやだイヤだ嫌だイヤだ！

楓を死なせたくない！

ドクン…

その時、

俺の中の何かが、

壊れた。

ザシユザシユザシユザシユ…！

その音と同時に、俺は目を覚ました。

そこには、俺をイジメていた連中3人と、クソ眼鏡。

そして楓が、何かに腹を貫かれたような姿で倒れていた…

「…え？あ、え…？…ハッ！楓！」

俺はすぐに我を取り戻して、楓の下に向かった。

「楓！大丈夫か!?楓!？」

「…ああ…涉か…」

「喋るな！今、助けを…」

「無理だ…あたしは、助からない。なにせ、血を流しすぎたからな…ハハッ…」

「…誰がやったんだ…？」

「…ごめんね」

なぜか突然、楓が謝ってきた。

「…なんで謝るんだよ…?」

「あたしが、あんなのに捕まったから、こんなことになっちゃったんだよね…」

「違う!悪いのはあいつらだ!楓は悪くない!」

「それでも、こんなことをさせたのは…あたしだ。…あれっ?…渉…そこに、いるんだよね?」

「…!ああ…ここに…いる…!だから、居なくなるな!俺の前から…居なくならないでくれよ…!俺を…独りにしないでくれよ!」

「大丈夫…だよ。あたしは、ずっと…渉の、そば…に…いる…から…んっ…」

「…んっ…」

そう言つて、楓が俺にキスをすると、

「…じゃあね。また、会おうね…」

楓の命は、静かに消えた…。

ポツ…ポツポツ…

ザーツ…

雨が降ってきた。

下を見れば、楓が幸せそうな顔で眠っていた。死んでるとは思えなかった。

「……うあああああああああ！」

俺は泣きながら、空に向かって吠えていた。

楓は、もう帰ってこない。その事実が、俺の心に突き刺さった。

崇身家 屋敷

俺は、家に帰って、とんでもないことを聞いた。

「……自動防衛魔術……？」

「ああ。お前に移植した魔術刻印には、自動防衛魔術が掛けられている。所有者の命が危機に晒されると、自動的に発動する。背に妖狐の尾を召喚し、迎撃する魔術がな」

「それは……俺の意思で動かせるのか……？」

「無理だ。迎撃するだけの魔術に意思など必要ない。ただ、近くににいる者を破壊するだけだ」

その言葉を聞いた瞬間、ナイフで背を向けていた親父を刺した。

「が……は……」

「……」

即死だった。

俺は、親父に教えられた、証拠隠滅法を使い、強盗に刺されたという状況を作り出した。

そして、金庫にあった金や、魔術礼装などを全て抜き取り、荷物をまとめ、家を出た。そして、時計塔に入学した。その時に、殺人芸術は封印した。

その後、何年か経った時に、ケイネスが聖遺物を用意しようと依頼しているのを聞いて、聖杯戦争を知った。

これなら、これならば、楓を蘇生できる。

そんな想いを胸に、数日前にこの冬木に降り立った。

しかし聖遺物もなければ、詠唱もわからない。

そこに、

「うーん……そろそろ飽きてったなあ……」

こんな言葉が聞こえた。

そいつの近くに死んだ子供がいた。
俺は、そいつを殺した。

そして、そいつが持ってた本には、

「これは…英霊召喚の詠唱か…!」

そして、俺は詠唱を終え、

キヤスターを召喚したんだ。

回想終了

所変わって

綺礼サイド

…む？動きが止まった…？

いや、何かを思い出しているのか？

なら、攻撃のタイミングは、いま

「…楓のいない世界は…いらねえんだよー！ー！ー！」

だっ…!?

くっ！尻尾が！防御を…！

ドゴン！

「ぐは?!」

しまった…！突きを意識しすぎた！払いを…計算から外してしまっていた！

「くっ、肋骨は…何本かやられたか…だが、治す暇もない…」

そして、痛みを堪えて構えようとしたが、

ズキン…！

「ぐっ…！」

やはり、痛みで膝をついてしまう。そこに、

「…死ね」

あの尻尾が向かって来た。突きだった。私は、情けないことに、動けなかった。そして、

ザシユザシユザシユ…

「ぐ…あ…」

私…

ではなく、

アサシンが、私を庇い尻尾に貫かれた。

「ぐっ…」

「アサシン！しつかりしろ！」

「…綺礼…私は、もう持ちません…」

「ふざけたことを言うな！友を…失ってたまるか！」

そう言いながら、治療魔術を行使するが、

「…何故だ！何故、治療魔術が効かない!？」

「この尾で出来た傷は、おそらく治りません…綺礼、これを…」

そう言って、アサシンが渡してきたのは、ハサンたる所以の髑髏の仮面と、アサシン

全員と私が写った写真だった。

「私は、この世界に現界して……ようやく、願いが叶いました……あなたに会えて、あなたのサーヴァントになれて、私は……いえ、私たちは……幸せでした……」

そう言ったかと思うと、私を突き飛ばして崇身に突っ込んで行った。

「この身は、暗殺王を指す者……やられるだけでは、絶対に終わらん！」

「!?……ぐあぁ!?」

数本のダーク（アサシンの持つ短刀）は、崇身の腕などに刺さった。が、

ザシユザシユザシユザシユ……

アサシンは数十本の尾に貫かれ、この世界から、消えた。

「……アサシ………ン!!!」

綺礼、覚醒

綺礼サイド

ザイドが、死んだ。私の目の前で。一度貫かれてなお、敵に向かい、そして死んだ。

私の手の中に残されたのは、そんな、友の遺したかけがえのない宝。

「ハッ！悲しみに暮れてる暇なんかねえぜ！お前もラクにしてやるよ！」

私はその攻撃を、バックステップで躲して距離をとり、アサシンの遺した仮面に残っていた、アサシンの魔力の残りカスを預託令呪で増強。そして告げる…友の象徴たる、現象を発動させるべく。

「妄想幻像《ザバーニーヤ》」

渉サイド

「…!?」

俺は、とんでもないものを見て、驚いていた。

…なんで驚いてるのかって？

「ハッ！」「フウッ！」「トア！」「…シッ！」

…俺が殺そうとした奴が、いきなり4人に分身して、こっちに攻撃加えてきてんだぜ？そりゃ驚くわ！

「チツ！なかなか喰らわん！」「やはり慣れんな…鍛錬が必要か…」「…早く麻婆を食べたいんだが…」「お前ら！それでも私か!?…アサシンの苦勞がよくわかる…」

…多分、最後のやつが本体っぽいな…苦勞人っぽいし。

まあ…殺すけどな。

「うおら！とつとと死ねよ！」

って攻撃する。もちろん、あつちは最後のやつがツツコミ続けてて、攻撃には気づいてない。

しかし、

「フー!」「ホツ!」「トウエイ!」「クツ!」

…なんで避けれるんですかねえ!しかも3番目のやつ!こつち見てねえし!

「ハア!」

「…ウグア!」

ヤツベ…ちよつと気を抜いたらこれか…!しかもこいつの拳…八極拳っぽいのに、本質は殺人拳か!?

けど、まあ…

「グア!!」「ゴツハ!」「マアボ!」「ツツ!」

数が増えただけだからなあ…でも、ここまで持つてるのはスゲーと思うけど…

「まだまだ!」「てああ!」「麻婆のためなら!」「この程度!」

つてマジか!?まだ動けんのか…いややつぱおかしいだろ!特に3番目え!

「クツ！とりあえず死んでろよ！」

俺は尾で攻撃するけど、やっぱ避けられる…。

「マー…ボ…！」

メキヤ。

「!!?…ガツハ！」

クツソ…！一発一発が、一撃必殺狙ってんだろ！しかも受けた拳があの子の3番目のやつだっというのが、この上なく辛え！

くっ…なんとか、しねえと…！

綺礼サイド

…なんとも不本意な人格の表れ方だ…

確かに私の中には、『代行者の時のような戦闘ばかりしていた私』、『鍛錬に意味を求めていた私』、『泰山の麻婆豆腐をこよなく愛する私』が存在していたのだろう…

だが！そういったものが、そのまま出てくるものなのか!?!統制にかなり苦勞する…アサシンの持っていた望みを私はなんとなく理解できた。しかし…

このまま行けば……!

そう思って、私は他人格とともに、崇身に突っ込む。

だが、

「ん?」「ムツ!?」「マアボ!」

スウー……

……ここで切れるか……!

「ハア……ようやく切れたか……! 終わりだ!」

私は、崇身に突っ込んでいた。急停止はできない、したらい的になるだけだ……!
このままだと……!

ドン!

「ぐっ!?!」

私は、何かに突き飛ばされた…そして聞こえてきた。

『ファイア、ブリザード、ロック、メタル、リフレクト』

ようやく来てくれたか…！

「大丈夫か！綺礼！」

…私の、友が！

所変わって

ウェイバーサイド

あ、久々に出番だ…って言うてる場合じゃないんだよ！こつちにあの化物キャスターが来てるんだよ！

ザシャ…

「又…グア…」

「…え？な、なんで…」

そこには、敵に背を向け、その大きな体で僕を守ろうと覆っていた、ライダーがいた。

「…グ…ア…」

「ライダー!?なんで…なんで僕なんか守ったんだよ!そのまま、あの怪物たちの相手してればよかつただろ!」

「我的朋友が…命の危機だというのに、体を張らん訳にはいかんだろう…!」

「…!」

ライダーが…僕を…友と認めてくれた…。過去は征服王、今はゲーマーなライダーだけど、やっぱり…『王』なんだ…!

僕は…ウグ…僕は…!

「泣くでない、ウエイバー。お前は…我的朋友だ…!」

スウ…

消える…王が…僕の、友達が…!

「行くなよ…行かないでくれよ!ライダー!いや、イスカンドル!こんなところで死ぬなよ!受肉するんだろ!」

「…そうだったなあ。だが、朋友を守れたのだ…悔いは…無い」

「…そうかよ…じゃあな、ライダー」
「おう！」

…あ、予約していたゲームはしたかったなあ…」

…悔い残りまくってんじやないか！全然だよ！そうだよ！考えてみれば当然じゃない！僕守ったからって悔い残ってないわけないんだから！

「…とりあえず、お前も死ね」

あ、自分の身の危険忘れてた。

ガキン！

…？なんだ？変な金属音が…金属音？

待て待て待て。そんな音鳴るはずない！だって目の前にあったのは、あいつの鎌だけなんだから！だとしたら何が…

「すまん…もう少し早く来るつもりだったんだが…殊の外…雑魚が多くてな…」

そこに現れた、金ピカの鎧を着た剣士も、どことなく…王の気配がした。

両雄、到着。

始サイド

桜ちゃんが誘拐されたっていうLONEを臓硯からもらって、雁夜とその辺にいたローチを倒してから、一度家に戻って用意を完了させてから来た。

「すまん、始！助かった！」

よかった…綺礼は無事か。

…いや待て、アサシンがいない…？

ということは…

《…アサシンは、死んだか…》

《ああ…『あの子以外』はな》

《…それでも、すまん。もう少し早く、ここに連れていけば…》

《…過ぎたことは、もう割り切った…》

《…そうか》

念話で綺礼と少し話した後、俺はキャスターのマスターに向き合った。

すると、

「…始…さん？いや待て。だつたらなんで、この戦争にいるんだ？あれはあくまでも、『創作物』…だよな？ならなんで…？」ボソ…

…そういうことか…

最初、俺がこの世界に召喚された時、雁夜が魔力の枯渇で意識を失う直前、雁夜は俺のことを『相川 始』と呼んだ。一切の情報を与える前にだ。

だから俺は聞いてみた。

「この世界での俺はどのような存在だつたんだ？」

そうすると、

「うーん…物語の主軸の1人、かな？というか、テレビ番組だつたんだよ。『仮面ライ

ダーブレイド』っていう」

俺はその時、一体どういうことなのかと思った。この世界でやっていたテレビ番組なら、その役をやっていた人物もいるだろうから、何らかのパラドックスが起こっても不思議ではない。

しかし今ならわかる…

あくまでも創作物からなら、その創作物の中でのデータから、聖杯を通して召喚出来る。アルビノジョーカーも同じ方法で召喚されたのか、と。

「まあいい。いくら始さんでも…邪魔するなら、殺す」

さて、とりあえずこいつを捕獲しなければな…

所変わって

剣崎サイド

…数分遅かったか。もう少し早ければ、ライダーと共闘して幾らかは削れると思っ
たが…

「お、お前、セイバーか？」

「ああ。そういうお前は…ライダーのマスターか」

「…ああ」

「とりあえず、ここから離れる。こいつは俺の相手だ」

「分かった！僕は避難を要請しておく！」

この申し出は助かる。間も無くここは戦場になる。それなら、少しでも安全な場所に他の住民を移した方がいい。

「頼む！」

「じゃあ！」

よし…こいつを数分、足止めするか…！

数分後

ガン！ガン！

…なかなか強い…！当てようにも当たらない…！

…ライダーのマスターは逃げたようだ…

「攻められてばかりも飽きてくる。こちらも攻勢に出るとしよう」

そう言つて鎌を杖のように扱い、片手をこちらに向けて、

「目覚めよ！白きイバラよ！」

…?!これは…

「グッ…これは…イバラ!?どういう…」

俺は気がつくのと、地面から生えてきている白いイバラに身体を拘束されていた。

そして、縛られている俺を、問答無用で鎌を用いて縦に横にと、斬ってくる。斬られるたびに、アーマーから火花が散る。

「ハハハハハ！金の剣王も、やられるがままか？」

…金の剣王？

金↓俺の今のアーマーの色

剣王↓キングフォーム

…こういう事か？だがなぜ、初対面である俺のこのフォームのことを知っている？
と言つても、俺も『白いジョーカー』なんて知らないが…

「ククク。雪辱を晴らすには丁度いい。素直に死ね！」

雪辱？流石に知らないが、このままやられるわけにはいかない。俺はキングラウ

ザーでイバラを斬り裂き、相手の動きを止めることにした。

『タイム』

そのカードを、ラウズすることなく。

俺のキングフォームは、本来なら♠?のK(キング)『エボリューションコーカサス』1体との融合で発現するはずの姿だった。

しかし、アンデッドとの融合に必要な『融合係数』と呼ばれるものの数値が異常に高かった俺は、自分の持つ♠?のカードのアンデッド13体と融合するというイレギュラーな事態が発生してしまった。

これにより、ジョーカー化や暴走の可能性というリスクと引き換えに、ラウズカードをラウズすることなく、♠?のアンデッドの力を使うことができる。

それにより、あのジョーカーの動きをノータイム(洒落じやない)で止めた

「刻を縛れ!白きスカラベよ!」

はずだったんだがなあ!…ん?スカラベ!?!『タイム』は♠?の10。そしてその

フルネームは、『タイムスカラベ』。つまり…

（「コイツは…詠唱だけでラウズカードの力を使えるのか…!となると、さっきのイバラは?の7、『バイオプラント』か!」）

なるほど。という事は、『タイム』で止められた動きを、同じ『タイム』の力で相殺したのか!

「その通りだ!いい推察だな!だが無意味だ!」

ドゴン!

「ぐっ!」

不意を突かれて無防備だった俺に腹パンを入れてきたキャスター。…クソ。キャスターにしては強すぎる!

しかも、恐らく扱えるカードの力は、確実にあちらの方が多し…。どうにかならな

いか……!

所変わって

始サイド

「うあああー!」

キャスターのマスターからの攻撃が、こちらに向かつて飛んで来る。

多方向からか……なら、

『スラツシユ、チョップ、トルネード』

俺はこの3枚をラウズした。

ん?なぜ、『チョップ、トルネード』の『スピニングウェーブ』を使わないか?

その理由はこれだ。

「ハア!」

俺は、色々な方向に向きながら、カリスアローを振り回した。すると、

ブオンブオンブオン!!

こうして、『風を纏った飛ぶ斬撃』の完成だ。しかも、スラツシユに加えチョップも入ってるから、実質的に、『中距離版スピニングウエーブ』とも言えるようなものになる。

ザシユザシヤ！

「…！グアアア！」

…よし。2本切れたか！

「ウガア！」

…切れた断面から再生とは…俺の苦勞つて一体…

ドガドガドガドガン！

…なんとか避けきれたが、アスファルトをめぐり上げるほどの力を持つのか…綺礼もこんな攻撃でよく肋骨だけで損傷が済んだな！ 下手したら死んでるぞ！

俺は危険を承知で、接近戦を試みた。

すぐそこまでは行けるが、やはり尾に阻まれる。

「ハハ…ハハハ、これじゃあ、俺が悪役か…」ボソ…

…ん？

「…まあいいや。楓がないこの世界なんか、未練はない…さつさと壊されればいいんだよ…こんな世界…！」

俺は近付けている今が好機と、尾を弾きながら、声を大にして聞いた。

「楓とは誰だ！お前の願いに関係している者か！」

そして返ってきた返事は、

「ああ、そうだよ！楓は！俺の大事な恋人だった！でも死んだ！俺が殺したようなものだ！だから、こんな運命を楓に与えた世界なんか、壊されればいいんだよ！」

…ブチッ。

コイツは何を言っている？死ぬような運命を恋人に与えたから、世界を壊す…？

「おい…！」

自分でも驚くほどに、低い声が出た。その声にアイツも一瞬震えた。

「お前は運命から逃げているだけだろ…！あいつのように…剣崎のように、運命と戦うことなく逃げた、ただの臆病者だ！」

その言葉を聞き、アイツは

「…そうだよ！俺は、元々…」

イジメられるような臆病者だよ、クソつたれがあああ！」

…不味い、地雷を踏んだか…？

ドドドドドド…！

…尾の数が増えてる、だと!?

「アハハハハ！死ぬ！死ぬ！シネエ！」

これは……ヤバイ。あの3人は逃したとはいえ、このままだと俺が生きて帰れない。俺はそう思いながら呟いた。

「ハア……こいつ、早くなんとかしないと」と。

劣勢とお父さんの到着とクラスカード

始サイド

『エボリューション』

俺は、??のK（キング）『エボリューションパラドキサ』を使い、『ワイルドカリス』に変身した。

このフォームは、ジョーカーの能力である『他のアンデッドへの変化』による、『パラドキサアンデッドの姿への変化』ではなく、『今の姿（＝仮面ライダーカリス（通常））』に、『エボリューション』本来の『進化』の力が作用して発現するフォームだと推測している。

これにより、黒がメインだったボディは赤く染まり、銀と赤だった胸のクリスタルは、緑へと色を変えた。

そして俺は、腿に現れた『醒鎌ワイルドスラッシャー』を手に取り、攻撃を仕掛ける。

ザシユ！ズバ！

「……グウウ！」

切れた……と思っても、

「ガウア！」

やはり、断面から再生する……

なら、

一撃で、この尾を全て吹き飛ばせばいい。

そして考えた俺は、詠唱を開始する。

「運命を貫き……」

そう言いながら、ワイルドスラッシュヤーをカリスアローにドッキングさせる。すると俺の体から、ハートスーツのカード13枚が飛び出してくる。

「絶望の闇を穿つ光の旋風よ！」

飛び出したカードが1つとなり、一枚のカードが生み出される。

そしてそのカードを、

「今ここに、その力を証明しろ！」

ワイルドスラッシャーをドッキングさせたカリスアローに、ラウズする。

『ワイルド』

「これで終わりだ……！『荒々しく黒き光の旋風（ワイルドサイクロン）』！」

そしてカリスアローから、圧縮された高出力なエネルギーを、こちらに向けて突きに来ようとしている、尾に放った。

俺の宝具、『ワイルドサイクロン』は2パターンあるが、今回は、対軍宝具である射撃型を使用した。

そして、

「……!?アギヤアアアアアアア!？」

目論見通り、尾を吹き飛ばすことに成功した。

俺は、その一瞬を見逃すことなく、キャスターのマスターを捕獲すべく、接近した。

しかし、これが間違いだった。

「…?」

俺の腹に

風穴が

空いていた

「…え?」

所変わって

劍崎サイド

ガツ！ガキン！

チツ……！なかなか有効打が打てない……！

俺は、この白いジョーカーに対し攻撃を仕掛けてはいるものの、いなされたり、弾かれたりと、なかなか素直に攻撃が当たらない……

さらに……

『スラツシユ』

俺がノーラウズ能力を使えば、

「斬れ味を増せー！白きトカゲよー！」

相手も同じ力を使い、こちらの強化を相殺してくる。

しかも、相手はスピード以外のカードの力も使える。それに対し、俺はスピード以外のカードの力を使えない。敵の方が、使える力の数が多い。単純計算でも敵の手札は、俺の約4倍の枚数だ。

それなら、

そんな手札の多さでも防げない、圧倒的な一枚を切ればいい。

俺は、小っ恥ずかしい限りだが、詠唱を開始することにした。

「青き5つの力よ……」

そう言うと、体から俺が望む5枚のカードが、手元に現れた。

「王たる剣の礎となり……」

そして、その5枚のカードを、キングラウザーに装填する。

「最たる一撃を敵に与えよ！」

『スペード10、J（ジャック）、Q（クイーン）、K（キング）、A（エース）』

「受けるがいい！『至高なりて愚直なる閃光（ロイヤルストレートフラッシュ）！』」

『ロイヤルストレートフラッシュ』

……あー、恥ずかしかつた。ちなみに、これまでも何回かこの技は放っていると思うが、あれは加減が入っている。

切嗣と共にアインツベルン城を爆発オチにした時は70%強。

始に勘違いで放った時は、50%強。

そして、今の痛い詠唱を伴って、ようやく100%だ。

俺は、今自分の力だけで放てるであろう最強の一撃で、敵を討つ。

俺が剣を構えると、目の前に5枚のカードが現れる。

俺は、そのカードに向かい突進する。

一枚一枚のカードを通り抜けていくたびに、俺の中にとつともない力が注がれてくる。

そして…

「ウエエエエエエエエエエ！」

「…!?グオオオオオオオオオオ!!」

俺は、白いジョーカーに真正銘、100%のロイヤルストレートフラッシュで、直接的に斬り裂いた。

俺は、敵より少し離れた位置で停止したので、後ろを見る。

「やったか…?」

「いや、やれていないぞ。金の剣王よ」

「…!?!」

ドゴン！

「グア?!」

俺は、何故か背後に現れた白いジョーカーに、とてつもなく重い一撃を食らってしまっただ。まっただ。

そしてその一撃で、なんとキングフォームが解除されてしまった…。

「が、あ…!」

「いや、さすがに危なかったよ…しかし、こちらもギリギリ間に合ったのでね」

「そうか…! コイツは、俺が停止した場所にいた時に…!」

『我を癒せ! 白きラクダよ! そして、地に潜らせたまえ! 白きモグラよ!』

こういう詠唱をしたんだろう…! そして潜ってこちらに接近している間に、拳の力

をキングフォームを解除できるまでに強化した訳か…!

「グ…ウエエエエエエエエイ！」

俺は、背中に走る痛みを堪えながら、敵に斬りかかる。

が、

「無駄だ」

バギン…!

「…な!？」

ブレイラウザーが、折られたのだ。まるで、クルミを砕くかのような感覚で。

「ハア！」

「グ！アアア！」

さらに、鎌で斬りかかって来られ、防ぎ術のない俺は、まともにその斬撃を受けてしまった。

「ハハハハハ！終わりだ！金の剣王よ！」

俺は…ここで死ぬのか…？

心残りには…無いな。あいつと…始とまた、飯食って、酒飲んで、この世界で…新しい友達が出来て、そして、

俺を尊敬して見てくれる、友達の娘がいて…

………

ああ…ダメだ。

そうだ、まだ死ねない。

始も、天音ちゃんを護りたいって思った時、こんな気持ちだったんだろうか…あの娘と…イリヤスフィールと、また遊ぶ約束を…切嗣には内緒でしてたな…

なら、せめて…

ボロボロでも良いから、帰らないとなあ……!

俺は、折れたブレイラウザーを掴み、刺し違えてでもと思いつながら、斬りかかった。

しかし、

バババババ!

「……!?!」

「……ムウ!?!」

そこに、この場には異質な、『銃声』が聞こえてきた。

そして、

「セイバー! これを使え!」

その銃声の主であり、俺のマスター。衛宮切嗣から、カードを渡される。そのカードは横に回転しながら、俺の手元に向かってくる。そのカードは、

「…なんだ？このカード…？」

鎧をまとった剣士が描かれた、下部に『セイバー』と英語訳で書かれたカードだった。

ただ、ラズカードでないことはわかる。

しかし、何故かどう使うべきか、体が知っていた。

『アブゾーブQ（クイーン）』

俺は、アブゾーバーを起動し、

『エボリューションセイバー』

そのカードを、アブゾーバーにラウズした。

その時、切嗣がこんなことを言っていた。

「…ん!?アーチャーのカードが…！ひとりでに…！」

所変わって

始サイド

俺は、あの尾に貫かれていた。

その時、ワイルドカリスから通常のカリスに戻ってしまった…

尾の再生速度の速さを…俺は計算していなかったんだ…

リカバーでも、さすがに回復しきれないダメージである事は一目で分かった…

血の気が引いていくのが分かる。

ここに召喚されて、友達が出来て、剣崎とも再会できた。不死で、かえって苦しむ理解者もいた。

そして、

この世界でも、護りたい娘が出来た。

俺は、天音ちゃんの事を…もう、護る事はできない。あの世界で、俺は死んでしまつたから…

でも、こうして新たな生を貰つた。

そこであの娘と…桜ちゃんと出会い、今度こそ護り切ると、自分に誓つた。ここで、死んではいられない。

俺は…俺は！

「あの娘を護る…守護者だ！」

そう叫んだ俺に、尾が向かってくる。

俺は、決して目を閉じなかつた。

そして、

『ほう…自らを守護者と宣言するか…いや、お前こそが真の守護者たる者なのだろうな』
俺の前に、よく分からない一枚のカードが現れたかと思えば、

『…ハア！』

なんと、向かってきた尾を弾き飛ばしたんだ。そしてそのカードは、俺の手元に来た。

カードには、弓を引く女性が描かれており、下部には『アーチャー』と英語訳で書かれてある。

『使え。私も、手を貸そう』

そうして俺は、

『アーチャー』

そのカードを、カリスラウザーにラウズした。

セイバーとアーチャー

剣崎サイド

???

……

…あれ?ここ、どこだ?

…俺は、たしか、あのカードをラウズして…

あ、そうしたら光が出てきて…それつきりか。

しかし…ここはどこだ?見たところ、どこかの丘か?

でも、俺が海に飛び込んだ丘でもないし…?

「あなたが、次の『担い手』となる方ですね」

…!?

突然の声に驚いた俺は、その声の発生源を向く。

そこには、

「…女…の子?」

金髪で、美しさと気高さを兼ね備えた美貌。その手には、刀身が金色に輝く剣と、『青い鞆』が握られていた。

一応、名前を聞いてみることにした。

「…君は?」

「はい。私の名は『アルトリア・ペンドラゴン』。アーサー王…といえば、理解してもらえますか?」

………(0w0)

………ウエ!?!Σ(0w0)

あ、アーサー王だって!?

…ん?いや、ちよつと待て…

確か…アーサー王って、『男』だったんじゃない??

「あくまでも、それは伝記の中での話です。こういう『if』も、有るのですよ」

…さらつと心を読まれた…ドウイウコトナンダイツタイ…

…アーサー王?なら、その持つてる剣は…!

「はい。あなたの想像通り、この剣は『エクスカリバー』。あまりにも有名すぎる聖剣です」

やはりか……!ということは、

「『担い手』というのは……聖剣の、ということか」

「はい。そしてもう一つ、これもです」

そう言っただけで彼女が見せたのは、青い鞆だった。

「これもか?だが、この鞆は一体……!」

と、言いながら『アーサー王伝説』、そして『鞆』。

この2つが関連する事柄に、俺は心当たりがあった。それは、

「『エクスカリバーを納める魔法の鞆』……所有者不傷の鞆か!」

「ええ。『アヴァロン』といいます」

「……ちよつと待て。伝説通りなら、その鞆は……」

そう。伝説通りなら、その鞘はアーサー王の異父姉である『モルガン』が、アーサー王から盗み取ったはずなのだ。

「あく。その事ですか。実はこんなことがありまして…」

回想開始（アルトリアサイド）

ブリテン 円卓の間

時は、鞘が盗まれてしばらく経過しての事です。

私は、いつものようにランスロットから、国の様子を聞いていました。

「王様ゲーム？」

「はい。民の中で、ゲームの中といえど王になれるということで、密かに人気なのだとか…」

私は王として、民の事をすることを大事にし、繁栄を願っていた。その際に、『王様ゲーム』なるものがあると知りました。そして、

「なるほど。」

…では、円卓の騎士たちでやってみましょう」

「…ウエ？」

その時のランスロットの「え？」の発音が少しおかしかったのは気にしてません。

数時間後

「何故このようなことを？」

「民の事を知るのは、繁栄の上でとても大事なことです。というわけで、やってみましょう。あ、私もルールに則りますので、あなた達の誰かが王様の印を引いて、私が指名されたとしても、素直に従います」

（『王が…ゲームとはいえ、私達の命に…従う!?!』）

「さあ、

ゲームを始めましょう」

1 巡目

『王様だーれだ!』

「あ、私ですね」

引いたのはガウエインでした。

「そうですね…では、『5番が6番に愛の告白をする』!」

『ぶふう!?』

いきなりの爆弾命令。

そして、その餌食となったのは、

「あ、アーサー王！いえ、父上！俺と結婚してください！」

モードレッドと、

「却下します。第一、私は父ではなく母です…」

先程のモードレッドの発言通り、私でした。

「うう…でもいつか！父上に相応しくなれるように、頑張ります！」

「…だから、私は母です…父じゃ…ないんです…orz」

…正直、どこで育て方を間違えたのかと思いましたよ、ええ。

そして2巡目。

ここで、とんでもないことになったんです。

それは…

「それは…？」

「一体、この王様ゲームに何が起こったのか!? 続きは別サイドの後で!」

「ここまで引つ張って、『続きはCMの後で』みたいなノリ!? しかもなんかメタいし!」

所変わって

始サイド

「(イイイ)は…?」

俺は、空で歯車が廻る荒野にいた。

そして、俺の周りにあるのは無数の、

剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣
剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣剣

そう、無数の剣だった。しかし、

「……この剣……少し『中身』が薄い……？」

俺は、その剣の一本一本の『中身』、つまり『本物らしさ』、とでもいうべきものが、薄いのだと思ったのだ。

「そうだ。あくまで、それらは本物に近い偽物、贋作だ」

その聞き覚えのある声に、俺は振り向いた。

そこにいたのは、黒のインナーに赤い外套を着た、褐色肌の一人の青年だった。

「さつきは助かった。礼を言う」

死にかけだった、俺を守ってくれたことを素直に感謝した。すると、

「なあに。私が目指していたのは『正義の味方』だ。それが人の一人救えないでどうする？」

と、返された。…悪い奴ではないと思うんだが…

「…お前に聞きたい。『お前はなんだ』？」

つい俺は、その思っていた一言を口にしました。

すると彼は、

「俺、あ、いや私は…理想に溺れただけの無銘の弓兵だ」

と、嘲笑しながら自分へ言い聞かせるかのように、口にしていた。

「なら、『守護者』というワードに反応した理由は？」

「…それは、私が世界と契約した『守護者』だからだ。まあ、ただ世界の崩壊を守るために、罪の無い者の命も奪う…ただの『掃除屋』だったがな…」

俺は『罪のない者の命も奪う』という言葉に武器を構えかけたが…その青年が、苦虫を何匹も噛み潰しているような表情をしているのを見て、その手を収めた。

「…だからこそその『真の守護者』か…」

「そういうことだ。言ってしまえば、私は自身の正義のために、罪の無い者も殺したが…」

お前は『桜』を守るために、悪を切り裂く…その姿は、まさに私の目指す理想たるものだ」

……

……ん？

…おい待て、ちよつと待て。

「何故、お前が桜ちゃんを知っている!? 答えろ! …ハッ! まさか…物心ついていない頃の桜ちゃんに、あんなことやこんなことをしたのか!？」

「!? いや待て! こちらの話を聞け! それは多大なる誤解だ!」

我ながら、思考が暴走しているのは分かっている。

だが、この男が桜ちゃんに手をかけたなら、話は別だ!

「問答無用!」

『フロート、ドリル、トルネード』

『スピニングダンス』

「ハアアア!」

「いや、だから! ああ…もう! こんなに話が伝わらないのは、『凜』以来だ! 『熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）!」

「凜ちゃんにも手をかけたのかアアア!?!」

「誤解だつて言つてるだろお!?! ああ…もう…

なんでさ——————!」

…なんだろう…今の悲鳴が素のコイツだと思えた。

数分? 後

「…すまなかつた。俺の勘違いだつたようだな…」

「いや、私も…何も言わずにその2人の名を出すのは、いささか不審感を扇ぐだけだつたな…」

俺たちは、それぞれが持っていた勘違いを解消し、お互い謝罪した。

その際に、こいつの過去も聞いた。…まさか、未来の桜ちゃん先輩とは…
「…まあ、お前の実力も分かった。お前なら、これを使えるだろう」

そう言いながら渡してきたのは、黒い弓と捻れた…剣？矢？を渡してきた。

「カードの中から、お前が桜を守るか、この目で見極めさせてもらう」

…最後の最後に重荷乗せてきた…。

そして…

現実世界

カード使用より約3秒後

俺は、自分の姿を見てみた。

その姿は…

「…なるほど、あいつ…俺に与えたのはあれだけではなかったのか。全く、根はお人好しか…境遇から本質まで…劍崎によく似ているな…」

従来の肩のアーマーが外れ、アイツの着ていた赤い外套を着ている。膝下程の長さだが、動きを阻害しているわけではなく、むしろ動きやすい。

俺は、右手にカリスアローを出現させる。そのカリスアローは、赤以外の色が全て漆黒に染められていた。

そして、自身に爆発的に注がれた魔力を霧散させ、キャスターのマスターの前に姿を現した。

「…!?…なんだ…!?そのフォームは…!」

敢えて名乗るなら…そうだな、

「『仮面ライダーカリス・アーチャーフォーム』…とても言っておこうか…では、行くぞ。

全てを狩られる準備は出来たか？」

「…ウガアアアアアアアア！」

さあ、ここから反撃と行こうか。

所変わって

剣崎サイド

「さて、別サイドの話を挟んだところで、続きをお話しします」

…この世界での体感だが、40分くらい待った気がする…あと、別サイドって何だったんだ？

「というわけで、回想の続きです」

回想再開（アルトリアサイド）

そう、2巡目。たったの2巡目。ここで、事件が起こります。

2巡目

『王様だーれだ！』

「あ、次は私ですね」

この時、私が王様の印を引きました。

（『あるべきところに戻ったと感ずるのは、私たちだけだろうか…』↑円卓の騎士の方たちの思ったこと）

ここで私は、どんな命令をしようか、誰がなんの数字を持っているのか、そんなこ

とを思いワクワクしながら、周りを見ていました。

苦笑いしている騎士もいれば、そっぽを向いてる騎士もいました。

その中で、とりわけ焦っている者がいました。

そう、モルガンです。

私は、直感をフルに活用し、モルガンの数字を当てに行きました。

そして、

「では、4番の方。私に隠していることを正直に話し、罪を悔い改めなさい」

…その時のモルガンの表情ですか？この世の終わりみたいな顔でしたよ？

「では、隠していることを、この場で堂々と話しなさい」

「……………した」

「聞こえん！王の前であるぞ！あなたが王の異父姉であろうと、このゲームでの王の命は絶対！さあ！話すのだ！」

…なんだかゲームに対してノリノリなランスロットがそう言うのと、モルガンは小さな…本当に小さな声で話し始めた。

「私は……私は！」

アル……あ、いえ、アーサー王の！エクスカリバーの鞘を盗んでしまいました！大変申し訳ありません！」

『……………え——————！！??』

そしてその後、アヴァロンを返してもらいました。

モルガン自体は、今のブリテンを壊すことで、発展させようとしていたようです。モードレッドもそのために、文字通り『造った』子どもなのだそうです。しかし、私にとっては、たった一人の最愛の『娘』です……あまり男言葉を使ってほしくないのですが……

「父…あ、ううん…『母上』！今から遊んでくれますか？」

鞆を返してもらってすぐ、モードレッドにそんなことを言われました。

そしてその表情が年相応の『女の子』の表情でありました。

…円卓まで来るのに、相当な道だったでしょう。母親であるのに、甘えさせることもできなかつた…

だからせめて、

「ええ！この後、私の部屋に来てください。トランプで遊びましょう！」

「やった！母上と遊べる！」

「…モードレッド、あなたはあなたの好きなように生きなさい。私は、そろそろ隠居でもします」

「…うん。『もう一人の母上』！これからも元気で！」

「…ええ！」

私の娘を、甘えさせることにしたのです。

回想終了

…あれ？

「おい。なんでブリテンが減んでないんだ？」

こんな調子だと、モードレッドの反乱が起きていない、ということになる。だって、真の『家族』って感じだったし。

「あゝ…やっぱり気付きましたか。実は、やはり反逆派の騎士の勢いが絶えず、どれだけの武勲を挙げた者でも一人、また一人と死んでいきました。そして、

私とモードレッドは最後まで生き残り、モードレッドが私を庇って死にました。そして、モードレッドを抱き寄せ…そのまま…自殺しました。流石のアヴァロンでも、自殺は予想外だったのでしょうね」

「…反逆派…ランスロットか」

「それもありましたが、やはり…私のやり方に反対する者も多かった。それ故にです」

「…」

「それでも…モードレッドは、私についてきてくれました。その身が…私に反逆するために生まれた存在だったにも関わらずです」

「…なるほど。お前は娘に愛され、また愛したんだな」

…俺は、幼い頃に親を火事で亡くした。そんな両親も…生きていたら、そこまでの愛を注いでくれただろうか？

「…私の話はこれで終わりです。あなたは、あなたの生きたいように生きればいい。私は、この丘から見守っています」

そう言いながら、俺に剣と鞘を渡してきた。すると、鞘が俺の体の中に入り込んだ。そして…

俺の体の中の、『何か』が変わった気がした。

俺はその感覚に疑問を覚えながら、

「さようなら。あなたに、剣の加護がありますように…」

現実に戻って行った。

そして…

現実世界

カード使用から約4秒後

「…!?なんだ!?その姿は…そんなもの…見たことないぞ!」

…俺も初めてなんだから当然だろ。

体を見れば、彼女が着ていた鎧に似たアーチャーが胴のところ、スカートのようなアーチャーが腿に追加される。そして、胴のアーチャーにスペードの紋章、その中には剣の紋章が施されていた。

「貴様…!何者だ!」

そう聞いてきたキャスターに、俺はこう答えた。

「…名乗るなら、『仮面ライダーブレイド・セイバーフォーム』…でも言っておく。ああ
…ちなみに、

どこかの通りすがりのように、覚えておかなくてもいいぞ？キャスター」

「…ほげけ！」

さて、聖剣の力…見せてもらおうとするか。

剣／弓／復／助

劍崎サイド

カメラ視点

「ヌアア！」

「はああ！」

ガン！ガキン！

アルビノジョーカーの鎌と、ブレイドの持つ聖剣がぶつかり合う。火花を散らせながら、つばぜり合いを繰り返す両者。しかし優勢なのは、

「ウエー……ウエー！」

先ほど覚醒し、聖剣を手に戦うブレイドだ。対してアルビノジョーカーは、敵の突然の強化に戸惑い、攻めに転ずることができない。

そして…

「もらった！」

キーーーーーン！

「…！鎌が！！」

ブレイドは、アルビノジョーカーの鎌を弾き飛ばすことに成功した。

「ハッ！デアー…ウエー……ウエー！」

ザン！ザシャー！ザン！

「グオオオオオオオオオオ！」

さらに、無防備になったアルビノジョーカーに、剣撃を叩き込む。まともなダメー

ジをロイヤルストレートフラッシュ以外で加えた瞬間だった。そしてその後、相手を遠くに弾き飛ばす。

「グウ…ウガアアアアアアアア！」

突進して一気に距離を詰め、ブレイドを倒そうとするアルビノジョーカー。その真つ直ぐな突進に目を背けず、むしろ向き合いながら、詠唱を開始する。

「幾星霜の光を束ねし剣は…」

光の奔流が、下段に構える聖剣に集まっていく。

「今ここに！聖なる輝きを解き放つ！」

やがて光は、爆発的な魔力を保ちながら、その刀身に集中していく。

そしてついに…

「これが…人類の『最強の幻想（ラスト・ファンタズム）』！」

光が、放出する。

「受けるがいい！ 『約束された（エクス）…』」

ブレイドが、そう言いながら両手で聖剣を振り上げる。

そして、

「勝利の劍（カリバー）
！！！！」

一気に振り下ろした。

「…ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアア
！！！！！！！！」

そのとき剣崎は、一瞬だけ鈍い光が見えたような気がした。

所変わって

始サイド

カメラ視点

「フッ！ハア！」

「……アアアアアアアアアア！」

始に、尾が迫ってくる。しかし、時には避け、時には斬りかかりながら、渉に向かい接近する。

「オラア！」

さらに尾の数が増え、始を襲う。

が、

「…そこだ！」

始は、尾を斬り飛ばし、そこから矢を放つ。

ドッ！

「…?!再生…出来ねえ?!」

その理由は、始が斬った尾の断面に矢を放ち、刺さった矢が『エネルギー体の塊』から『実体の矢』に変わり、再生を阻害しているためだ。

ザシュー！ドッ！ザシャ！ドド！

「グギャああアアアアアア！」

その行為を何回も繰り返し、渉は尾の再生が出来なくなった。

それを見た始は渉の背後に回り、詠唱を始める。

「我、物の怪なり」

かつての自分への自虐を含みながら、カリスアローからラウザーを外し、ベルトに

戻す。

「されど、持ちし心は人間なり！」

黒い矢を構え、狙うは一点。外すことはない。何故ならそれは…

「貫け！『偽（カラド）…』」

『既に中っている』のだから。

「螺旋剣（ボルグⅡ）！」

そしてその矢は、

『ぎゃあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあー!!』

渉の『魔術刻印』に的中した。そして、魔術刻印は生命を持っているかのような動きをし、始から逃亡しようとする。

「…いやはるか！」

しかし、それを察知していた始は、その魔術刻印を斬り裂き、持っていたブランクカードに無理やり封印させた。

『ギャアアアアアアアアア…』

そのカードは何のカテゴリもスートもなく、ただ刻印が何重もの鎖に繋がれ、その封印の強度がうかがえる。

「…」

それを確認した後、渉のところに向かう。

「…あーあ…もう少しで、勝てそう…だったんだけどな…」

「俺に勝つてたところで、どうにもならないだろう。お前の願いは叶わない」

「いや…ひとつは叶ったよ…」

「…?」

その言葉に疑問を持つ始。

その表情を見て渉は、口を開いた。

「『俺が一番好きな仮面ライダー』と…バトれたんだからさ…」

ズズズ…

「…!?」

その濃密な魔力に、今の今まで気づかなかった始。

そして、

ガッ…シユー…ン…

渉の胸ポケットから出てきた一枚のカードに、渉は吸い込まれた。

…バシユ!

最終的には、ひとりでに猛スピードで飛んで行った。

そのカードを見て、始は驚愕を隠せなかった。なにせそのカードは…

「今のは…まさか、『バニティカード』!? くっ! あれを追わないと…

最悪…この街が終わるぞ…!」

自身の『1度目の死』に大きく関わったカードなのだから。

所変わって

劍崎サイド（劍崎視点）

「…!？」

俺は、確かにキャスターを斬った。実際あいつはほぼ消えかけだ。なのに…

「なんだ…!?!この異常なまでの魔力は…!」

そう。キャスターを倒したはずなのに、どうにも嫌な予感が拭えない。

その時、

ヒューーーーー…

「…!カード…?」

ラウズカードが飛んできたのだ。だが、そのカードは…

ガシン…！

「ククク…お前たちは終わりだ…！」

青、橙、赤、緑の王よ！その力を現し、混沌たる邪神を顕現せよ！『14復活の石板
(リバイバルストーン・フォーティーン)』！」

キャスターが持っていた石板に、セットされた。そして…

ズズズズズ…

突然、地鳴りが響きだした。

「くそ…遅かったか！」

「始!?!」

俺は、いきなり現れた始に正直驚いていた。しかし、その様子を見る限り、始は先ほどのカードを追いかけてきたようだ。

「マズイ……おそらくキャスターの宝具は、邪神を復活させる物だ！早く止めないと……！」

始のその異常とも呼べる焦りが、俺の身にも染みてきた。石板から放たれている、この禍々しい魔力とその大きさ、どれを取っても始の推測に違わないと思うからだ。

「ああ！止めるぞ！」

そう言いながら、2人で石板を攻撃するが、効かない。

「……クッ！聖剣でもダメか……!?!」

「この弓でも、いささか威力が不足しているか……!」

しかし、俺たちの健闘むなしく……

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

キャスターの宝具が発動され、俺たちの前に、邪神が現れてしまった。

「14（フォーティーン）…ついに復活したか…！」

「始！何か知ってるのか!？」

「…俺の生前に、少しばかりな…だが、言ってる暇はない！俺たちだけでもアレを止めるぞー！」

「分かった！」

そして、俺と始は並び立つ。

「…お前とこうして並んで戦うのも…久々だな」

「そうだな…行くぞ、劍崎！邪神を倒すぞ！」

「ああ！」

そう言って、俺たちは邪神に向かっていく。だが、
『フハハハハ！いくら強かろうと、この14に2人でかなうものか！』

ドゴーーーーーン！

「うわアアアアアアアアアア！」

14は、手に持っている剣で、俺たちのいる地面ごと薙ぎはらった。当然、その上を走る俺たちも吹き飛ばされる。

「くそ……これじゃ近づけない！」

「弓は放つまでを狙われたらキツイ……！どうすれば……！」
『考え事など、している暇があるのか？喰らえ！』

そうこうしているうちに、雷を落とされる。

「ぐあああああああ!!」

この攻撃で、俺も始も変身が解除された。セイバーフォームのアーマーでも、かなりキツイということだ。

『フハハハハ！死ねえ！』

俺たちに再び劍が迫る。

その時、

ヒューーーーー…ン！

ドゴーーーーーン！

『ヌウ!?何者だ!』

突如、ロケットランチャーの弾が14に命中した。しかし…何者だ？

「やはり、デカブツにはデカブツか。持ってこれるだけの大型銃器も、持ってきて良かった」

…!?この声は…!

「待たせたな、セイバー！いや、劍崎！僕も加勢する！」

「切嗣！早く逃げろ！これは、普通の間とか魔術師でどうにかなるレベルじゃない！」
確かに先ほどあのロケランに助けられたが、それでも油断を突いた物だ。2発目が当たるとはないだろう。

そう思っていると、

もう1人現れた。

「ハアアアアアアアア！」

ドスドスドス…！

『ヌウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！？』

「この声も聞き覚えがある…が、何故だ!？」

「この『デイルムツド・オデイナ』、これより助太刀いたします」
「何故生きている!？ランサー！」

そう、『自身の槍で胸を貫き死んだ』ランサーだった。

運命の最終決戦！時空を超えたブレイドライダーズVS
14！

生存と戦う理由と『!?!』

剣崎サイド

俺は今、とんでもないものを見ている。

「この『ディルムッド・オディナ』、これより助太刀いたします」

死んだはずのランサーが、何事もなかったかのように俺たちの前に現れたからだ。切嗣は…目を見開いてるな。口は半開きだし、少々震えているようにも見える。まあ、分からないでもないが…。

「なあ…なんで生きてるんだ？確か…僕の目の前で、ライダーの戦車に轢かれて、その時に僕を貫こうとした槍が、ランサーの心臓を貫いていたはずだよな？そして、消失した…はずだよな？」

…まあ、自分の目の前で消失したはずのランサーが、今ここにいるんだから、質問

の最後の方が不安そうなのもよくわかる。

「ああ！そのことですか！実はこんなことがありまして…」

回想開始（ランサーサイド）

それはあの時（7話の最後付近）のことです。あの時、セイバーのマスターを当初、『破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）』で貫こうとしたんです。その時、ソラウ様に念話でこう言われたんです。

《…！待ってデイル！それじゃダメ！『必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ）』に変えて！今すぐ！》

私は最初『何を言っているのか』と思いましたが、それもまた彼女の御言葉。素直に従いました。

すると、

「アラララララーイ！」

あの戦車男が、私に突っ込んできたのです。ええ、それはもう、かなりの勢いで。そして、

ドゴン！

「グホアウ!?…!?ゴフツ…」

私は思い切り轢かれて、その影響で持っていた『必滅の黄薔薇』で、自分の心臓を貫いてしまうということになったんです。

回想一時停止（この間、約2秒）

「ちよつと待て！結局は貫かれたんだろう!?なんで生きてるんだ!？」

「切嗣、ちよつと黙ろうか…？話の流れ的に、今からが本題だろう…親バカやら甲斐性なしを拗らせるまえに、まずその早とちりを治そうか…」

「劍崎、ちよつと怖いぞ…?」

始がなんか言ってるが気にはしない。まずは自分のマスターを矯正するのが、俺の

役目だ。

「ランサー。続きを」

「分かった」

回想再開（ランサーサイド）

そして貫かれたわけですが…またソラウ様より、念話が届きました。

《ディル！霊体化して！》

（「…あ、そうか…！そういうことか…！」）

そして私は、その場で霊体化して『消失したフリ』をしていたのです。

回想終了（この間約1秒）

俺たちは、その話を聞いていたのだが…

「…しかし、そうだとでも腑に落ちないな…。なぜ貫かれて生きてるんだ？」

そう。槍で心臓を貫いていたのなら、なぜ生きているのか…？そこが疑問である。

「あ、それを言うのを忘れてましたね。その訳は、私を貫いたのが、『必滅の黄薔薇』だったからです」

…?

「実は、あの槍には『治癒の阻害』という呪いを相手に与える効果があるんです」「ちよつと待て。それならなおさら…」

そうだ。治癒の阻害というのが本当なら、こいつは生存なんてしてないはず…

「まあ、この槍で私自身は傷つかないんですけどね？」

「…え？」

「さすがに、持ち主に治癒の阻害をかけるような槍など使いませんよ。今回はそのおかげで助かりました」

…つまり…

「ランサーが槍で貫かれた↓でも、その槍でランサーは傷つかない↓結果、死ななかつた。

大体はこんな感じか？」

「はい。そして、あのハゲ親父の支配から脱した訳です」

…最後のひと言で台無しすぎる…。

「とにかく、ここは協力しよう。この街で過ごすソラウ様に危害を加えさせる訳にはいかんからな」

「…この町を守るのには、僕も賛成だ。アイリとの愛の巣…ゲフン。イリヤ達との W a i - W a i R O O M…も違うな。まあ、衛宮家を壊されるのは嫌だからね…」

…切嗣エ…。

「…さて、あちらも怒ってることだし、そろそろ戦闘体制に入れ。あ、剣崎のマスターにランサー。お前達の分のカードだ」

「ああ、ありがとう」

「では、ありがたく」

………

あ。

「そういうえば、14いたんだっただっけ」

「忘れるな！我は邪神ぞ!?!」

そうだ。素で忘れてた。今戦闘中だった。負けることは出来ない。負ける気もない。

だからこそ…

「俺は…戦えない者のために戦う！この身にまだ！ライダーとしての資格があるなら！」

俺は、かつての想いを再燃させた。

その言葉を聞いた切嗣も、口を開く。

「…僕は戦う…愛する家族のために。たとえその力が！かつて捨てた『正義の味方』の力

だとしても!」

それに続くように、ランサーも宣言する。

「私は戦う…私の、勝利を願う者のために!」

そして、始は覚悟を決めた。

「俺は戦う…!新しい生を受け入れてくれた家族のために…そして、桜ちゃんのために
!」

俺たち4人は今、

「[[「変身!」]]」

『turn up』

『change』

『open up』

運命の扉を開いた。

「セツ!ハア!」

ガギン!ギイイイイイ!

「そこだ!」

ドウドウドン!

「…フッ！」

ドストシヤドシユ！

「喰らえ！」

ザシユザシヤ…ドウ！

俺は斬り、ギャレンである切嗣が銃を放つ。俺たちはジャックフォームで、飛翔しながら攻撃を与えていく。

レンゲルであるランサーが、『2本の』槍…どちらもラウザーのようだが、おそらくランサーの持つ槍が変質したのだろう。そのラウザーで突き、飛翔能力を持つ始は飛翔しながら、ワイルドスラツシヤを装着したカリスアローで斬りつけては、矢を放つ。

レンゲルは、飛翔能力を持つてはいないが、俺の記憶にあるレンゲルよりアーマーが軽そうで、俊敏な動きをしている。

しかし、

「フハハハハ！無駄だ！お前達の攻めなど！」

ズアアアアアアアアアア！

「「「うわあああああああ!!!」」」

14は、俺たちを剣の一振りで吹き飛ばす。

「くそ！どうする!?このままだと、相手に攻撃が通らない！」

「…敵の心臓部を攻撃できれば…！」

「ハハハハハ！死に惑え！雑魚どもが！」

バチバチバチ…ドゴーーーーン！

「うわ!？」

…今の雷は、なぜランサーだけ受けかけたのだろうか。これが幸運Eか…。

…ん？

今、雷出したやつ…

…じく…

ピピピピピ…

ピン!

…!?

ちよつと待て…!まさか、あれ…!

「おいみんな!ちよつといいか!?!」

「…!?!どうした剣崎!」

「ん?どうした!セイバー!」

「あまり時間もない!手短に話せ!」

「あの雷を出すやつをよく見てくれ！」

「「？」」

…じ…

ピピピピピ…

3人の目線が点線付きの矢印のように、その武器に向かう。
そして、

ピーン！

そして認識した。さて、俺も（頭の中で）叫ぶとするか…

せーの…

《《《《あれ、聖杯だー…?》》》》

みんな、俺と同じ気持ちだったようだ。

さてと…アレどうしようか?!

方針と心臓部と毒槍特攻

始サイド

…うん、間違いない。現物は初めて見るが…あれは間違はなく聖杯だろう…。

そういえば、座の管理人も言っていたな…

『君が【変身】してたのは、確かハートのイメージがあつたね。その起源と言つてもいいものさ』

つて…。よく考えたら、あれは一種のフラグだったのか…？とにかく…

「おい、14！ちよつと話し合いをさせろ！」

（「…!?始!そんなのに応じるわけ無いだろ!何やってるんだ!?!」）

（「おいアーチャー!そこまであいつを怒らせたのか!?!」）

（「アーチャーよ…かなりの駄策だと思っただが…」）

「フン!お前らを潰すことなど、今の私には容易いことだ!いいだろう!30分待ってやる!」

（（「「「応じたー!?!」」」））

…なんか、他の3人の目が冷たいが、まあいい。時間も貰えたからな。

そして俺たちは、肩を組んで円陣の形になり、念話を開始した。

《セイバー…間違いないか?あれは聖杯なのか?叫んだのは同じなのだが…いささか信じ難くてな…》

ランサーのその質問に、

《ああ、確かにあれは聖杯だ。俺と切嗣は聖杯の実物を間近で見ている。そして、あれはほとんどその聖杯と同一だ》

…ん？

《劍崎、聖杯を見たことがあるのか!?!》

《ああ。切嗣の奥さんの体の中にあつた》

だが…アレは…

《汚染はどうした!?!かなりやつかいな物のはず…》

《ああ…アレは今、冷蔵庫の中だ》

…あ？

《汚染されてたから、冷蔵庫の中に作った小因果に突っ込んでおいた。そして、切嗣と切嗣の父親の魔術で封印処理して、万事解決…ってわけだ》

《…冷蔵庫、いや…『REIZOUKO』すごいな!》

まさか、そんな方法で汚染された聖杯を無力化するとは…!

しかし…それが本当なら、確かに願いを叶えるためには、あいつの持つ聖杯が必要だな…。何故かはわからんが、あいつは自分の持つてるものが、聖杯だとは気づいてないみたいだしな…。

《とりあえず、ここでみんなの願いを確認しておこうか》

あいつと戦う前に、聖杯に願うことを聞いてみることにした。

《まずは俺から。俺は、この世界に人間として受肉したサーヴァントだ。だから、俺の願いだった『人間になること』は、召喚の時点で叶ってるから、聖杯に願うことが無い。次は剣崎…のマスター》

《僕の願いは『恒久的世界平和』だった…けど、そんなものは必要ない! 『大切な家族との平和』さえあれば、それでいい…でもそれは、僕が築いていけばいいものだからね。僕も聖杯に願うようなことはないな…次は剣崎》

《俺も、始と同じで『人間になること』だった。けど、さっき『セイバーフォーム』になっ

た時、体内に鞘が入ったんだ。その時に、体が人間になってたんだ…。だから、俺も聖杯に願うことが無い…では、最期にランサー》

《『さいご』の文字がおかしい気がするのですが!?!…私は…いえ、何もありません。ただ、この生でソラウ様と出会えた。ソラウ様に仕えることが出来た。それだけで満足です》
…?ランサーの願いが、こう…歯に何か挟まったような言い方だ。だが、気のせいだろう…。

そして、4人で考えた作戦を確認しあつて、

《アレは紛れもなく聖杯だ。あいつに気づかれる前に回収するぞ》

《よし、行くか…まともに始と共闘できるのは久々だな…!》

《この作戦の肝はランサーだな…。ランサー、遅れるなよ?》

《私は最速だ!遅れるわけがなからう!》

だが…近くにいた俺も気付かなかった。

そのランサーから感じる魔力が

少なくなってきたことを。

そこからしばらくして…

「そろそろ30分だ。いくら考えても無駄なのは分かっただろう！ 跪け！ 命乞いをしろ！」

「誰がするか！」」

…14は、割と律儀に待っていてくれたようだ。

そして、俺たちは作戦を実行に移した。

『アブゾーブQ』』

『フュージョンJ』

『エボリューションセイバー』

『アーチャー』

俺はアーチャーフォーム、剣崎もセイバーフォームに。剣崎のマスター…切嗣は、ジャックフォームに。ランサーは…そういった形態が無いのでノーマルのまま。

さらに、あいつの高さに出来る限り近づける物の上に、乗り移った。というのも、木の赤い橋の天辺だが。

そして、

『ラッシュ、ブリザード、ポイズン』』

『ブリザードベノム』』

ランサーが片方のラウザーにカードをラウズさせると、もう片方のラウザーからも、認証音が鳴る。

そのランサーを、

「ランサー…できるとは思うが…」

風に乗って跳べるか？」

「…無論！私は…私は最速だ！その程度、造作も無い！」

俺と剣崎で、14より遙か上空にランサーを飛ばす。俺は『トルネード』で回転を加えさせながら飛ばし、剣崎は『風王鉄槌（ストライク・エア）』で下から剣を振り上げ、ランサーの足に打ちつけ、跳ね飛ばす。

「…ぬ!？」

もちろん、そんな派手なことをすれば、14も気づく。

なので、

「こつちだ！」

ドウドウドウドウ!!

切嗣に牽制してもらう。

…よし。いいところまで飛んだな…!

「ファイオナ騎士団が一番槍！ランサー、デイルムツド・オディナー！参る！」

ランサーは、滞空限界の一瞬を感じながら、空を足場に踏み込み、14に突っ込んだ。その姿はまさに、一本の槍。

「よし…行け！ランサー！」

「ハアアアアアアア！」

そして切嗣に気を取られていた14は、

「又オオオオオオオオオオオオオオ！」

無防備なまま、心臓部を穿たれた。さらに、そのラウザーは、ランサーの持つ道具が変質したものだ。つまり、

「…!? な、くっ！ やめろおおお！」

魔力を断つ槍『破魔の紅薔薇』と治癒阻害の呪いを付与させる『必滅の黄薔薇』が、心臓部にヒットしたのだ。

心臓部に治らない傷、さらに14を形作る宝具の魔力を槍が刺さっている間、無力化している。その間に…！

「…よし！ 取った！」

「ランサー！ 離脱しろ！」

「分かりま

「させると思うかあ!？」

ガ…アア!？」

なんと、14はランサーを殺すためだけに、自らの剣で心臓部を攻撃した。ランサーは…クソ！直撃か！

「ランサー!」

『フロート、マツハ』

俺は、フロートとマツハのコンボで高速飛行し、ランサーを回収する。

そして、合流した時、

「ぐ…ウウ!」

『リモート』

ランサーが、命懸けで回収した14を形作る宝具の片割れ『バニテイカード』に対して、リモートを使用する。すると、

「……………」

そこから、気を失っている青年が現れた。おそらく、この青年がキャスターのマスターで、今回の生贄だったのだろう。俺は急いで綺礼に念話を掛ける。

《綺礼！要救護者2名だ！すぐに来てくれ！》

《分かった！今すぐ向かう！》

《何秒で着く!?!》

俺は、無茶を承知で秒単位で聞いてみた。

《フツ…

10秒だ！10秒持ち堪えろ！》

《ああ！分かった！》

なんと、了承されたので、待つことにする。

そして本当に10秒後…

「要救護者の回収に来た！…ランサーと、キャスターのマスターか！」

「おそらくな！じゃあ、頼むぞ！」

「言われずとも！」

「ウガアアアアアアアアアア！逃がすカアアアアアアアアア！！」

その場から退避しようとする綺礼に、14の大剣が迫る。しかし、

「ふんぬ……！うああああああああああああああああああ！！」

それを、なんと劍崎が持っている剣一本で、耐えていた。その隙に、綺礼は退避に成功する。それを確認した後、劍崎も退がる。

「さて……あと3人か……どうなることやら……！」

俺は、この後の展開に不安を抱き始めていた。

Kの意地／思い出との邂逅

切嗣サイド

「ギシャシャシャシャシャシャシャシャ！」

くっ!? 剣が早すぎる! このままだと!

ギン!

「切嗣、今だ!」

「ああ…! 助かった!」

くそ! 戦いの場に出られるとはいえ、ただの魔術師とサーヴァントの強さの差は歴然か…! 申し訳ないとは思うが… 剣崎とアーチャー… 相川と言ったか。その2人に頼らざるを得ないか…

いや、それではダメだ。この場にいる以上、僕も戦わなくては…だが、どうする!?!
このギャレンの手札にそんなカードは…

待て、ある。おそらくあいつにも効く、僕しか持つてない武器が。だが…それを使
うためには、変身を解くしかない。その上、そのまま効くかどうか…!

…ん?このカードは…!ナタ、ゴホン…母さん、感謝するよ。

『ルーツ』

僕は、『ギャレン』の手札じゃなく、『僕自身』の手札を切らせてもらうことにした。

「…ココだ！」

バンバンバン！

「ふはははは！そんな射撃、効かぬわあ！」

くっ…やはり無理があつたか…!?

『そのとき、不思議なことが起こった!』

…ん?なんだ、今の謎のナレーションは…

「ぐっ…があ!」

「!?!」

…ふっ。2人とも驚いているようだな。やはり、サーヴァントで化け物だとしても、こいつは『キヤスター』!魔術を使うためのラインを切断されて、さらには無理矢理繋がれたのだから、ダメージは届く!

「舐めるなよ…若造があ!」

あの化け物がその体をぶつけようとしてくるが、

「ハッ!」

僕は、その体を足場にして、跳躍する。Jフオームになっているため、そのまま飛翔することになる。そして、そのままラウザーにカードを通す。

『ドロップ』

「これが…」

『フアア』

「父親としてのの、そして夫としてのの…」

『ジエミニ』

「意地だ！」

『バーニンググダイバイド』

「…アイリイイイイイイイイイイイイ！」

僕は拳を握りしめながら、愛する妻…アイリの名を叫び、自らを鼓舞する。そして、体を丸めながら飛翔し、キツクの体勢に入る。

「ハアアアアアアアアアア！」 ↑切嗣本人

「イリヤアアアアアアアアアア！」 ↑分身切嗣

…ふつ。分身でもやはり僕。イリヤの名を叫ぶとは、わかってるじゃないか…！

僕×2の蹴撃は、聖杯を持つ腕にストレートに向かう。

ズドン！

「クギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

そして見事命中し、その手から聖杯が滑り落ちる。それを見逃す僕ではない。そのまま聖杯を回収（回収時、聖杯は小さくなりました。）し

「クソがああああああああああああああああ！」

ゴウ！バゴン！

メシヤメシヤ…

…ガハ!?今のは…パンチか！まずい…背骨が何箇所か折れてるのでは…！
だが、僕にできることは…！

《聖杯は回収した！すまないが、一時離脱する！》

《…！分かった！早く離脱しろ！》

《劍崎、頼むぞ！》

この場からの離脱だ。目的は達成した上、今受けたダメージは相当にキツイ。離脱が一番手っ取り早い策なんだ…。

「くっ…逃がすか！」

僕を逃がさんと14が攻撃してくるが、そのスピードは先ほどよりも遅い。僕は、その攻撃を突っ切って離脱に成功した。

所変わって

渉サイド

???

『うーん…』

なにやら、ーが唸っている。どうしたことやら…

『どうした?ー』

『あだし、このライダー好きなんだけどな…強いし、黒い剣とかカッコよくない?』

そう言いながら、ーはネットの画像を見せる。そこには、

『ん?ああ…ーか。確かにカッコいいよな』

『でもなあ…変身者が…』

『…大体分かった…確かにあの変身者はな…』

でも、好きなことに理由なんて必要か？くくが好きだからじゃ、ダメなのか？俺がーを愛してるのは、俺がーを愛しているから…そういうのじゃダメなのか？』

…なんか、恥ずかしいな…

『…ほんつともう…／／…あんたが変身者だったらよかつたのにな…』

『ちよつ?!中身…』とか、本当に勘弁して!!』

…なんてこと言うんだよ、ー。俺は普通の人間なんだ!!

言峰教会

(…ん。今のは…昔の夢か…?そして、あえてこう言いたい。

知らない天井だ…)

そう思いながら、俺は体を起こす。まだ痛みが残っているが、傷自体はかなり塞

がっていた。さらに、周りを見渡せば、自分の知らない場所それに疑問を持っていると、
「起きたか。キャスターのマスターよ」

「あんた…さっきの」

「ああ…アサシンのマスター、言峰綺礼だ。勝手ながら治療させてもらった」

「いや、礼を言うよ…助かった」

「…過去に何かあったか？」

「……………」

「ここは教会だ。過去を悔いる場でもある…少し話がしたい」

その言葉を聞いて、俺は過去の出来事を話した。

「…なるほど…自身の過ちと他人の過ち、その間で死んでしまった恋人か…後悔しているのは分かるが、むしろそこから、なぜ殺人をしていった？どこかの青髭のように、骸を集めれば自らの欲する者が生き返るとでも思ったのか？」

…反論はできない。それが俺のやってきたことだ。

「しかも、此度の聖杯は汚染されているし…その願いを叶えるのは不可能…いや、不可能でないとしても、必ずなにか…破壊が生まれるからな…」

…は？聖杯が…汚染、されてる？聞いてないぞ…。

じゃあ…俺がこの戦争に参加した意味は…

「…残念ながら、ほぼ無意味だ。聖杯の汚染を取り除くか…『中身が無色の聖杯』でも無ければな…」

…ハハハ…ハ、ハ…

「あああああああああああああ!!!クソ！なんだったんだよ！俺の…やってきたことは、一体何だったんだよ！教えてくれよ！」

「…しかし、やはり『楓』か…」

…？

「どういうことだ？『やはり』ってなんだよ!？」

「先ほど、私と戦闘した時にも同じ名を口にしていたからな」
「…ああ…あの時（19話後半）か」

「という訳で、これを渡そうと思う」

「いや、唐突すぎるだろ！ ってなんだよコレ…アタツシユケースと…手紙？」

疑問を抱きながら、アタツシユケースを開けようとするど、

「まずは手紙から読むように」

と言われたので、手紙から見ることにし、その封を開け、その字を見て、

絶句した。

「…おい、何の真似だ…!?なんでこの手紙の字は…『楓の筆跡』なんだよ!」

少々声が荒いが関係ない。代筆屋でも使つて書かせたのなら、許されることじゃない。そんなので俺の心に響くとも思つたのか!?

「…私のコネに優秀なイタコがいてな…その者に憑依されてもらい、書かせたものだ」

…イタコつて確か、『死んだ者の霊をその身に憑かせて、現世の者にその言葉を伝える霊能者』…つて感じだよな?…つてことは!?

「そうだ。その手紙には、お前の恋人である『又倉 楓』の思いが綴られている」

そう言われ、俺は手紙を読むことにした。

渉へ

ダメだよ?そんな…人を殺すなんてさ。

イタコの人に憑依させてる私が言うのもなんだけどね？
好きだからって、そこまで狂わなくても良かったんだよ。
きらいになっちゃうぞ？そんなことしたら。

だって、あたしが死んでも想い続けてくれたんだから。
よるも朝も、ずっと想い続けてくれる。

愛してくれていたら、あたしはそれで嬉しかったんだよ。
しかも、生き返らせるために戦争するなんて…やだよ…
と言うより、私はずっと渉の側にいるから。

るんるん気分の私が言うんだから、間違いないって！

じゃあね。

PS. もしもの時のために、私が取っておいたのを『本当に』使えるように頼んでおいたから、受け取って。

私は、こんな世界でも愛してるから。渉といた世界だから…だから、壊さないで。壊すようなやつから、この世界を守ってね？『仮面ライダー』！

又倉 楓』

「……………」

俺は、間違ってたのかな？あいつに会いたいからって…ずっと壊れてたのかなあ？
と言うか、るんるん気分と言うから間違いないって…いや、確かにるんるん気分の楓の
言うことはかなり信憑性があるからな…それこそ神秘とか、予知の域に片足突っ込んで
るような感じだったし。

「と思いつながら、なぜ読み続けている？崇身渉」

「ナチュラルに心を読むな…いや、あいつが俺に手紙を送るときは、必ず暗号とかを書いて
くるんだ。と言っても、携帯持ってなかった頃の連絡手段だったから、その癖が残っ
てるかどうかは…」

そう言うと言峰は溜め息を吐いていた。

「全く…私はもう分かったぞ。勘のいい読者の方も、分かっているだろう」

「…？」

俺はその言葉に、疑問こそ覚えたが見つけることはできず、アタツシユケースを開
けてみることにした。

そこには、

『グレイブバツクル』に：『グレイブラウザー』!?』

この2つが入っていた。

グレイブラウザーは、楓が発売日早朝に販売店に並び、購入後に学校に登校（その日、楓は当然：遅刻ではなかった（!?!））するということ、とんでもない所業をやらかしていた。

そしてグレイブバツクルは、楓がレンゲルバツクルを3日掛けて塗装、工作して完成させた逸品だったりする。

それが、本当に使える…か。楓は、あの考えを改めることを死んでもしなかったのか…。

俺は人間だ。アルビノジョーカーじゃない。でも、

「俺は死んでない。楓のいない、この最高に無意味な世界で。それでも俺は戦う。楓の愛した、この世界を守るために。…遅すぎだとしてもな」

「覚悟があるのなら、臆せず行け。迷いを感じた時点で死が待っている。今からお前のいく戦場は、まさしくそのような場所だ」

「…忠告どうも。それじゃあ行つてくる…」

「…ああ…」

そして、教会の扉を開き、外へ出る。閉める際に、言峰がなにやら携帯を弄っていたのを見たが…何も気にすることは無いだろう…

綺礼サイド

私は、崇身渉が教会から出たのを見て、自らの持つコネの中で、かなりのクラスな『ある2人』に連絡を取る。

「ああ…ぜひ『この仕事』をお願いしたい…分かった。協力、感謝する」

よし……1人は出来た。こちらが通れば、2人目は金額次第だ。

「……ああ、1ーさんの事務所ですか？私、言峰と申し……ああ、本人か。実は、ある人物の『弁護』をお願いしたいのだが……」

そして、2人目との交渉も通った。

Fにさよなら／高揚と腹パンと勝利への賭け

始サイド

この怪物相手に劍崎と2人か…だが、

「劍崎、こういう状況なのに、なぜか心が躍るんだが…心当たりはないか？」

「俺はあるな…こうして始と、肩を並べて戦うのは…本当に何年ぶりかな…？」

ああ。やはり劍崎もか…

「それなら、こいつにも勝てるな」

「そうだな…俺たち2人が揃ってた時に負けた時は…」

「睦月との初戦…だったか？いきなりアンデッドを解放なんてされるとは思わなかったからなあ…」

そう言いながらも俺は矢で、劍崎は剣でダメージを14に与えていく。

「グウ…ウウウウウウウウウウウ！」

14はそう叫びながら攻撃してくる。先ほどよりかは余裕が出てきたが、まだ侮れない。そう考え、作戦を立てるために、一旦劍崎と合流することにした。

が、そこで

「そこダア！貰ったぞ！」

「!?」

なんと14は、俺たちが着地した瞬間を見計らって、棍棒を振り下ろしてきた。このままでは……！そう思った俺は手元に、この聖杯戦争で何回か使ってきた、あの防御のコンボをしようとしたが……

「……しまった……！ダイヤのカードが……！」

そう。ランサーからクラブのカードは回収したのだが、切嗣からは、ダイヤのカードを回収できていなかったのだ……。このままでは強度が足りない！そう思った時、

『…い出せ…』

俺は頭に響いた謎の声に驚く。しかし、その声は続いて聞こえてくる。

『思い出せ…私の使った盾を…私の持つ、最大の護りを…』

俺は、その声が先ほどの無銘のアーチャー、『エミヤ』の声だと気付き、思い出した。勘違いでぶつかり合った時に、アーチャーの使っていた盾を…それは、

「『熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス！）』」

ガギーン！

その棍棒を7枚の花弁で受け止める。しかし、14の攻撃も強力。対城宝具とも取れるその棍棒を受け止め続けるのは難しい…。何枚も花弁が割れ、ラスト1枚に迫った時、剣崎が俺の前に現れ、

「我が身と友を護りたまえ！全て遠き理想郷（アヴァロン）！」

そう叫び、真名解放した鞘を前に突き出し、棍棒を見事に防いだ。その光景に驚いていると、

「始！『リフレクト』だ！」

「…！そうか！」

『リフレクト』

俺は躊躇うことなくそのカードをラウズし、剣崎の持つ鞘に反射能力を付与した。すると、

「!?…ゴガア!?!」

思った通り、その膨大なエネルギーを反射され、かなりのダメージとなったのがわかる。そして攻撃に転じようと、防御を解除する。そこに、

「舐めおつて！この程度でやられるはずがなからう！」

「な!？」

「マズイ!？」

なんと、ダメージを受けてのけぞった体勢から、一気に棍棒を振り下ろしてきたのだ。さすがに防御の姿勢が取れない。さすがに終わったか…。

そう思った時、橋の天辺に誰かが立っていた。そして、その青年は、レンゲルのベルトに似たベルトを腰に装着し、左手が右腰のあたりに、右手が顔の左側に来るように構え、その手を強く握り、

「…変身！」

『open up』

右腰のあたりに、右手を持ってくる要領で、ベルトを開き変身した。そして、金のオリハルコンエレメントを突き抜け、そのまま飛び上がる。そして、

『マイティ』

そういつた認証音声が聞こえた…。マイテイ!?まさか…!

「くれてやるよ…14!」

「…!ヌオオオオオオオオオア!」

ズバア!

その剣戟、『グラビティスラッシュ』は、寸分変わらず棍棒を持つ腕を切り裂いた。

そしてそこには、黒のボディに、金のアーマーの仮面ライダーがいた…。こいつは

…！

「…グレイブか!？」

「…?グレイブってなんだ?」

「かくかくムツコロ…」

「これこれウェイウェイ…なるほど、そっちの世界のライダーか。俺が知らないはずだ
…」

そうこうしているうちに、グレイブは14の前に立つ。

「よう…『キャスター』。出来の悪いマスターが、説教ぶちかましに来たぜ…!」

「…!?! 貴様、俺の駄マスターか!」

「ああ! そんじゃあ、マスター特権使わせてもらうぜ! 呪詛を持って命ずる! 『さつさと
宝具を解除して、始さんと劍崎さんの2人に倒される!』」

「ぐー! グウオオウオオウウウオアアアアアアアア!」

苦しんでいるが、宝具が解除される様子がない。

「チツ……！ やっぱ、発動したら解除されないタイプか……！ なら、令呪を2画持つて命ずる！ 『そこから動くな！ 例えその身が亡くなるとしてもなあ！』」

「が……！ チクシヨウウウウウウウウウウウウウウウウウ！」

と思いきや、発想を変えた令呪による命令で、動きを止めた。

「ふ、フン！ 良いのか!? 私がいなければお前の願い……『恋人を蘇らせる』ことが叶わんぞ!? それでも良いのか!?」

……くっ！ なんて卑劣な……！ そう思ったが……

「確かにそうだな。俺の願いは叶わない。けど、結果的には絶対に叶わないことを、俺は知ってる。だからあえてこう言わせてもらう。」

「良い台詞だ……！ 感動的だな！ だが無意味だ！」

そう叫び、14に突っ込む。そして、

「(無言の腹パン)」

ズドゴン!

「…ふぐわ!?!」

「…なんだろうか…崇身の奴、今すつごく良い笑顔してる気がする…」

「奇遇だな剣崎。俺もだ…。しかも、令呪による束縛ありとはいえ、14に腹パンって

…」

「おかしいよな、普通…しかも、何も無しに殴ってあの音は普通聞こえないだろ…」
そんなことを言っていると、

『なんでこんな力を出せるか』…ですか」

「!？」

聞かれていた!?!マズイ…今のこいつは怒らせるとヤバイ…!

「簡単ですよ…それは、人間が持つ感情の中で簡単な物…それは、

「愛です！」

「…ウエイ？」

思わず変な声を上げてしまった。今何と言った？愛？それだけで、14の巨体を薙

ぎ倒すほどの腹パンをしたとでも言うのか!?

「はい。あ、一応言つとききますね？」

一つの恋に縛られる男は、それを侮辱されると、とんでもなく腹ただしいんです☆

「……………」

「……………」

なんとというか、言葉が出なかった。剣崎からしたら、ナニイテンダ…コイツ…と
いった感じだろうが、先ほどの言葉を俺は『ある人物』に置き換えてみた。するとどう
だろう。急に寒気が止まらなくなってきた…。ん？ある人物とは誰かつて？…想像す
れば分かる。ヒントは『俺に近い【位置】にいた人』だ。『立場』じゃないところがポイ
ントだ。そして、

「さて、俺の役割はこれで終わりです。後は頼みましたよ！『仮面ライダー』！」

そう言われ、俺たちは気合いを入れ直す。

「そういえば…」

「ん？どうした、始？」

「少し…やってみたいことがあるんだが…」

「これまた奇遇だな始、俺もなんだ」

「よし…ならば」

「「やってみるか」」

俺たちは、完全に14を消滅させるべく、ある無謀な賭けをすることにした。

『アブゾーブQ』』

『エボリューションセイバー』』

『アーチャー』』

バチバチ…！

「くっ…！」

「うっ！」

この日、3回目のクラスサーヴァント形態への変身に、体も悲鳴を上げている。しかし、俺たちには帰りを待つ子たちが居る。それが俺たちを奮い立たせる。

「う…おおおおお！」

そして俺たちは、

『アブゾーブQ』

『エボリューションK』

『エボリューション』

賭けに、勝った。

「…なんだ…！その姿は…!?」

劍崎は、先ほど見たアーマーに、青いマントと金の小さな王冠が追加されていて、魔力の量もハンパじゃない上昇の仕方をしている。なお、持っているのはキンググラウザーだ。

俺は、先ほどの赤い外套は何処へやら。ワイルドカリスの赤と追加された金のアーマーを纏ったような感じだ…。胸のレリーフも、金色に染まっている。しかし、その手にある弓は、本来の色であり、黒く染まっではない。

「この姿のことか？うーん…始、なんて説明する？」

「この際、力を借りたサーヴァントの名を冠せばいいだろう…」

「あ、そっか。なら、改めて…」

俺は、『仮面ライダーブレイド・アルトリアフォーム！』

「なら、俺も改めて…」

俺は『仮面ライダーカリス・エミヤフォーム』…」

「さあ！お前の罪を数えろ！14！」

「…ぬかせ！」

そして、俺たちは最後の戦いに出る。とは言つても…

「せあ！」

ズバァン！

「ハツ！」

バシユシユシユ！

「又…グアア！」

渉が14に掛けた令呪による束縛で、14がほとんど動けない状況なんだよな…。

いや、だからこそだ……！

「やるぞ剣崎……！あいつを、この世界から完全に消滅させる！」

「分かった！行くぞ、始！」

そう言つて、剣崎はグラビティジェネレーターで、空へ。俺は地上で、宝具解放の準備に入る。

「青き5つの力よ！王たる剣の礎となり、最たる一撃を敵に与えよ！」

『スペード10、J、Q、K、A』

剣崎は、14の頭より上を取り、頭から真つ二つにしようとする算段だろう…。

「運命を貫き、絶望の闇を穿つ光の旋風よ！今ここに、その力を証明しろ！」

『ワイルド』

俺は地上から、かなりのダメージを蓄積させている心臓部を狙う。前の矢と同じだ……すでに中っている。ならば……!!

後は放つだけだ!

「受けるがいい! 『至高なりて愚直なる閃光(ロイヤルストレートフラッシュ)』!」

『ロイヤルストレートフラッシュ』

「これで終わりだ! 『荒々しく黒き光の旋風(ワイルドサイクロン)』!!」

「ヌウ! ムオオオオオオオウウアウウウウオウア!」

今できる最大の宝具。それを14は完全防御態勢で迎え撃ってきた。俺の宝具は盾で、劍崎の宝具は剣で防いでいた。さらに、まだ余力が残っているのか、少し押され

気味だ……このままだと……！

その時、俺たちのマスターは、俺たちの想いに応えてくれた。

《令呪を持って、我が友に命ずる……！剣崎、絶対に勝て……！》

《令呪を持って、俺の家族に命ずる！始、絶対に勝ってこい！》

まだ続く。

《重ねて令呪を持って命ずる……！剣崎……必ず生きて帰ってこい！》

《重ねて令呪を持って命ずる！始！死ぬな！絶対にウチに帰ってこい！》

そして、最後は…

《重ねて令呪を持って命ずる…！》

《重ねて令呪を持って命ずる！》

勝て！自分の運命に！

2人とも、同じ命令だった。

これまでに無い強力な魔力に押しつぶされそうになりながらも、劍崎はキンググラウザーを右手のみで持ち、左手を空ける。すると、

スウー……！

なんと、先ほどの聖剣が現れた。

「古代と現代……2人の青き王の剣を受けるがいい！『至高なる勝利の剣（エクスカリバー・ロイヤル）』！」

そして、その光を纏った王の双剣で14の体を真つ二つにする。

「ギシヤアアアアオアアオアアオアオアオ！」

「今だ！やれ、始！」

俺も、弓をもう一度に引き絞り、『ある言葉』を呟く。

『投影、開始（トレース・オン）』!!』

その叫びをトリガーに、俺の横に、何本ものカリスアローが宙に浮いて現れる。それは全て、黒い矢を番えていた。そして、俺の持つワイルドスラッシュャーがドッキングされたカリスアローの先端に、黒い矢が装填される。それを見て、

『工程完了（ロールアウト）！全投影、待機（オールバレット・クリア）！…停止解凍（フリーズアウト）、全投影連続総射（サイクロンバレルフルオープン）』!!』

その言葉で、黒い矢が一斉総射される。それは全てが一点のみに集中した。

ズドドドドドドドドドド…

そして、そのダメージに耐えられなくなった14の体は、

「チクシヨウー………我が…我が野望があ………」

カッ！ブア…！

完全に消え去った。…ん？

「剣崎…涉、あれ。」

「ん？なにが…あ」

「…？どうしました？…ハハッ…なるほど」

俺たちの視線のその先に、俺たちの勝利を祝福する太陽が、その姿を現した…。そして俺たちは、

「「…おおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

勝利の雄叫びを上げた。日の出の光で、その身を照らしながら…

終章

終章 1

始サイド

俺たちは、勝利を報告しに言峰教会に向かった。そこで見たのは、

「いや、死なないで！ デイル！」

「「!?」」

泣き叫ぶランサーのマスターだった。その目線の先には、

「泣かないでください……ここまで生き残り、貴女とともにこの世界を謳歌できたのは、私

の忘れ難い想い出です…」

「だったら！もつといればいいじゃない！想い出も、もつと作ればいいじゃない！私を…1人にしないで！」

「…申し訳ございません。そろそろ…」

「う…うう…！」

「おい。どういふことだ綺礼！ランサーは、なんで…」

少し強めだが、聞きたくて仕方なかった。すると、綺礼は苦い顔をして、

「教会まで連れ込んだ時には、すでに魔力がほぼ空っぽの状態だったんだ…。さらに、外傷も深く…すでに手遅れだった…」

「…！そうか…詰め寄って悪かった」

あの時受けたダメージで、すでに…

「しかし、ランサーの気力は恐ろしいものだ。単独行動も無いのに、ここまで無茶をできるとは…」

…？どういふことだ？

「状态的に、私が到着する10分前には、すでに魔力がほぼ空になっていたはずだ。さらに、カリスやブレイドと同じようにカードを使う時に、魔力を使うのであろう？」

「あ、ああ…!？」

待て。綺礼が到着する10分前って……!

「14の心臓部を……ランサーが貫いた時!」

「始……つてことは……!」

「ああ……おそらく、あの『ブリザードベノム』で、魔力がほぼ空になったんだ。ただでさえラウザー2本分だ。そして、最後のリモートで……」

魔力が空になったんだ……。俺は膝をつき、倒れているランサーと顔を合わせた。

「ランサー……」

「ああ……アーチャーか……此度の共闘、見事なものだった……!」

「すまん、ランサー。今回の戦いは、お前がいなければ負けていた……ランサーのマスターにも礼を言う。ありがとう」

俺は素直に頭を下げた。その時剣崎に、妙な視線を送られたが、気にはしなかった。

「……そうか。私は最期に、この街を……ソラウ様がいる街を、守ることができたのだな……」

「ああ……!だから……静かに眠れ。ランサー……」

「すまん……では、さらばだ」

「デイル! いや、デイル……!」

ランサー、デイルムッド・オディナ。愛する者の為に戦い、その命を今、散らした。

「そういえば、なんでさつき妙な視線を俺に送ってたんだ？」

「ウエ？あー……いやなんか、お前が素直に感謝で頭下げるのを見たこと無いような気がしたからさ……ハハハ……」

「……ムツコロされたいか……？」

「………すいませんでした。反省と後悔はしています」

「よろしい」

そして、勝利報告を終えた後に切嗣を呼び、14の残した『聖杯』について語っていた。しかし、何やら綺礼の後ろに妙な箱：棺桶のような物があり、気になって仕方が無い…。が、話をしていくことにした。

「綺礼には、何か願いは無いのか？」

「私は、この戦争に願いが無いにも関わらず、参加することとなった…。しかし、参加して良かったと思っている。なにせ『友』が出来たのだからな」

「なるほどな…ということは…」

「ああ。私が戦争の中で見出した願いは、『親友を作ること』だ…。しかし、この願いは叶っている。聖杯は必要ない…」

「と、いうことは…」

「…ん？俺ですか？」

「ああ。お前の願いは…そういうえば、『恋人を蘇らせること』だったか」

そんなことを14が言っていたのを思い出した。そして、あの腹パンも…。

「あ…でも、あの手紙読んだから、今はそこまで執着無いんですけどね…」

「さて…では、その願いを叶えるとするか…」

「え?! いやいやいや! だから言ってるじゃん! もうそこまで執着してないから! 蘇らせる必要無いから!」

…何やら綺礼が突拍子もなく、渉の願いを叶えると言い出した。剣崎も切嗣も、綺礼を止めにかかるが…

「…何か、考えがあるのか?」

俺は、綺礼が『アサシンのマスター』ではなく、『神父』の顔になってるのを見て、そう聞いた。

「…ああ。救いの無かった者に救いを差し伸べる…。それが神に仕える者のルールであらう?」

そして、綺礼は聖杯に願った。

「この『人形』に、『叉倉 楓の魂』を吹き込んでくれ…」

…人形!?まさか…あの棺桶の中身は人形なのか!?

しかし、やはりというべきか、その棺桶の中には女性の形をした人形が入っていた。

「…言峰綺礼…一体何がしたい?」

…マズイ! 渉が怒りを抑えきれていない!…しかし、俺も天音ちゃんや、桜ちゃんと同じことをされたら…そう思うと、共感せざるを得ない。

が、実は…

「すまない…が、なにせ7年前の遺体だ…。『そのまま又倉楓を蘇らせる』と願ってしまった」と、聖杯が『又倉楓をそのまま』スケルトンで蘇らせる可能性があった…。その誤認を防止するためだ…安心してくれ、人形師にはコネがあつてな…世界最高峰の人材を用意した。だから、安心してくれ。信じる事が出来ぬのなら、まず人形を見てから言うてやって欲しい」

「……………あ…か、楓だ…! 間違いなく楓だ…。けど、少し大きい…?」

「写真や本人の言葉、そしてこの7年の成長具合の推測から作った物だ…後は本人の持つ魂を注げば…」

そういつた時、聖杯から柔らかな光が放たれ、人形が照らされる。そして…

「ん…ふわあくあ…んゆ？あれれ？なんか…涉に、始さんとか劍崎さんが見える…？あ、これ夢か…んじゃ、おやすみ…zzzz…」

…なんか、夢だと思われたのか、二度寝し始めた。

「…………ハ、ハハハ…ハハ…」

楓—————！！

涉がいきなり叫びながら、その女性に抱きつく。

「楓…楓え…！」

「ちよつとまつて!?!え! 本当に渉なのか!?!…てことは…?」

「あー…俺、劍崎一真…: 仮面ライダーブレイド」

「相川始、仮面ライダーカリスだ」

「うつそ…: まさかの本人さんかよ…」

その女性は、本当に驚いた顔をしていた。

「君が、又倉楓さんか?」

「ああ。自己紹介がまだだったな。又倉楓、今は14…: じゃなくて17で21歳だ。因みに、女だからな? あと、渉にちよつかいかけてみる…: いくらあなたたちでも、殺しにかかりますよ?」

…ゾツ!とした…:。これが…: 渉の恋人か…:。

「づつ…: うう…: !」

「あー、もう! 泣くなよ! 私はこちらにいるだろー?」

「ぶん…: うん…: 」

「なあ…: 話せる範囲でいいんだけど…: 昔の事、聞かせてくれないかな?」

「ん? いいよ、別に」

1時間後

「…なるほど…だからこんなになってるのか…」

「…あの時の叫び（21話ラスト付近）は、こういうことか…」

「…いじめ、か。『いじめで人生が黒く染まる』っていうことの典型例だな…」

「楓…楓…」

「はいはい…ここにいますよー」

「しかし…そこまでするのか…」

なんか…張り詰めた糸が突然切れたかのように、楓さんにべったりな渉。…基本こんな感じだったのか…。と思っていたが、

「あ…」

突然、渉が何かを思い出したように、そう呟いた。

「ん？どうしたの、渉？何か思い出したことでもあった？」

「あの手紙…どんな暗号を入れたんだ？」

…暗号？

「楓は、手紙の中に暗号を入れるのが癖だったんです…と言っても、携帯を持ってない頃の連絡手段だったので保証は無いんですが…」

「私が見つかったことで、暗号を入れてると踏んだ…ということか」

「ああ…」

「…綺礼、その手紙、俺たちも見たい」

「分かった。コレだ」

その手紙を見て数分後、

「愛されてていいなあ…」

と、剣崎が言い始め、

「なかなかロマンチックじゃないか…！」

と、切嗣も何やら分かったらしい。

「…渉、いい彼女を持ったな…」

と言つても、俺、剣崎、切嗣の中では、俺が一番早く気づいた。

「…え？なにが書いてあったんですか？」

「ここで、暗号のネタばらしをする事にした。」

「…頭の文字を抜き取ってみろ。正確には、『渉へ』から、『るんるん気分』のところまでだ。あと、『渉へ』のところのみは、まとめて読んでもいい…」

「は、はい。えーと…渉（へ）ダイ好きだよ愛し…て、る？」

へ？『渉（へ）、大好きだよ愛してる。』…!？」

渉が楓さんの方を向くと、赤くなって恥ずかしそうに俯いてる楓さんがいた。

「…楓—————！」

「わぷ！ちよ!?!落ち着けて！な？恥ずかしいからやめて—————！」

…見てるこつちが恥ずかしい結果だった。

数日後

渉が警察に出頭した。聖杯戦争中に行つた大量殺人の件だ……。しかし、俺としては彼の行つた大量殺人は、あくまでも渉の精神の破綻が原因だと思つている。それに、もう渉にはやる理由もない……。出来るだけ軽い罪になればいいが……と思つていた。

そして裁判が始まつた……。のだが……

「判決を言い渡します。被告人、崇身渉を懲役5年、執行猶予6ヶ月に処す」

∴明らかに軽すぎる！驚きを隠せない俺や雁夜、劍崎と切嗣で、したり顔をしてい
る綺礼に何をしたのか聞いた。すると、

「私のコネに、『黒を白に変える』…というスーパー弁護士がいてな…。安心したまえ、再就職の件も私のコネにナイフの技術力が高い者を探しているゲーム会社がある…救済するときは最後の最後まで救済する…それが私の8割の決断だ。残りの2割はオマケ…幸せな若者を見たいという私のわがままだな…それに、ある時に出会った、よく当たる占い系スピリチュアル女子高生(高3)に、『この2人は絶対に幸せになれる。カードがウチにそう告げるんや』と言っていたからな…」

「…コネ多すぎんだろ!て言うか最後!犯罪臭がするんだが!?!」

「問題ない。その高校には半年に一度、講習に行っているし、その理事長とも懇意にしている。その関係から、その学校の顔である者の1人に、そう告げられたのだ…2人のことについて、一切何も語ってないにも関わらず…な」

…それは占いどころか、予知なのでは…?。まあでも…

「良かったな、渉!」

「ああ。後のことも、綺礼さんがいろいろ用意してくれてるみたいだから…ほんとに、みんなに助けられてばっかりだ…」

「それでも、一緒に暮らせるんだよな!？」

「それは約束できる。だから安心してくれ」

「よし!じゃあ早速帰ろう!この7年、渉とイチヤイチヤできなくて渉分欠乏症なんだよう!」

「なんだそれ?!いや、ちよつと待って!皆さんいるんだからさ!」

「…ダメ…?」抱きつき十下から覗き込んで涙目

「ゴゴゴゴゴゴ…カチン!

…なんか、どこかの女子小学生魔法少女の、いけないスイッチが入ったようなイメージが見えた。

「あ、すいません。やっぱりこれで帰りますね…俺、楓を愛さなきゃなんで」

「…あ、うん…フアイト…」

剣崎が戸惑いながら返事すると、2人は指を絡めた手のつなぎ方をして歩いてたと思おうと、おもむろに腕を組んで歩き出したのを見て、

「「もうあいつ、あれで良いんじゃないか？」
「
と言っていた。」

最終回 第4次聖杯戦争にカリスが参戦していたよう
です。あ、やさぐれてたブレイドさんも参加して
たみたいです。

始サイド

あの戦争から、およそ1年弱が経った。

俺と剣崎は、

「…はい。計4点、合計25252円です…30000円お預かりします。お釣りが、4748円です。ありがとうございます」

「えー、コレとコレが会計別ですね。こちらの会計が小物4点…で、合計874円、こちら、ストラップ3点の会計が、合計1101円です！こちらは1000円お預かりで、お釣りは126円です。こつちが…1170円お預かりで、お釣りが69円です！ありがとうございます！」

「うんうん。剣崎くんは元気だねー…けど相川くん？もつと元気出してこー！元気が無いと、お店が辛気臭くなっちゃうにやー！」

「は、はい…」

「あ、すぐには治さなくて良いにや。突然変わっちゃったら、お客さんも驚いちゃうだろうし」

「はい…わかりました」

綺礼のコネで、街の小さなアニメショップで働いていた。

なお、地味に時給も良く、昼の12時〜18時までの6時間で912円/時という、割と破格の条件だった…。福利厚生も充実していて、福利厚生費も店が持つてくれるという…。優しくて真面目な素晴らしい店長だが、ラーメンと猫が大好きなところもある、

ちよつとお茶目(?)な動ける系女性だ。なにせ学生時代は、学校でアイドル活動をしてきたそうで、その中でも運動神経はかなりのものだったという…。

「あ!はい、今月のお給料!」

「(そういえば、もう月末か…) はい。ありがとうございます」

「(あ、もう月末か!) ありがとうございます!」

俺たちは、給料を受け取り店から帰った…。

間桐家

「ただいま…」

俺は、静かに家の戸を開ける。が、

「あ、皆さん!おかえり!」

元気に迎えてくれる桜ちゃんと、

「おお、始か…」

臓硯がいた。

「ああ、ただいま。ん? 雁夜はどうしたんだ?」

俺はここで、雁夜がいないことを疑問に思う。

「雁夜なら自分の部屋に在るだろう…。そういえば、始を呼んどったぞ。なんでも、話を聞きたいとかどうとか…」

「なるほど…『アレ』のことか…」

俺は雁夜の用事を理解すると、雁夜の部屋に向かった。

雁夜の部屋

「お。帰ったか、始」

「また『アレ』のことか…？別にいいが、本当に売るのか？」

「まあな。こんな経験初めてだし、なにか形にしておきたくてな…」

「…そうか」

雁夜は、この聖杯戦争でのことを、ファンタジー小説のような感じで売り込もうとしているらしい…。そのため雁夜は、仕事の合間を縫って、聖杯戦争参加者に話を聞きに行ったりしている。すると、

「あ、そーいや…」

「どうした？」

雁夜が、なにか思い出したような表情を見せていた。

「コレコレ…」

『お誘い』だ」

「…ああ！よし、行くか！」

「そうだな！親父！ちよつと出るから、晩ご飯は桜と食べといてくれ！」

「おう、分かった！」

「じゃあ行くか！」

ちなみに、雁夜が見せた携帯電話の画面

←

←

聖杯を囲むこの上なき飲み会（8）

キレイ綺礼「飲み会を開催したい。今日の20時から行ける者は言ってくれ」

雁夜ん「俺行けるぜ。始は…帰ってきたら言ってみる」

ケリイ「僕も同じくだ。劍崎には後で言っておく」

マジカル☆アイリン「私も行きます！」

渉・ザ・リッパー「俺も行きますー。今日は早めに終わるので」

眠り姫／楓「私も行きたい！」

キレイ綺礼「では、始と剣崎には後で伝えておいてくれ。場所は、『いつもの場所』だ」
雁夜ん「d（^▽^）」

ケリイ「d（^▽^）」

マジカル☆アイリン「d（^▽^）」

渉・ザ・リツパー「d（^▽^）」

眠り姫／楓「d（^▽^）」

キレイ綺礼「d（?^?）ゞ任せておけ。ここは私が是が非でも席を取る」

ここに、

一真「俺も行ける！d（^▽^）」

始「俺もだ。d（^▽^）」

という返事が追加されたのは、言うまでもない。

「では、ここに集まれる運命に感謝し、

乾杯！」

「「「「「かんぱ——————い！」「」」」」」

俺たちは思い思いにコップを当て、ここに集まれる喜びを表す。俺はライムチューハイ、雁夜と切嗣は焼酎、綺礼とアイリと剣崎、渉と楓は赤ワインを飲んでる。そしてそのつまみは、柿の種からチーズ、焼き鳥に串カツ、サラダにチーズフォンデュなど、各種さまざまだ。

そして、口の緩んだところで、世間話が始まる。

「で？切嗣のところの『息子さん』…どうなんだ？」

「ああ…『士郎』のことか。今ではすっかりイリヤのお兄ちゃんだ。その上、家事のレベルもかなりのものでね…セラが『このままだと、私仕事無いんじゃない?!』と嘆いているくらいだからね…」

「…それは凄いな…」

実はここ一年の中で、綺礼は教会に孤児園を開いた。そこに、いの一番に入った：いや、『拾われた』と言つてもいいのが土郎くんだ。

当時、優しい性格だった彼につけ込んだガキ大将が行つた行為に反抗したところポコポコにされ、その時に怒つた土郎くんが、『無意識に体から剣を出す』ということをしてしまい、そのガキ大将が重傷になつてしまう。これが原因で周囲から忌避されてしまふ上、両親から見放されてしまふ。

そんな時に綺礼が孤児園を開いたのだ。その両親はこの上なく幸福を感じただろう。なにせ、自分たちの生活を脅かす存在だ。自分たちの前から消せることを心から喜んでだろう。

もちろん、そんな気持ちを見通した綺礼が、説教とともにお手製のマジカル☆八極拳（加減版）を食らわせたそうさ。それを受け、ヒイヒイ言いながら逃げて行つたらしい…。

そこに来たのが切嗣だった。

その境遇を聞き、切嗣が引き取ると宣言。先ほど話したことを『魔術が関係している』ことと判断し、そのセーブとともに、有効活用法を模索しているようだ。なんでも、投影が得意なのだとか。

…なんか、俺が力を借りた英霊と、かなり酷似してるんだよなあ…その特性…。も
しかして、幼少期…なのか？ハハハ…それは、無い…よな？

「そ、そつちはどうなんだ、渉。ゲーム会社だと聞いたが…？」

「あく…実は、俺がナイフの技術提供したゲームなんです…結構ヒットしたんです…。
けど、『技が本気すぎる』とか、『人体的急所を狙いすぎてる』とか…結構問題も抱えて
るんですよ…」

「…それは仕方ないだろ…。基本そういうタイプのナイフ使いだろ？お前」

「そうなんですけどね…やっぱり、自分が関わったゲームが悪く言われるのはちよつと
…それに、『このナイフ使いがリアルすぎてヤベエ！』とか、『このナイフ技術は何年先
も伝えていけるレベル』とかっていう肯定的な意見もあるんで、止められないんですよ
ね」

「やはり分かる者には分かるのだよ…」

「また今度、鍛錬に付き合ってくださいいね？綺礼さん」

「ふっ…いずれな」

…。
渉も、再就職で頑張ってるみたいだ。…どこことなく物騒な言葉も聞こえてきたが

このタイミングで、

「そういえば、綺礼さん」

「ん？どうした、渉」

「妹弟子の凜ちゃん…でしたっけ？あれからどうなんですか？」

「ブフウ!!？」

爆弾を投下した。

「「「「「綺礼（さん） どうした（の）!?!?!?!」」」」」

「実は、な…かくかくハツキョク」

「「「「「これこれムツコロ…あくなるほど…」」」」」

まとめるところだ。

← 元々、綺礼に好意を持っていた凜ちゃんが、ある日突然綺礼に告白する。

← 当然びつくりし、自問自答などして、三日三晩答えが出ずに悶え苦しんだ

← そして、断った。すると、

← 親バカ時臣が、『娘は渡さーーん!』と言いながら、火球を飛ばしてくる

← 近くにいた凜ちゃんを庇いながら、黒鍵で火球を弾く

← 凜ちゃんにさらに惚れられ、親友以上恋人未満（限りなく恋人）というかなり微妙な関係になる。

…なんとも言えないことだった…。

その他にも、アイリさんと楓さんが恋人論議してたり、それを聞いた切嗣と渉が赤くなったり、雁夜がみんなから話を聞いたり、聖杯戦争前では考えられないメンツでの飲み会は、渉が限界そうなのを確認し、終了することにした。

「では、これにて第4回聖杯飲み会を終了する…解散!」

俺は、本来この世界に呼び出される者ではなかっただろう…。しかし、この生を与

えてくれた、あの『管理人』には礼を言いたい…。なにせ、護るべき者とたくさんの笑顔に、出会わせてくれたからな…。

「なーに辛気臭い顔してんだ？始」

「ん？ああ…ちよつと1年前のことを思い出してた…」

「1年前、か。そういえばもう1年になるのか…」

「そうだな…」

そして、1番感謝したいのは、

「まあ、こうしてまた会えたんだし、そこは感謝してもいいんじゃないか？」

「…それもそうだな」

劍崎と、もう一度会えたことだ。世界は違ったかもしれない。が、ここにいるのは確かに劍崎だ。そんなことを思っていると、

『全く…現金だな。だが、それでこそだ。それでこそ、その生に意味がある。もう一度会えたのだから、今度は別離するなよ…俺みたいにな…』

そんな声が聞こえた気がした…。慌ててその方向を向くが、遅かった。

「どうした、始？」

「いや、なんでもない…」

「ふーん。ま、いいか。」

…お。始、空みろよ…」

「ん？」

「…これは……！」

そこには、満天の星空が広がっていた。ここまでの星空は、これまでに見たことがないくらいのものであった。

「…俺たちは、人間になれたんだな……」

「ああ。こうして、お前の横で星を見れるんだからな……」

「…じゃ、『また明日』」

「ああ。『また明日』、な」

そんな星空の下、2人は帰りを待つ者のところへと帰って行った……。

「…ふうー。こんな感じかな？」

ここまですべてをパソコンで打ち終わった雁夜は、パソコンの前で背筋を伸ばし、そして確認を終え、USBメモリへの保存も完了する。

「よし。後は出版社にデータを持っていくだけだな」

そして、そのデータをパソコンにも保存させ、スタート画面に戻し、そのまま出版社へと向かった…。

385 最終回 第4次聖杯戦争にカリスが参戦していたようです。あ、やさぐれてたブレンも参加してたみたいです。

ピコーン。

『メールが届きました』

パソコンの画面

メールが届いています。

メール1

キャラのその後（この話の直前までの詳細）、ボツ案倉庫が追加されます。追加時期は未定（4月以降は確実）です。

?? 4月7日19時31分、追加完了しました。

メール2

f a t e / G O 風の簡単ステータス画面を作成します（始と剣崎のみ。アルビノジョーカーは、リクエスト次第で作成したいと思っています）。

?? 5月3日0時2分、カリスとブレイド両方のステータス投稿完了。

メール3

387 最終回 第4次聖杯戦争にカリスが参戦していたようです。あ、やさぐれてたブレンも参加してたみたいです。

後日談の短編を作成します。
投稿時期は未定（5月中に完成させようとは思っております）。

添付ファイル

追加分① キャラの聖杯戦争終了後／ボツ案・裏設定倉庫

相川 始（アーチャー）（以下始）

聖杯戦争終了後、綺礼のコネを利用したりしなかったりしながら、様々な職を転々とし、最終回登場の店に行き着いた。これに至っては、後述の劍崎と同じではあるが、職の種類が違った（劍崎の職種が工事現場中心に対して、始は喫茶店などの接客商売系中心）。

また、綺礼から稀に、魔術関連での仕事を依頼される事もある。この仕事っぷりから、魔術師の一部に『暴虐の疾風（タイラント・サイクロン）』という二つ名で呼ばれる時があるが、本人自体はそこまで嫌でもないらしい。

さらに、仕事の合間を縫い、土郎や桜に弓の使い方も教えている。2人とも始めてすぐだが腕前は良く、土郎は『的の中心を当てる』ことを得意とし、その反面に桜は『的

に当てること』を得意とする。なお、士郎には投影の魔術についても、経験則や正しい使い方、応用などを教えている。

飲み会にはかなりの頻度で参加する：が、体が『アンデッド↓人間』なので、まだ酒に慣れておらず、度数の低い酒類を好む。

雁夜にとっては、同年代の従兄弟のような存在となっており、桜からも頼れるお兄さんとして見られている。綺礼にとっては、自らを理解してくれる友。

また、1度目の生（ブレイド本編）での経験や、この生になつてからの、かつての職種などから、コーヒーや紅茶などの茶類を淹れる技術は凄まじいものとなっている。

ボツ案＋裏設定

（ボツ案）この作品の創作当初は、狂化（ジョーカー化）もつけようと考えたが、『一回死んじゃつてるんだし、人間にして取り除いちやおう』と考え、オミット。

（裏設定）実は人間になったことにより、??の2『スピリット』は必要ないのだが、自分が自分の意思で持っている。また、『スピリット』に代わり??の2には、『アローピラニア（矢の威力上昇）』というカードがある。

さらに、ワイルドカリス及びエミヤフォーム時には、『魔力放出（嵐）：A+（魔力放出（炎）のバリエーションのようなもの）』が付与されている。

劍崎一真（セイバー）（以下劍崎）

聖杯戦争終了後に職を転々としていたのは前述の通りで、こちらにも、魔術関連での仕事が入る時がある（こちらの場合、切嗣の代わりという名目もあるため、頻度は始より高い）。劍崎は、『雷の王剣（プラズマ・キングブレイド）』と呼ばれている。劍崎としては、かなり恥ずかしいようだ。

劍崎も士郎と桜、そしてイリヤにも、劍術を教えている。桜は伸びがイマイチだが、時折見せる威圧がハンパなものではない。士郎とイリヤはかなりの伸びで、特にイリヤは、肉体強化魔術有りなら劍崎から一本を取ってしまうことがあったほど（基本的に3人と打ちあう時は3割程度。この時は肉体強化魔術有りのルールなため、途中で7割まで出したが、一瞬の隙を突かれ、一本を取られた）。

飲み会にはよく参加するが、稀に魔術関連の仕事で行けない時もある。始とは違い、『人間↓アンデッド↓人間』となっているので、酒類には慣れがあり、ワインなども良く飲む。

切嗣からすれば、気の合う友人兼家族。イリヤからすると、師匠であり気立てのいいお兄さん。

ボツ案＋裏設定

（ボツ案）こちらにも、狂化をつけようとして、後々のことを考えオミット。さらに、アハ

ト翁を斬り殺すという案を、爆破オチに変更。

(裏設定) 実は、アヴァロンを体内に入れた時に、魔術回路が生まれており、魔術を行使することができる。が、本人はあまり使わないようにしている(起源は、*fat e* シリーズ本編の士郎と同じく剣。といっても、回路を持つ前から起源が剣であったため、アヴァロンによって書き換えられたわけではない。属性は雷≡風>火>>水という4属性持ち)。

衛宮切嗣(以下切嗣)

聖杯戦争終了後は、魔術師殺しも引退。愛する妻と娘に、妻と娘の実家から連れ出したメイド2人、そして：愛する正妻がギリギリ公認した愛人3人と、最近新しく家族の仲間入りを果たした息子『衛宮士郎』に、自身が召喚した友人である剣崎と仲良く(?)暮らす。相も変わらず、アイリとはバカツプル。イリヤに対しても激甘。メイド2人に対しては普通だが、稀に不必要な発言をして、セラにどつかれる。愛人たちにも平等に愛を注ぎ、息子に過ぎた夢は持たないよう、経験談を話したりしている。が、稀に綺礼から魔術関連での仕事を引き受けることもある(依頼全体の約7割は剣崎にスルーしている)。その稼ぎで一家を支えている。

士郎の魔術の特異性を薄々感じてはいるが、判断のしようがないため、魔術の鍛練は比較的似通った性質の魔術を行使したことのある始とともに行うようになった。

飲み会には、たまに参加する程度。日本酒や焼酎を好んで飲むが、ワインなども嫌いだ。

アイリからすれば、最強で最高の夫。イリヤからすれば、ちよつと過保護なかつこいいお父さん。士郎からすれば、魔術の師匠の片割れであり、良き父親。そして、自分に光を与えてくれた恩人でもある。

(ボツ案) 魔術属性である『火』と『土』を活用した魔術戦もさせようかとも考えたが、文章力の無さからボツに。また、後述の裏設定のために、傍らに舞弥を置くのもボツ案行きに。

(裏設定) この世界の切嗣は、父親である矩賢から魔術刻印を完全に受け取っているため、固有時制御の負担が本編より少なくなっている(といっても、誤差の範囲内)。そのため、身体への負担を度外視するなら、『4倍速(スクエアアクセル)』も出来る。

実は舞弥さんも愛人：なのだが、ケーキバイキング3週間分に釣られ、『魔術師殺し・衛宮切嗣』を恨み、憎む魔術師を水面下で狩る作業をしていた。そのため、本編には登場していなかった。

さらに、聖杯戦争開始直後は、セラに料理を全て一任するわけにもいかなかったので

(アイリ↓壊滅的な料理下手／イリヤ↓娘に怪我をさせたくなかったため論外／リズ↓そもそもできるか分らない)、簡単な料理なら作ることができ、味についても問題は無いが、切嗣の起源の関係でキッチンが毎回、起源弾を受けた魔術回路のように、めっちゃくちゃになる。

間桐雁夜(以下雁夜)

聖杯戦争終了後は、ルポライターと戦場カメラマンという二足のわらじを履いている。また、最終回でもあったように、聖杯戦争での出来事を関係者に取材しながら、ファンタジー小説として書き連ねている。さらに、紛争地の水事情を、微力ながら改善しようとして、水属性の魔術を訓練している。今では、水属性なら中級魔術師程度。

桜を大切にしているのは fate/zero 本編と同じ。だが、蟲の支配下から桜を脱却させることができたため、 fate/zero 本編ほど時臣を憎んではない。

始からすれば、軽口を叩きあえる友人。桜からすれば、親切的な叔父。臓硯からすれば、手のかかる義理の息子。

飲み会には、国内にいれば必ず参加する。国内外の酒を問わずなんでも飲めるが、やはり日本の酒が好きなようだ。

(ボツ案) 本来はもうちよっと出番のある予定だったが、最終的にはほぼ空気になった。

(裏設定) この世界の雁夜は、実は触媒無しでサーヴァントの召喚を成功させ、始を引き当てるぐらいは強運である。なので、マスター(雁夜)の幸運に引つ張られるサーヴァント(始)の幸運値は、本来はB+ほど。だが、始自体の幸運値が低いので、C-となっている。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルト(以下ケイネス)

ランサー死亡の偽装工作に見事引っかけり、敗戦したと思ひ込み、帰国。その後、自身の負けをしつかり反省し、生徒の教育に熱を入れるようになる。そこから生徒の質問にも真摯に応えたりと、反応も少しながら丸くなった。

冬木に滞在していないため、飲み会には参加していないし、そもそも飲み会が聖杯戦争中にも行われたということすら知らない。

(ボツ案) 月霊髓液(ヴォールメン・ハイドラグラム)を使用させようとしたが、笑い成分が欲しくなりカット。

(裏設定) 特になし。

ソラウ・ヌアザレ・ソファイアリ(以下ソラウ)

聖杯戦争終了後も、デイルムツドと共にいた冬木に滞在している。なお、綺礼のコネ

でコペンハーゲンにて働いている。

なお飲み会には、綺礼から誘われてはいるが、参加していない。

(ボツ案) 特になし。実は動かしやすかったキャラ。

(裏設定) この作品の中で、イスカンダルの触媒をウエイバーに流したのは、実はソラウ。ケイネスの性格と財力、伝手の度合いから鑑みて、デイルムツドの触媒を用意すると考え、デイルムツドに寝取られる気満々だったが、まさかここまで上手くいくとも思っていなかった。

言峰綺礼 (以下綺礼)

聖杯戦争終了後、教会で孤児院を開く。そこにいの一番に入った士郎を保護。6割のマジカル☆八極拳と説教で士郎の両親を追い払う。また、魔術を悪しき目的で使う者に制裁を加える代行者紛いの仕事をしている(この仕事に、始や剣崎、切嗣がたまに同行する)。また、ちびアサシンの父親にもなっている(戸籍上の名前は、『言峰霧子』)。

凜からすれば、年上の彼氏(綺礼は否定)。時臣からすれば、愛娘を誑かす獣。始からすれば、この世界で出来た初めての友。

飲み会では、毎回幹事をしているので、『綺礼がいなくては飲み会が始まらない』とい

うほど。基本的に日本酒などを飲むが、気分がいい時はワインをがぶ飲みする。しかも、めちやくちや酒に強いたため、ワイン一本を飲みきってもシラフに近い状態という酒豪。

(ボツ案)『妄想幻像(ザバーニーヤ)』を使用した際、勝たせようとしたが、その後の展開が繋がらなくなるので、考え抜いた結果、ボツ案。

(裏設定)コネの強さの理由は、魔術的にも一般社会的にも基本的に融通の利く存在であるから。ちなみに、某スーパー弁護士に至っては、コネを最大限まで使った結果。

崇身渉(以下渉)

綺礼のコネでゲーム会社に就職。その会社でナイフや効率的な殺しの技術を提供。その技術の高さに、軽蔑どころか尊敬の目で見られるようになり、正直戸惑っている。家に帰れば、楓にべつたり。ただ、自分へ楓というような考え方で、稼ぎの使い方もそんな感じなので、基本的にはかなり質素。

飲み会にはほとんど出席するが、飲み慣れておらず、少し酒に弱い。

(ボツ案込みの裏設定) fate/zero本編のキャスター陣営を、作者の都合マシマシという理由でボツ案にして、生まれたオリキャラ。本来は渉自体がボツ案。

佐倉楓（以下楓）

渉の願いのために作られたオリキャラ。そして、某世界最高峰の人形師が作った人形に魂を注ぐという形で、蘇った。そして渉といるときは常にべったり。だが、蘇って時間が経ってないので、起きている時間より、寝ている時間の方が長い。LONEの名前に眠り姫と入っているのも、そのため。

それでも、渉が帰ったら、その気配で飛び起きる。

（ボツ案）無し。

（裏設定）実は、全力を出して戦えば（渉の血を吸う＋肉体強化有り）、カリス及びブレイドのノーマルフォーム相手に殴り勝てるほどの強さを持つ。

ウエイバー・ベルベット（以下ウエイバー）

聖杯戦争終了後に帰国。時計塔で観察眼の才を発揮し、今ではその眼を頼りに語り合える者も増えたが、ウエイバーとしては、自身の實力を見て欲しいようだ。

冬木にも、たまに帰ってくるので、タイミングが合えば、飲み会に参加している。

（ボツ案）実はイスカンダル（fate／GO版）を召喚させようとしたが、どのようなキャラかを掴めなかったので、ボツ案に。

(裏設定) 2度目の対キャスター戦で、本来使えるかどうかかわからない攻撃魔術を使用していたが、アイデアは fate / GO から。そして、その魔術も訓練することで、将来は自らの実力で時計塔講師となる…が、そこまでは遠い。

遠坂時臣 (以下時臣)

愛娘である凜が綺礼に取られそうになり (誤解)、かなり焦りながら生きている。

最近は葵に自分の考えを見抜かれ続けており、二〇一タイプではないかと疑っている。

飲み会については存在していることも知らず、その度に金庫から綺礼が金を抜いていることも知らない。

(ボツ案) ギルガメッシュをアーチャーで召喚する行為をボツ案に。

(裏設定) 実は、ちよいちよい仮面ライダーシリーズも見ていて、時折指輪に魔力を注ぎ、そこから火を放つというウィザードっぽい技も練習したりしていた (なお、その様子を葵や凜も見ていたが、時臣本人は気づいていない)。

番外編

『座』の管理人（仮面ライダーブレイド本編エンドの相川始）

最終回のあの言葉からは、心配すら感じない。今ではロクに人の来ない英霊の座で、管理人兼お留守番をしている。

（ボツ案）実は、カメレオンアンデッドの力を使い変化した、アルビノジョーカー……というのを考えたが、アルビノジョーカーが本来知らないはずの知識なので、ボツ案。
（裏設定）無し。

追加分② fate／GO風のステータス①（カリス） （超簡単仕様）

Archer 相川 始

☆☆☆☆☆

LV90／90

HP 14811

ATK 12837

COST 16

スキル

心眼（偽）：A+ チャージタイム 8↓7（LV. 6）↓6（LV. 10）

自身に回避状態を付与（1ターン）

&クリティカル威力アップ〔LV. 1〕（3ターン）（LV. 1↓20%。LV上昇ご

とに2%ずつ強化されていき、LV. 10到達時は4%強化（LV. 10到達でクリ

ティカル威力40%アップとなる。）

♡9・リカバー：B チャージタイム 9↓8（LV. 6）↓7（LV. 10）

味方単体のHPを回復【LV. 1】（LV. 1↓2000回復。LV上昇ごとに回復量+500）

&自身のNPが減少（デメリット）【LV. 1】（LV. 1↓20%減少。LV上昇ごとに1%ずつ少なくなる。LV. 10到達時は2%少なくなる（LV. 10到達でNP10%減少となる）。）

《靈基再臨を1段階突破で解放》

人の想い：EX チャージタイム 10↓9（LV. 6）↓8（LV. 10）

自身の攻撃力アップ【LV. 1】（4ターン）（LV. 1↓15%強化。LV上昇ごとに2%ずつ強化。LV. 10到達時は4%強化（LV. 10到達で攻撃力35%強化となる）。）

&自身の宝具威力アップ【LV. 1】（1ターン）（LV. 1↓20%強化。LV上昇ごとに2%ずつ強化。LV. 10到達時は4%強化（LV. 10到達で宝具威力40%アップとなる）。）

&自身のNPを増やす【LV. 1】（LV. 1↓11%増量。LV上昇ごとに1%アップ。LV. 10到達でNP20%増量となる）

《靈基再臨を3段階突破で解放》

クラススキル

対魔力：B+（自身の弱体耐性をアップ）

単独行動：EX（自身のクリティカル威力をかなりアップ）

騎乗：A（自身のクイックカードの性能をアップ）

宝具（作者の妄想全開（確定）&チート（暫定）込みですのでご注意）

荒々しく黒き光の旋風（ワイルドサイクロン）

バスターカード

ランク：A+

L V・1

敵単体に超強力な《アンデッド》特攻攻撃〔L V・1〕（特攻倍率↓L V・1 || 40%。L Vが1上昇することに10%強化。L V・5特攻倍率 || 80%）

オーバーチャージで

《宝具が変化する》。

200%時

偽・螺旋剣（カラドボルグII）

自身に無敵貫通効果を付与（1ターン）

+敵単体に超強力な《アンデッド》・《魔術》特攻攻撃（LV・1〜）（特攻倍率↓LV・

1∥50%。LVが1上昇することにより10%強化。LV・5特攻倍率∥90%）（特攻

倍率の重複（魔術とアンデッド、両方の特性を備えた敵に対して行った場合、LV・1

↓50%+50%∥100%となる）あり）

300%以上

全投影連続総射（サイクロンバレルフルオープン）

自身に無敵貫通効果を付与（1ターン）+敵単体に超強力な《アンデッド》・《魔術》・

《巨大》・《邪神》特攻攻撃（LV・1〜）（特攻倍率↓LV・1∥60%。LVが1上昇

することに15%強化。LV. 5特攻倍率 \parallel 120%（特攻倍率の重複（上記を参照）あり）

+スター大量獲得（20個（LV. 1〜））《オーバーチャージで獲得数アップ（40% \downarrow 25個（LV. 2〜）、500% \downarrow 30個（LV. 5））》

カード構成

バスターカード 2枚

アーツカード 2枚

クイックカード 1枚

ボイス（希望CV \downarrow 森〇亮治）

開始1

「さて…始めるか」

開始2

「戦闘か…。マスター、指示を頼む」

スキル1

「これを使うか…」

スキル2

「これで、終わらせる！」

コマンドカード1

「よし…」

コマンドカード2

「これだな…」

コマンドカード3

「行くか…」

宝具カード

「そろそろ行くか…。これが全力だ！」

アタック1

「ハッ！」

アタック2

「そこだ！」

アタック3

「テアア！」

エクストラアタック

「大人しく…倒れろ！」

宝具1

「絶望の闇を穿つ光の旋風よ！

今ここに、その力を証明しろ！

これで終わりだ……！ 『荒々しく黒き光の旋風（ワイルドサイクロン）』！

宝具2

「我、物の怪なり。

されど、持ちし心は人間なり！

貫け！ 『偽・螺旋剣（カラドボルグII）』！

宝具3

「投影、開始（トレース・オン）！

全投影、待機（オールバレット・クリア）！

：停止解凍（リリースアウト）、全投影連続総射（サイクロンバレルフルオープン）！！

ダメージ1

「グッ！」

ダメージ2

「チッ！」

戦闘不能1

「くそ……ここまで、か……」

戦闘不能2

「劍崎……！天音ちゃん……！」

勝利1

「さて、帰るべき場所に帰るか……」

勝利2

「やつと終わったか……」

レベルアップ

「よし……この調子だ」

霊基再臨1

「よし……さて、狩りを始めるか……！」

霊基再臨2

「……いい具合だ。だが、気を抜くなよ」

霊基再臨3

「……ここからが本番だ……。全力で行くとするか！」

霊基再臨4

「まさか……ここまでとは……礼を言うぞ、マスター。ここまで昇華出来たのは、間違いなくお

前のおかげだ」

絆1

「…まだお前に気を許したわけじゃない。精々、寝首をかかれるなよ？」

絆2

「本当に物好きだな…お前は…」

絆3

「お前がマスターなのは認めよう。だが、俺にどこまで付いてくれるんだ？」

絆4

「全く…お前は本当に物好きだな、マスター。俺に付きまತ್ತたところで、機嫌など取れないぞ？」

絆5

「全く…お前は剣崎や綺礼と同じ人種か？ああ。お前は俺の友だ。これからは、全力で守らせてくれ」

会話1

「いつまでダラダラしている。敵を倒しにいくぞ」

会話2

「俺がジョーカーであろうが無かろうが、今はお前のサーヴァントだ。使いたければ使

え」

会話3

「お前が倒れる時が、俺の倒れる時だ。そうならないように、実力をつけておけ。後々足を引つ張るマスターになられても困るんでな」

好きなこと

「好きなものは…困らん、かな？争うよりは、はるかに楽しいものだからな…」

嫌いなこと

「嫌いなのは、親友を侮辱されることだ。いくらマスターでも、俺の親友を侮辱するなら、容赦はしない」

聖杯について

「あの時の聖杯は、汚染されてるとは分かってたが…もし、汚染されてなかったら…いや、それはあくまでもI Fの話か…」

イベント開催中

「ん？何か騒がしいな…。マスター、見に行くぞ」

誕生日

「誕生日おめでとう。たまには、茶でもいれようか？」

召喚

「サーヴアント『アーチャー』、とりあえず召喚により出てきたが…まあ、一応形式上問おうか。」

お前が俺のマスターか？」

ステータスパラメーター

筋力———— B+

耐久———— B

敏捷———— A+

魔力———— B

幸運———— C-

宝具———— A+

追加分② fate／GO風のステータス②（ブレイド）
（超簡単仕様）

Saber 剣崎一真

☆☆☆☆☆

LV 90 / 90

HP 13482

ATK 12628

COST 16

スキル

魔力放出（剣）：A+ チャージタイム 9 ↓ 8（LV. 6） ↓ 7（LV. 10）
 自身のバスターカードの性能アップ〔LV. 1〕（1ターン）（LV. 1 ↓ 20%アッ

プ。LV上昇ごとに2%ずつ強化されていき、LV・10到達時は4%強化（LV・10到達でバスターカード性能40%アップとなる。）

&自身の宝具威力アップ〔LV・1〕（1ターン）（LV・1↓25%アップ。LV上昇ごとに1%ずつ強化されていき、LV・10到達時は2%強化（LV・10到達で宝具威力35%アップとなる。）

&自身の攻撃力アップ〔LV・1〕（1ターン）（LV・1↓25%アップ。強化具合は同スキルの『宝具威力アップ』と同じ度合い。）

◇9・マツハ：B チャージタイム 9↓8（LV・6）↓7（LV・10）
自身に回避状態を付与（4回）

&攻撃力アップ〔LV・1〕（LV・1↓6%。LV上昇ごとに1%ずつ強化されていく（LV・10到達で、攻撃力15%アップとなる。）

&自身のNPが減少（デメリット）〔LV・1〕（LV・1↓16%減少。LVが3上昇するごとに2%ずつ少なくなる（LV・10到達でNP10%減少となる。）

《霊基再臨を1段階突破で解放》

人の想い：A+ チャージタイム 10↓9（LV・6）↓8（LV・10）

自身の攻撃力アップ〔LV・1〕（4ターン）（LV・1↓10%強化。LV上昇ごとに2%ずつ強化。LV・10到達時は4%強化（LV・10到達で攻撃力30%強化と

なる。）

&自身の宝具威力アップ〔LV・1〕（1ターン）（LV・1↓15%強化。LV上昇ごとに2%ずつ強化。LV・10到達時は4%強化（LV・10到達で宝具威力35%アップとなる。））

&自身のNPを増やす〔LV・1〕（LV・1↓9%増量。LV上昇ごとに1%アップ。LV・10到達でNP18%増量となる）

《霊基再臨を3段階突破で解放》

クラススキル

対魔力：B+（自身の弱体耐性をアップ）

騎乗：A+（自身のクイックカードの性能をアップ）

宝具（作者の妄想全開（確定）&チート（暫定）込みですのでご注意ください）

至高なりて愚直なる閃光（ロイヤルストレートフラッシュユ）

バスターカード

ランク：A+

L V・ 1

敵単体に超強力な《アンデッド》特攻攻撃〔L V・ 1〕（特攻倍率↓L V・ 1⇨40%。L Vが1上昇することに10%強化。L V・ 5特攻倍率⇨80%

オーバーチャージで《宝具》が変化する》。

200%時

約束された勝利の剣（エクスカリバー）

敵単体に超強力な《アンデッド》・《魔術》特攻攻撃〔L V・ 1〕（特攻倍率↓L V・

1⇨50%。L Vが1上昇することに10%強化。L V・ 5特攻倍率⇨90%（特攻倍率の重複（重複については、前回のカリスの宝具より参照）あり）

+NPを少しリチャージ〔L V・ 1〕（L V・ 1⇨15%。L Vが1上昇することに5

%アップ（L V・ 5到達で35%リチャージとなる。）。

300%以上

至高なる勝利の剣（エクスカリバー・ロイヤル）

敵単体に超強力な《アンデッド》・《魔術》・《巨大》・《邪神》特攻攻撃〔L V・ 1〕（特

攻倍率↓L V・ 1⇨60%。L Vが1上昇することに15%強化。L V・ 5特攻倍率

⇨120%）（特攻倍率の重複あり）

+NPをリチャージ【LV. 1】（LV. 1 || 30%。LVが1上昇するごとに5%アップ（LV. 5到達で50%リチャージとなる）。）

カード構成

バスターカード 2枚

アーツカード 2枚

クイックカード 1枚

ボイス（希望CV↓椿○之）

開始1

「よしー行くぞー！」

開始2

「ここは任せてくれ」

スキル1

「これを使うか」

スキル2

「これで終わらせる！」

コマンドカード1

「よし！」

コマンドカード2

「これか！」

コマンドカード3

「ウエイ！」

宝具カード

「俺は運命と戦う！」

アタック1

「ハア！」

アタック2

「そこだ！」

アタック3

「ウエイ！」

エクストラアタック

「ハア…ウエイ！」

宝具1

「青き5つの力よ…。

王たる剣の礎となり、最たる一撃を敵に与えよ！

受けるがいい！『至高なりて愚直なる閃光（ロイヤルストレートフラッシュ）！』

宝具2

「幾星霜の光を束ねし剣は、

今ここに！聖なる輝きを解き放つ！

これが…人類の『最強の幻想（ラスト・ファンタズム）』！

受けるがいい！『約束された勝利の剣（エクスカリバー）』！

宝具3

「古代と現代…2人の青き王の剣を受けるがいい！『至高なる勝利の剣（エクスカリ

バー・ロイヤル）』！」

ダメージ1

「うっ！」

ダメージ2

「ぐあっ!？」

戦闘不能1

「始…お前は、人間たちの中で…生き続ける…」

戦闘不能2

「みんな、ごめん…」

勝利1

「アンデッドを封印するのが、俺の仕事だ。」

勝利2

「俺は戦い続ける！俺に、ライダーとしての資格があるなら！」

レベルアップ

「よし！いい感じだ！」

霊基再臨1

「…とりあえず、及第点か。」

霊基再臨2

「この調子なら、まだまだ上に行ける…！」

霊基再臨3

「もうちよつとで頂つて感じだな…。」

霊基再臨4

「ここが俺の終着点…。これからもよろしくな！マスター！」

絆1

「…なんだ？まだ顔を合わせて間もないだろ？」

絆2

「ん？何かあったのか？何もなければ呼ぶな…。」

絆3

「お前なら、いつも通りでもいいか…。あ、いや。何でもない。」

絆4

「マスター。一応これでも認めてはいるんだぞ？もつと胸張れよ！」

絆5

「ははっ。ここまで仲良くなれたのは始以来かな？まだまだ行けるよな？マスター！」

会話1

「おい、敵を倒しに行かないのか？」

会話2

「別にお前がどうというわけでもないが、使い潰すならそうしてくれ。」

会話3

「俺とお前は一蓮托生だからな…。あんまり倒れるなよ？」

好きなこと

「好きなこと？人助け…は、なんか義務っぽいな…。何だろ？」

嫌いなこと

「嫌いなことは、目の前で大切なものを失うことかな……。その重みは、計り知れないから……。」

聖杯について

「うーん、聖杯か……。使い道はあまり考えてないな……。マスターが使うか？」

イベント開催中

「お？何かお祭りでもやってるのか？見に行ってみようか、マスター！」

誕生日

「誕生日おめでとう、マスター。：花でも送ろうか？」

召喚

「サーヴァントセイバー、召喚により参上したが：お前が俺のマスターか？」

??第4話のセリフは、あくまでも召喚場所に複数人いたので、召喚直後は誰がマスターか分かりにくかったなのであのセリフだったが、対面しているのが1人ならこのセリフとなる。

ステータスパラメーター

筋力 ــــــــــــــــ A+

耐久 ــــــــــــــــ B

敏捷 ــــــــــــــــ B+

宝具	幸運	魔力
	D	
		B
A		
+		
+		

追加分③ H達の長い夜・FILE. 1 / 異界化ト
ラップにご用心!?

始サイド

俺と剣崎は、いつも通りにアニメシヨップで働いていた。来る人来る人、特徴はある（なんか、ジャンルを問わず、『ジャンヌ・ダルク』のグッズを大量に買う客とか…）が、基本的に客もマナーや礼儀はあるほうで、以前に客を見かけた時は、おばあさんの荷物を持ってあげていたり、マナーの悪いアニメ好きに注意したりもしていた。

今日もいつも通り…。

と思っていた。

ピーコン…。

LONEの通知が来たのだ。

仕事中には、『あるグループ』を除いて、通知をオフにしている。

そして、その通知をオンにしたままのグループは、

『悪魔術師狩り』。

これはあくまでも副業だが、悪徳な魔術師を狩る仕事もしている。そして内容は、

悪魔術師狩り（6）

綺礼キレイ「魔術師達の中でも、危険視されている『アルファレア・ガーネルム』が、

冬木の街に潜伏していることがわかった。詳細は本日20:00に、いつもの場所で集合されたし」

ケリイ「チツ！ここに来るとは盲点だった…！今回は僕も出る！席を確保しておいてくれ！」

雁夜ん「稀に聞く名だと思つたら、マジもんの危険人物かよ!?俺も出る！」

綺礼キレイ「後は、始と劍崎、そして渉だが…」

渉・ザ・リツパー「俺も出れます！今回は、楓も連れて行きます！」

綺礼キレイ「よし、あとはあの2人の返事次第か」

俺は、劍崎と顔を見合わせた。劍崎の目は、『日常を謳歌する人間・劍崎一真』ではなく、『大切なものを守る青き剣の王仮面ライダーブレイド・劍崎一真』の眼となっていた。それを見て、俺も『アニメシヨップ店員・相川始』から、『人の想いを守護する黒い

嵐・相川始』となる。

「店長！今日はこれで帰ります！」

「店長すいません！俺もです！」

俺たちは、ほぼ同じタイミングで店長にそう告げた。

すると、

「うん！いつもの用事だね！行ってらっしゃい！けど、『約束』は忘れてないよね!!」

「ハイ！」

俺と剣崎、そして店長との約束は、『仕事が終わったら、まず最初に、絶対にここに帰ってくる』こと。』

この約束は、悪魔術師狩りを始めた時の最初の仕事の後、俺たちは店長に無断で、身体を休めるために休みを取っていた。

次の日、仕事場に行った時、店長が泣きながら俺たちを抱きしめてきた。その目にはクマがあつて、俺たちが休んでいる間、寝もせずにと俺たちを待っていたことを聞き、俺たちは自分たちの近くにいる人を泣かせてしまったことを後悔し、この約束を了

承した。それからちやんと、店に顔を出してから家に帰るようにしている。

そんな約束を胸に、俺たちはいつもの飲み屋に向かった。もつとも、今日は飲むのが目的ではないが。

始「直接行くから席を取っておいてくれ」

一真「俺も始と行くから！」

もちろんLONEの返事も入れて。

居酒屋『CANJARADA』

「さて、皆が集まったところで、今回の概要を説明する」

綺礼がそう話すと、モニターにターゲットとなる人物が映し出された。

この居酒屋は予約すれば、こうしたモニターなどのついた会議室仕様の個室も借りることができる。もはや何でもありな気がするのは俺だけではないはずだ…。

「まずは今回のターゲット、『アルファレア・ガーンエルム』についてだ。

アルファレア・ガーンエルム

年齢 39歳

性別 男

魔術礼装 不明

ガーンエルム家9代目当主

「ここまでで質問はあるか？」

「そこでまず手を挙げたのは、雁夜だった。

「えっと…見てる限りだと、まだ危険人物って気がしないんだが…。なんで危険人物なんだ？」

「間桐雁夜、それについては、もうちよつと話を聞いてたら、いずれ分かる」

「…？分かった」

「先ほど雁夜から、危険性について問われたな。なぜこの男が危険か。それは、この男が使用する魔術にある」

「…どんな魔術なんだ？」

俺と剣崎は、少し嫌な予感がした。何故かはわからないが、こう…まとわりつくような不快感だった。

「その魔術は、『人を操る魔術』だ。これを行使し、幾多の魔術師をこの世から脱落させている」

悪い予感は、的中した。が、

この時は、あんなことが待ってることまでは、さすがに読めなかった。

「潜伏場所は街はずれの廃屋敷だ。そこに、自身の使役する人間を多数閉じ込めている」
「…クソ、なんかイライラしてくるな…。人をスケープゴートに使って、自分は罪を逃れようとか、ふざけてんじやねえぞ…!」

「…渉、ちよつと落ち着いて。そんな人達を助けるためには、渉の力も必要なんだから」
「楓…。すまん。ちよつと頭冷えたわ」

渉も、やや憤りを見せているな…。スケープゴート云々は、イジメられてる時にやられたのか…?

だが、

1番怒っている者がいた。

それは、

「こいつは、アイリやイリヤ、姉さんに母さんと父さんに舞弥、セラヤリズ、果ては士郎も狙つてるといふことか…！許さん…。ガーネルム、ゆるさるさん！！」

…これはヤバイ。主にターゲットが。下手すりや蜂の巣だ…。

しかし、自分の近くにいる者が狙われるという懸念は理解出来た。俺も帰ったら臓硯に言つて、桜を匿つておこう。

「狩りの決行は2時間後だ。それまでに、準備をしておいてくれ」

「「「「了解！」「」」」」

さあ、狩りの時だ…。

???

「あの一、そこのお嬢さん」

「え？はい、なんですか？」

「ちょっと、道をお伺いしたいのですが……」

道を伺いたい、そういった男の顔は、爛々としていた。

まるで、欲しいオモチャを見つけた、子供のように。

2時間後

廃屋敷前

「さて、全員いるな」

いつもの神父服を着た綺礼が点呼を行い、全員いることを確認した。

俺は、生前から着ていたベージュのコート、剣崎は、BOARDの社章のついた服、切嗣はいつもの黒いコート、雁夜はフード付きパーカー、渉は長い青のコート、楓ちゃんさんは、完全黒のゴシッククロリータだった。

「よし、それでは…」

突入！」

そして屋敷に侵入した。この屋敷はかなり広く、皆と離れば、不利になる可能性もある。俺たちは集まろうとしたが、なにか違和感を感じた。

そして、周りを見ると、

一緒に突入したはずの皆が、消えていた。

「…!? どういうことだ!? 剣崎! 綺礼! 切嗣!」

返事がなく、ある可能性を悟った。そう、これは…。

「くっ! 『異界化トラップ』か!」

俺たちは、まんまと罠にかかり、後手に回ることとなった。

追加分③ H達の長い夜・FILE. 2／トラップか
ら脱出せよ

始サイド

「チィー！異界化の上に分断か……これはマズイな……」

俺は、玄関のような場所にいた。

冷静に判断しても、すぐにガーネルムにはたどり着けはしない……。一旦、探索に回るか……。いや、その前に念話……は通じないか……。何か……みんなの無事を確認できる術は……

……ん？

所変わって

剣崎サイド

「…クソ、誰もいないか…」

俺は、気付いたらどこかの部屋の一室にいた。人1人の部屋というなら領けるくらいの広さだ。俺はここから出ようとするが、

ガチャガチャ…

「…? 鍵がかかっている?」

鍵がかかっていた…。しかもこちらから開けられない…。それなら…

「変身!」

『turn up』

ブレイラウザーでドアごと…!

ガキーン！

「!?」

マジか…これで削れないのか…。『ジャックフォーム以上は、ガーンエルム戦のために温存』…っていう方針だから…。素直に外から、開けてもらうしかないか…。しかし、この状況を念話なしにどうやって伝えれば…。

…ウエ？

また所変わって

雁夜&切嗣&綺礼サイド

この3人は、広めの客間のようなところに飛ばされていた。…。

「な、始たちが…いない!？」

「分断か…。少々厄介だな…」

「さすがに始と剣崎は大丈夫だろうが…問題は、渉と楓だ。昔からの友…いや、恋仲とはいえ、さすがに実戦はかなりのブランクがあるだろう…」

「でも、念話は使えねえし、どうやって連絡とるんだよ!」

「それは僕も考えてる!何か、何か手は…!」

この3人では、文殊の知恵とはならないと思われた。その時。

「…あれ?」

「どうした、雁夜」

「2人共、これ…」

「…!!」

やっぱり所変わって

渉&楓サイド

この2人も剣崎と同じく、どこかの部屋の一室に飛ばされていた。しかし、この部屋

は中から鍵を使って開けられるようで、その鍵を探している。

「始さんに綺礼さんまでいない…完全に分断されたな…。楓、何か見つけたか？」

「ダメ。こつちも探してみてるけど、何一つ見つかりやしない…」

「うーん、どうしたものか…」

あれ？なんだ、そのミニニカー？」

渉はふと、楓が使役(?)しているミニニカーが目に入った。

「あー、これ？シ〇トカーに魔力突っ込んで操作してるんだ。捜査の手は多いほうがいいだろ？」

「…『操作』と『捜査』を掛けたのか？」

「いや、そういうわけじゃねーけど…とにかく、早く鍵探そうぜ？」

「しかし、他の人たちの安否が気になる…。特に雁夜さん…」

「あく…確かに単体じゃ脆そうだしね…」

「でも念話出来ねえし…」

「どうしようも…ありゃ？」

「…？どうしたんだ？楓」

今度は楓があることに気づく。

そして、他の場所に居た仲間たちも、同じことを思っていた。

それは…

ここ、携帯の電波通つてる……!

悪魔術師狩り(6)

綺礼キレイ「無事か!? 私は、切嗣と雁夜と共にいる!」

始「俺は1人だ。玄関のような場所に飛ばされた」

渉・ザ・リツパー「楓といいます!どこかの部屋の一室に閉じ込められて、今、鍵の搜索中です!」

一真「俺は1人で、飛ばされた場所は渉と似たような感じなんだが…、内側から開けられないから、外から開けてもらわないといけない状況だ」

渉・ザ・リツパー「あれ?それ俺たちよりやばいんじゃない?」

綺礼キレイ「無事なのは分かった。それぞれやるべきことをやってくれ!」

始「了解」

渉・ザ・リツパー「了解!」

一真「了解!」

「さーて、探すぞ。楓」

「他の場所は？」

「無事。でも、とりあえずここを出なきやな…」

「そうだなあ…」

ガサゴソ…

ガサゴソ…

「お、なんだこりや？」

「渉？どうした？」

「なんか箱があった…鍵は、番号式か」

「やってみようか…」

えーと、

『仮面ライダー○剣で一番コストの低いコンボのAP

+

$$10 \times 111 \times 12 \dots 13 + 1$$

+

$$(1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12 + 13) \times 4$$

II

『???』

何これ!？」

「こりややばいな…。しかも、仮○ライダー剣ってことは…」

「始さんと剣崎さんの能力、かなり把握されてるってことだね?」

「これは知らせておくか…」

涉・ザ・リツパー「敵は始さんと剣崎さんの能力を把握してる可能性が高いです!」

始「分かった」

一真「分かった!警戒する!」

「これでよし…」

「じゃあ解いていこうか」

「そうだな」

そして2人は、箱の鍵を開ける暗号を考えていった。

追加分③ H達の長い夜・FILE. 3 / 再会と決戦

渉 (& 楓) サイド

「えーっと、

仮面ラ○ダー剣のコンボの中で1番低いAPは1600。

10 x 11 x 12 || 13 + 1 || 1308

(1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 8 + 9 + 10 + 11 + 12 + 13) × 4 || 364

これを足せば…よし！コードは3272！

「オツケー！3…2…7…2…

お、開いた！」

よし！こういうのには、鍵とかが入ってるのが定石！

これでここから出られ…

⋮

ガチャ
：

「…え？」

るが勝ち…なんだけど、

「渉！ここ、これ以上空間が無い！多分これ以上は進めねえ！」

「ああ、くそ！てことは…」

「あのゾンビ？達、倒さないかね」

「そうだな」

楓は優しい。

あんな奴らが相手でも、『殺す』ことはしないんだから。

「さーて、やるか！楓！」

「おお！ひっさびさの吸血強化！」

ガブ！

…

…

.....

.....痛い。

「痛って!?!ちよつと待って!以前よりはるかに痛い!?!加減して!?!」

「あ、ごめん。久々だから、つい加減が…」

「ま、いいや。どれくらい持ってた?」

「3くらいだけど?」

「なら大丈夫か。よし!こいつらぶつ倒すぞ!」

「分かってるっ…ての！」

楓がそう言いながら突撃。固まっていた敵を崩し、その勢いで敵を、ボウリングのピンのごとく弾き飛ばす。

「ハア！セイ！…セイヤー！」

「楓ー！なんか混じってますよー!?!」

そして俺の仕事は…

ヒューン…

あ。きた。

「フーン！」

ズドゴン！

「ガ…あああ」

こういうやつの後始末。もちろん絶命はさせて無い。それするとキレる人がここに
いるし…。

片付いたので、俺たちはこの異界化空間を探索することにした。

所変わって

綺礼（&雁夜&切嗣）サイド

さて、全員の無事はとりあえず確認した…。

ならば、ここから脱出するのが、私たちのすべきこと…。

「ここ、どの辺なんだろうな…」

「さあね。けど、出られるんだろう？」

「ああ。出られる」

そう、この異界化空間の作成者、『アルファレア・ガーネルム』は、異界化空間を作る

のはいいが、稀にドジを踏み、自らも異界化空間に落ちてしまうことがある。そこから出るために、脱ルートを作ってるらしいが、果たしてどこにあるのやら…

ガサガサガサ…

…！この音は…？

「アアア…血を、血をクレエエエ！」

「抜け駆けスンナアア！ワタシノ獲物ダアアアアアアアア！」

「エモノが向こうからキターーーー！」

…なんか、最後のヤツの叫び方、私の友達作りの師匠によく似ている気が…
…いや、気のせいだろう。だって、リーゼントじゃないし。

とりあえず…

「切嗣！雁夜！各個撃破だ！攻撃はマニュアルで構わんな？」

「もちろんだよ」

「当然だ！」

そう言いながら、切嗣は固有時制御を発動しながらナイフで一体を攻め、雁夜も水圧弾で一体。私も黒鍵で斬る。もちろん、急所は外している。

「よし、撃破完了だな。しかし、この空間の地形がよく分からん…」

「こういうのがちよいちよい出てくるってことは、よく分かったけど」

「じゃあ行こうか。ここに長居しても意味は無いからね…」

そうして、私たちはここから離れた…。

所変わって

剣崎サイド

「うーん…暇だ」

そう。俺は今、暇だ。誰も来ないし、もしかしたら誰も助けに来ずにそのまま終了…
なんてのもあり得る？

「それは嫌だなあ…。でも暇だしなあ…。

あ、そうだ。F/GOでもしてるか」

そして起動…。が、

「またメンテか！

…今度はどれくらい、石をくれるんだろうなあ…？」

…俺自身、今【とてもいい笑顔】をしていると思う。

と、その時。

ガチャ…

「っ！」

俺はその音に気付き、臨戦態勢をとる。

現れたのは、

「無事ですか！ 剣崎さん！」

「外敵なし！ 今のうちだよ！ 渉！ 剣崎さん！」

「わかった！」

俺は2人のおかげで、なんとか脱出できた。しかし、メンテはいつ明けるのか…。

ま、どうせメンテが明けても、またメンテなんだろうなあ…。

やっぱり所変わって

始サイド

「進んでも進んでも同じ風景…か。なるほど。異空間に閉じ込められたか…」

以前、綺礼から聞いたガーネルムの特徴からすれば、脱出する方法はあるはずだが…
試した方法はすべて空振り…。

いつそのこと、宝具で一帯を吹き飛ばそうか…そんなことを考えた時、

グニャア…

「ん？これは…」

目の前の空間が歪み始めた…だと？一体なにが…。俺はまだ宝具どころか、変身もしてない。それに、空間を歪めるような斬撃も放つたりしてないはずだ…。

ピタア…！

そして、空間の境界線が合わさった時…。

「始！無事だったか！」

「良かった！始さんは無事だ！」

横から剣崎と渉たちが現れ、

「始！ここだったか！」

「良かった…。ところで、一瞬魔力がごっそり持っていかれそうになったんだけど…なにか心当たりは？」

綺礼に雁夜、切嗣も現れた。そして雁夜の質問に対しての答えは、

「いや、気のせいじゃないか？」

惚けておく事にした。

そして、

ガーネルムの館：書斎

「…やあ、待ってたよ。魔術師狩りの諸君！」

全員が入るなり突然、男が声を上げる。こいつこそが俺たちの敵『アルファレア・ガーネルム』だ。

「ここまで来たってことは、俺の傀儡たちを壊してきたってことか…。どうだ？【痛かったか】？」

「…？」

…いや、壊してはいない。戦闘不能にはしたかな」
そんなことを綺礼が言うが、状況的には俺と剣崎は、会ってないけどな…。しかし、それを聞いたガーネルムは、

「…へー」。

なら、この数の傀儡と破壊人形…

そして、この『絡繰死霊』相手に、その軽口は叩けるかあ!？」

ガーネルムがそう言うと、本棚が突然、音を立てて倒れ、大量の生気を失った人間や機械が現れ、側に3人の人…いや、死体が現れた。

そして、

ギユワン!

その三体の死体と俺たちは、再び異空間に閉じ込められた。

追加分③ H達の長い夜・FILE. 4／死霊vs生者

始（&剣崎）サイド

ドドサ！

「痛っ！」

「ヴェー！」

と、俺と剣崎は、いきなり異界に放り出され、床に叩きつけられた。起き上がろうとする

ゴキグシヤア！

「ぎゃあああああ!?!」

…ん？なんか、悲鳴が…。

「痛！あ、ダメだこれ。絶対背骨のどつか折れてる！いや、この感じは砕けてんのか！？つて、あー！首が変な方向向いてるし!？」

…ふー。よし、覚悟を決めたぞ。せーの、ふん！（ベキヤー！）…あ！直ったよ！クビノホウコウナオツタヨ！（↑逆方向に向いただけ）

「なんだ？あいつ…」

さつきガーネルムが出した死体に似てるが…え？あいつ、ここへの送り方を間違えたのか…？

「あ！お前ら！ちよつと今ダメなんだわ。悪りいけど俺の首の方向直して!？どうせにし

たつて、お前らがちゃんと俺を倒さねえと、ここから出られないからな！」

ふむ…かなり不愉快だが、出れないなら仕方ない…。

直してやるか…。

スツ…

(人体からあまり鳴ってはいけない音)

「ぎゃああああああ…」

あ、激痛伴うの忘れてた。まあいいか。

数分後

「いやー、助かった！生前からわりかし不運でなあ！さっきのは、死んだ時を思い出した

「！」

…どんな死因だったんだ…？

「…とりあえず始めようか。こちらも時間がない」

「ああ！あいつは絶対捕まえる！」

「おう！では殺りあおうか！此度蘇ってからこの体、戦いを求め疼いていたからなあ！」

そして数瞬のインターバルを挟み、

「…行くぞー！」

俺たちは、不運な剣士とぶつかった。

所変わって

雁夜（&綺礼&切嗣）サイド

「よっ」

「ふっ」

「痛！」

俺と綺礼はしっかり着地できたが、切嗣は何故か尻餅をついていた…。相変わらず締まらないな…。

「ここは…またあいつの異界か…」

「その通りだ雁夜。そして十中八九、出口には門番がいるだろう」

「ああ…きつとそうなんだろうな…。というより、なんで僕だけこんなことに…?」

「そういう立ち位置だからだろ」

「そんな…！僕はただ…いい父親に、なりたいたけなのに…！」—?—〇—

凹む切嗣をよそに、

ビシ…

ビキビキ…

その物音にいち早く気づいたのは、

「—?—〇

…ん?これは…! 綺礼! 雁夜! 離れろ!」

「え?」

その瞬間、

ドゴン!

「「うわあ?!」」

床が突然揺れ始め、その形を変えていく。

幸い、凹んでいた切嗣が直前に気づいたから、3人で固まることができたけど…

「土系の陥没魔術……誰だ！出てこい！」

その声に反応したのか、そいつは姿を現した。

「ハハ。どうかね？お気に召したかい？魔術師殺しさん」

「…そう見えるなら、その眼を早急に眼科医に診てもらうことをお勧めする」

敵の冗談に、割と本気で返す綺礼……。それを見て、俺は切嗣に尋ねた。

「切嗣、どうする？」

「こちららも応戦だ。コードは…3人だから、雁夜は『魚』確定だな。僕は『狼』、綺礼は

『人造』で行くか」

「3人揃った時のテンプレだな。…けど、行けるか？」

「あいつは、僕のこと知ってるが、綺礼とか雁夜は知らない様子だった。魔術師殺し

『達』って言わなかったのが根拠だ」

「あ……！」

俺は、切嗣の話す根拠に納得した。しかも、代行者とも言わないから、綺礼が何者かも知らない可能性がある。ましてや……！

「間桐の家を出て行つてた俺のことなんか、絶対に知らないはず……！」

「そう。この場を制圧するカギを握っているのは間違いなく、ほとんど知られていないだろう、雁夜、君の魔術だ」

他の奴の強さに劣等感を持つてた俺は、その言葉を聞いて、胸の中に何か燃えるのを感じた。

「…ああ！ やつてやる…！ 俺だって、もう弱いままは嫌なんだ！」

「…作戦は決まったか？」

…来い！ 叩き潰してやる！」

相手は1人…！ あいつがどこまでの実力者かはわからない。けど、絶対に勝つ！

また所変わって

渉（&楓）サイド

「…ん？」

俺の視界は闇に包まれていた。

もしかしてヤバイとこに来たか…？ それに楓がない…。逸れたのか…？ それにな

んか、息苦しい…。そんなことを考えていると、

「んゆ…渉、ちよつと待つて…ふにゆー！」

ドツ…！

ガラガラガラガラ…

「ぶはーな、何だったんだ？」

「あ、ごめん渉。なんか瓦礫が多い場所に入っちゃまって…私が上だったから、瓦礫退けたんだけど…。」

渉、なんで窒息しかけてたんだ？」

…あー、そうか。息苦しさの理由が分かった。

そう、アレだ。あいつの胸だ。さつき、あいつが瓦礫を背中で退けただろ？その時に

あいつの上半身が上に行つて、息苦しさが解消された訳だ。

とりあえず頭の中で整理した時、

「あらー？これはこれは…。あんのクソヤロー！まあーた土系使つて撃破しようとしたなあ!?あいつが使うと、こつちが迷惑被るんだよ！畜生が！」

「…なんかいるな…」

「なんだあいつ？」

そんな風に楓と話していると、

「あー！てめえらか！侵入者つてのは！あーもー！つてことは今回の番人プレイヤーは俺ですか、このヤロー！面倒くさいんだつて言つてんのに！あとお前ら！リア充爆発しろ！正確にはそのリア充男！爆ぜやがれ！」

…なんてことを、あの魔術師は言いやがる…。

…ああ、『こいつ』が怖い。終わったら慰めよう…。

「おいテメエ…今、涉に爆ぜやがれって言ったか…？」

「は…？」

こいつさっきの一瞬で血を『6』持って行きました…。ということとは…。

「涉に喋るな触るな近づくな…。もし破ったら…お前が何者でも、アタシがあんたを潰してやるよ…。」

「…!?」

俺は、少し貧血気味になってるから、しばらくは動けない…だから、

「楓、少しの間…頼むぜ」

その言葉に、

「任せとけて。ちゃんと首持って行ってやるから」

いや、そこまでしなくていいよ!?

所変わって

始 (& 剣崎) サイド

ギキン! キン!

「クツソ! 攻撃が…」

「通らない、だと!」

俺たちは今、実のところ苦戦している。相手は1人なのにだ。

「ハハハハ! どうした、あれほど期待させておきながらこれか!? そんなもので、よく倒せ
ると思うたな!」

チツ! ここは…

「剣崎、合わせる。あの時みたい」

「…?」

ああ! アレか!

そう言う俺たちは

『エボリユーション』

『アブゾーブQ、エボリューションK』

ワイルドカリスとキングフォームとなった。そして、

『♠?10、J、Q、K、A』

剣崎がカードを通していている間に、

「ハア！」

「ぬぐ？」

相手の肩を斬りつけながら敵の背後を取り、??スートのラウズカードを一つにし、

『ロイヤルストレートフラッシュ』

『ワイルド』

剣崎と同じタイミングで宝具を解放する。

「絶望の闇を斬り裂く光の旋風よ！今ここに！その力を証明しろ！」

「青き5つの力よ……。王たる剣の礎となり、最たる一撃を敵に与えよ！受けるがいい！」

俺の武器には光の旋風が宿り、剣崎の前にも5枚のオリハルコンエレメントが出現する。なお、俺のセリフが違う点については、今回は射出型ではなく斬撃型だからである……って俺は、誰に言ってるんだ？

「『荒々しく黒き光の旋風（ワイルドサイクロン）』！」

「『至高なりて愚直なる閃光（ロイヤルストレートフラッシュ）』！」

宝具の真名を開帳し敵に突っ込む。そして完璧なタイミングで叩き込まれた。

「ふ……ぬるああ！」

…はずだった。

「……は？」

思わず変な声を上げてしまったのは許してほしい。

なぜなら宝具だ。真名も開帳した。だから、死なない程度には傷つけられるはずだった。なのに！その攻撃をこいつは弾いた！こんな事態に落ち着いて考えられる頭があると思うか！

「貰ったあ！」

「……ぐっ！」

「始！」

考え事をしてる暇など与えないと言うように、敵は攻めてきた。なんとか自分で後ろに飛んで勢いは殺したが……

「チツ……少しマズイか……？」

「なにかあるはずだ…！俺と始の攻撃は確かに一致してた！それで天王寺も倒せたんだ！

…あいつは、何らかの形で防いだんじや？」

「としても、俺と劍崎の攻撃を同時にか？その方が考えにくいが…」

俺はそういうが、劍崎はとんでもないことを言い出した。

「待てよ…そうだ！物は試しだ！始、

ちよつと今だけ友情破棄で！」

…は？

え？おい、劍崎…？お前…何言ってるんだ？あれ？おかしいな…目からなにか、水み
たいなものが出てきた…

「（あ、ごめん始！違うから！あいつは多分、『同時攻撃』だから防げたんだと思うんだ…。
つまり攻撃のタイミングを少しズラせば、あいつは防げない可能性があるんだ！だから
泣くな…って、お前…泣けたんだな）」

「…余計なお世話だ！」

危ない…精神的に壊れてしまうところだった…。

よし…タイミングをズラす…タイミングをズラす…

「はあ！」

「おっと！」

いや、タイミングが合っちゃダメなんだ！今度こそ、タイミングをズラす…タイミングをズラす…

「始…そう考えてる間に攻撃すれば…」

ラす…

…

「早く言え！」

「いや、始はむしろ何で気付かなかったんだ!？」

と言いながら攻撃していく。

「ぬ、ぐ…が!？」

それぞれの一撃がズレにずれ、不協和音を創り上げていく。

剣崎の言った通り、同時攻撃は防御できるようだが…

「バラバラの攻撃には、さっきのは使えないようだな！」

「ええい！声だけは合わすか！面妖な！」

いや、この際はつきり言わせてもらう。

「宝具防ぐとか、お前の方が面妖だよ！」

俺たちはそう言いながらコンマー秒足らずでズレた攻撃を叩き込み、

「そうだよなあああ!!！」

と言いながら敵は倒れ、また眠りについた。

「よしー！」

「ふう…！」

俺たちは何とか勝てたのを実感し、

「始！」

「剣崎…ああ！」

ハイタツチを交わした。

そして、

ドゴーン！

大きな音を立てて、部屋の中央の床に穴が開いた…いや、下から壊されたのか!?

「剣崎…どうする?」

「行ってみよう。もしかしたら、あいつらの内の誰かに会えるかも」

「そうだな…行くか!」

「ああ!」

そして俺たちは穴に飛び込んだ。

所変わり、時間も少し戻り

雁夜 (& 綺礼 & 切嗣) サイド

「くっ! なかなかフォーメーションが合わない!」

「どうしたのかね? もう終わりかい!」

「んなわけ!」

と言いながらも水の魔術で相手に牽制を行うが、なかなか効かない。

あの2人はどうしたか? 簡単だ。

「はあ……はあ……！」

「魔術師殺しも頑張りたまえよ。他の仲間の足場を、潰したくないだろう？そして、」

切嗣は、相手の土の陥没魔術を中和するために、俺たちも行使するのを見た事のない土系の魔術を使ってくれている。綺礼は、

「……！」

「フツ、気づいてないでも？」

綺礼の不意をついた攻撃は、持つてる杖で止められた。

くそ、あいつの動きを止められたら……！

そう考えた時、ふと足元が何故か気になった。俺も一応物書きだ。小説とかもたまに読むし、実際ファンタジーみたいな事も当然ながら経験済だ。そういった話の中では、地面に固定するという形で敵の動きを止める、という類のものもある。

だからこそ思いついた。少し崩れてる程度の今なら、いける！

「2人とも！そいつから離れろ！」

「……！」

「むっ？」

その言葉を聞いてすぐ離れた2人の判断力は本当に優れている。俺なんか……いや、俺は俺にできることをすればいい！

そう思いながら水の魔力を『地面のヒビ』に向け敵の『真下』まで延ばす。そしてそれを……

「2人とも！飛べ！」

「はっ！」

一気に解放する！

「？……はあ？！」

よし！一時的だが、行動を阻害できた！タイミングはここしかない！

俺が周囲に水のフィールドを張り、相手の足を鈍らせる。

「はあ、はあ……ぬっ！」

「『固有時制御・三倍速（タイムアルター・トリプルアクセル）！』」

「ぐっ！あが、ぐっ！」

切嗣が固有時制御で加速しながら、ナイフで斬撃を入れていき、

「フツ……ハアツ！」

メキヨツ……

「いばあっ……！！！」

綺礼が八極拳で確実に仕留める！

これが俺たちのテンプレフォーマーメーション。
何を参考にしたか？

…コード名で察してくれ。

考える時、意外と綺礼が一番ノリよかったことは、ここだけの話な？

「ふう…何とか勝てたか」

「今回は、雁夜の判断力に救われたな」

「アレなんか、即興で考えた割にはかなりハマってたぞ。そうやって有効打を考え続けられるのは良いことだ」

「…そうか？偶然だろ？」

今日はいつになく褒めてくるな…なんか怖い。

「その判断力と実行力は誇って良いと思うぞ」

「それは僕も同感だ」

「雁夜、お前（君）は弱くない」

…なんか、自信が湧いてきた。よし、これからも頑張る

ドゴーン！

「…なんか、その…部屋の中央の床と天井に穴が開いたんだが…」

「見ればわかる。瓦礫の弾け具合からみて、この下で何かあったとみるのが基本だが…」

「…行こう。もしかすると、下で誰かが苦戦してるのかもしれない」

その一言でそこにいた全員の意見が固まり、穴から下に降りることにした。

所変わって、時間もさらに戻り

渉（&楓）サイド

ドーも、渉です。目の前で俺の彼女が、ゴスロリな服装で礼装である槍をぶん回して攻撃してんだけど、なんか質問ある？ 無い？ うん、分かった。俺が現実逃避したいだけだし。

「ああああああああああああああああ!!!」

「ちよっ!? なんですかこいつ！ 無理ゲーにもほどがあるっしょ!」

「うるっせええええええ!」

「面倒いなあ! でも俺、番人なのよね!」

「楓! あまり焦るな! そいつ何ががあるか分からねえ!」

「…チツ、命拾いしたな…!」

「いや、ほんとにね!? ウザすぎるんだよ! その槍! なに? 『親の形見なんです』とかそ

日のことが過るんだ……!

「言つとくけど、あの時抑えてたのは私の方だ。もし、全力でやってたら、あいつら殺すまでで抑え効かなかつたはずだからな」

その言葉を聞いて安心したと同時に、何処となく懺悔が入ってるように思えた。

「もしあの時、力を抑えてなかつたら、涉に人殺しなんかさせずに済んだんだろうな……」

「……」

楓はそんな話をするような奴じゃなかつたから、正直驚いた。

「……なんだよ、もしもの話だよ。時は戻せない。だけど今が最高だ。だって、お前がいてー綺礼さんもいてー、始さんに劍崎さんもいるんでしょ? 最っ高じゃん」

「ああ……そうだなー!」

「さーて、焼き尽くしますか!」

大地を焦がす烈火のように、春に咲く桜のように!

十字架よ、炎のように、桜のように!

「……ギリヤアアああああああああああああああ……」

楓の魔術はいつ見てもヤバイねえ……ここまでの多さを一焼きとか……

しかも職業柄、ゾンビとかには特攻付いてるんじゃないかねえのかつてくらいダメージ入ってるっばいし……。

あ、なんかあいつ痲癩起こしてる。ま、無視む…

「ああああああああああああああああああ！クツソ！役立たず共め！このクソアマ！生きて帰れると思うなよ！」

「…」

楓が、クソアマ？

「大体なんだよお前！女のクセして男みたいな口調だしよお！そのクセして胸と服装は女つてか！傑作以外の何物でもねえな、おい！」

「…」

楓が女なのは、胸と服装だけ？

「男の方も、そういうとこばっか見てお前と付き合ってるじゃねえの？可哀想だなあ！パーツしか見られてないなんてよ！」

俺が、楓の体しか見てない…？

ブチン…

「あーあ…」

「あん？なんだよ？負けでも認めるか？」

そこのゾンビ。

「ハア？お前こそどうにかしてんのか？」

「何？」

お前は俺を、

「多分あんた、私以上にあいつを怒らせたな」

怒らせた。

「あん？何言つて…」

「グラビタ・テンス
重力・十倍」

ぐおおおおおお!?」

ボギメキメキメシヤグシヤベギベギ…

「ぎやあああああああああ！な、な…なんだよコレエええええええええええ！」

俺が行ったのは移動阻害の重力操作だ。こつちにも、それ相応のフィードバックが来るから、これが重力操作の限界倍率なんだ。

いやでも、堪忍袋の緒が切れたとはいえ、ここまで軽く放てるとは思わなかったなあ…。

「楓、良いよな？俺がやって」

「ん？良いぞ。やっちまえ」

「まつ、待つてくれ！ここの空間の鍵なら渡す！お前たちも解放する！だ、だから命だけは……」

ゾンビがここまでできて命乞いか……

そう思いながらも鉈を持って敵の下へ歩く。

「悪いけど、これゲームじゃねえんだわ。お前みたいに戦争ごっこでやってんじゃ……」

「ま、待て！ひっ！ヒイヒイヒイ！」

「ねえんだよ……」

「」

何回も何回も斬った。割とズタボロにした。ゾンビだから死んでも大丈夫とは考えたが、二度と顔を見ないために、ここまでやれば蘇生も無理だろうってくらい、ひき肉にした。割と酷い絵だ。

「……見なくて良いぞ」

「……一応、私はシスターだぜ？死者を弔うくらいの寛容さはある」

「俺が死んだ時もそうしてくれるか？」

冗談めいてそう言うのと、

「は？やらないに決まってるじゃん」

と返ってくる。いつもの事だ。

そして、

「渉が死ぬ時が、私の死ぬ時だ。どんな死に方でも、あんたが死ねば後を追うよ。絶対、1人にはさせねえからな？」

「…そつか。ありがとな」

こう返ってくるのいつもの話だ。

だからこそ、一度楓が死んだ時、どんなに寂しかったのか、時々よく考える。

聖杯の力で、こうして連続性のある命の蘇生を成し遂げた楓だけど、その生き方も変わりない。ただ、俺の命||自分の命と思ってる節があるから、それだけは直さないと…
「ま、渉は私が死なせないよ。死ぬ時は寿命で死のうぜ？」

「…分かってる。簡単に死んでたまるかよ。お前こそ、俺が守ってやるから…死ぬなよ？」

「何言ってるんだか…ま、良いや。そんじゃここ抜け出しますか」

「おう。鍵はここにあるけど…」

と言いながら、ズタボロのひき肉にしたあのゾンビが持ってた鍵を見せる。

「そう言えばあいつなんか言ってたよな…？」

あ！そっか！

「ん？待て、微妙に繋がってない。どんな言葉を聞いて、何にたどり着いた？」

「ほら！さっきの奴『クソヤロー！土系の魔術使って倒そうとしやがった！』とかどうとか言ってたじゃん！」

「あー…そういうえば」

で、さっきのと何が繋がるんだろうか…。

「私達が瓦礫に埋められてたってことは、多分あいつの仲間が土系の魔術使って、その余波でこっちの壁とかが崩れた。私達はその瓦礫の中に転送された。」

「こうは考えられない？」

なるほど、一理ある。

「で。どうするわけ？」

すると、とんでもないことを口にした。

「簡単！…この天井を…2〜3個ぶっ壊す！」

大地を砕く雷のように、罪を裁く鉄槌のように！

十字架よ、雷であれ、鉄槌であれ！

そう唱えながら槍を振り回す…あれ？なんか…デカくなっていったね？

そして現在

カメラ視点

それぞれ上から降りてきた面々は、渉と楓に駆け寄る。

「渉！ここにいたか！」

「綺礼さん！」

「もしかして、さっきの天井……と言うかこちらからすれば床破壊は……」

「皆さんの思ってる通りです。楓がぶち抜きました」

「スゲエな……で、なんでこんな事を？」

「それについては楓から」

そして事の顛末を確認した一行は本棚の裏に隠されたドアを発見。鍵を開け、異界からの脱出に成功した。

追加分③ H達の長い夜・FILE. 5 / ご利用は計画的に。

ガーネルムの館 書齋

異界の中にあつた扉を開いた先は、先ほどまでいたあの書齋だった。

「よし、抜け出せた！」

「くそ…あんの役立たず共が！侵入者の始末すら碌に出来ないのか！」

「これでお前も終わりだ！抵抗をやめれば命までは取らん！」

あくまでも慈悲を与える綺礼だが、

「そう言われて『はい分かりました』なんて言うんでも思つか!? こつちもな、やらなきやならねえことがあるんだよ！邪魔すんな！」

逆に、相手の怒りを煽る結果となつてしまった。

「だが、時間がないのも事実だ…だからこいつを出す。出てこい！」

その言葉と共に何かが現れた。

「ガア…ゴブア…ボヘア…ボロロ…」

それが出てきた瞬間から、凄まじい腐臭と死臭が漂う。

胴体と考えられる肉塊から人の腕や足が生えており、それらは統一感が一切無い。細い脚があるかと思えばぶよぶよと肉が付いている足もある。しわしわの腕もあれば、小さな子供くらいの腕もある。

頭のように思える場所には、数えるのが嫌になるほど人の顔が無造作に繋ぎ合わさっており、その一つ一つが苦悶の表情を浮かべている。

もはやこれは生物ではなく、人を形成するパーツの塊ともとれる『ナニカ』だった。

「うっ…なんだよ、これ…」

「アレはもう手遅れだな…死体を無理やり接続して動かしてるのか…?」

そこまで死体を見るのに慣れていない雁夜は手で口元を押さえ、始はこの『ナニカ』を見た瞬間救うことができない事に、ほんの少しだけ苛立つがそれを抑え『ナニカ』について目星をつけていく。

「お前らが何をしようが関係ねえ！俺は俺の目的がある！お前らみたいなクズ共に割く時間は全く無いんだよ！」

「黙れ！ 貴様のような外道に与える時間など無い！ ましてや、死人を冒瀆する者になど！」

「はあ!? 死人に口無しつてよく言うだろ！ 死んだらみんな終わりなんだ！ その後の死体の再利用に、誰の許可があるってんだよ！」

「…！ つ言っておく。」

死体の領得は、普通に刑法で犯罪だ。刑法第190条『死体損壊等罪』に当てはまる。さらにその遺体の領得方法次第では、刑法第188条『礼拝所不敬及び説教等妨害』に当てはまる可能性もなくは無いな。まあ、なにが言いたいのかと聞かれれば、お前のやってる事は人としてまず最低の行為であるという事だ。こちらも容赦を捨てる！

「はっ！ だつたらなんだ？ こいつに勝てんのか？ やつてみるよ！ ほら行け！」

その声を聞き『ナニカ』は、

「ヴウラアアアア！」

ドゴン！

脚と思われる部位を、床に叩きつけた。

「っ！」

「なんっー振動だよ！ くそ?！」

「構えろ！来るぞ！」

誰が言ったかも振動の所為で定かでは無いが、全員が構えようとした。しかし、

「ぐっ!?!」

「雁夜!……ちっ!」

雁夜が、人の足を繋げて生成された尻尾のようなもので飛ばされ、一瞬そちらを見た綺礼も食らいそうになるが、そこは黒鍵でなんとか堪える。

「そらそら!まだ人形はいるんだ!ただ突っ立つてると死ぬぜえ!」

「アア……ウアア……!」

「増殖ウ……!ソレがゾンビい……!」

「水晶ミたいだナあ……!君たちハあ……!」

「くっ!ゾンビが多い……!」

「しやらくせえ……!渉!燃やすか!」

「馬鹿!あれは範囲が広い!今やっちまったら、雁夜さんまで丸焦げだぞ!」

「(あれ?もしかして今、渉が止めてなかったら……俺丸焦げじゃね……?)」

ガーネルムは使役するゾンビも追加投入し、その数に苦言を漏らす始。そして前話のように焼き尽くすつもりで楓さん。さすがにヤバいと止める渉。丸焦げを回避できた事にひっそり喜びを感じる雁夜。

しかし、ここで戦況に変化が起こる。

「…ヴィイイアアあアウううウウ…！」

「…!?なんだ!?どうした!」

突然、『ナニカ』が奇声をあげ、その様子に驚くガーネルム。すると、

「ヴォアアア!」

「増殖ウ…ぞうしよ」

バクバクバク…グチャグチャ、ベキベキ、ゴクン。

仲間であるはずのゾンビを、幾つもの顔が旨そうに捕食し、咀嚼し始め、最後は飲み込んでしまった。

そしてその食事を終えた『ナニカ』の目線の先には、

「おい、何してる! そいつは食うもんじゃねえよ! 食うのはあいつらだ!

…おい、なんでこっち向いてんだよ。あっちだつて言つてんだろ!」

「ギイ…ギヤハア!」

「ひっ…ギヤアアアアアアアアアア!!」

グチャグチャ…ゴクン。

「…ガーネルムが」

「喰われた…のか…?!」

「あ…ああいうデカブツを思い通りに動かそうとする時に限って、逆に自分がやられちゃうと。操りきれないなら出すなよ…こつちが迷惑だよ…」

ガーネルムが喰われた事に驚く切嗣と劍崎。そして状況を飲み込みながらダレる渉。しかし、その渉の様子にキレている者もいる。

「渉…お前が言うか?」

「ビクッ!」

そう、綺礼である。聖杯戦争の後処理は凄まじく困難を極め、アルビノジョーカーの14（フォーティーン）化や大量のアルビローチを伴った冬木市中心部への進軍などの処理が、最もハードだったのである…。

巨大化したアレ（14「フォーティーン」）はホログラムだの、特撮映画の着ぐるみ集団だった（アルビローチ）だのと言いまくり、なんとか認めてもらえた。

ちなみに、1日の作業が終わった後は凜とも遊び、また八極拳を打ち合い…という日々を送っている。その度に時臣から炎の玉が飛び、その時臣に葵や凜から罵倒が飛ぶ

ところまでが一連の流れである。

そんなこともあったため、渉がキャスター・アルビノジョーカーの手綱を引けなかつた事に対し、怒りを露わにしているのである。

「いや〜アレは、どうにかなつたんだし、結果オーライで…」

「結果、オーライ…で？なんだ？」

「…すいませんでしたあああああ!!!!!!」

「…あそこまでいくと、惨めにも見えるな。」

「はは…しようがないだろ。あれは一種の自業自得だからな…」

綺礼の放つ、あまりの威圧感に即土下座をする渉。少し渉が惨めに見えてきた始とそれを聞いて自業自得と割り切る剣崎。しかし、

『おまえらーーーーー!!!!!!私の事を忘れるなあアアああアアア!!!』

「喋ったアアアアア! (全員)」

『人間、それもへ元主を喰ツタカラなあ…多少喋ルコトなど、造作モナイ! 来い! 死で全テガ終わる、下等ナ人間共ヨ!』

「ああ……なら全力で行かせてもらおうぞ！」

「後で後悔するなよ、化け物！行けるか？切嗣！」

「勿論！早く片をつけて、家族とディナーを楽しむんだ！」

「父親！敵を終わらせにかかる動機が凄まじく父親！羨ましいなあ、この人!？」

「今回は私が槍を務める。八極拳の使い手で知られる『李書文』は、槍の扱いにも長け、

その槍は『神槍』と呼ばれたそうだ。私も八極拳を扱う身として、その極致まで及ばず

とも、^{せま}迫つてはみたくないのでは……！」

「あたしと雁夜は周りの雑魚の相手をする！」

「皆、頼んだ！」

「ああ！行くぞ！」

「[[[「変身!!」]]]]」

『change』

『turn up』

『open up』

「劍崎！出し惜しみは無しだ！」

『アーチャー』『エボリユーシオン』

「分かってる！行くぞ、始！」

『アブゾーブQ』『エボリユーシオンセイバー』『アブゾーブQ』『エボリユーシオンK』

「僕もキングフォームくらいは使つてみたいが…仕方ないか」『アブゾーブQ』『フュージョンJ』

始と剣崎は共にエミヤフォームとアルトリアフォームになり、切嗣は自身にキングフォームがない事にボヤキを入れながらジャックフォームになる。

だが、切嗣よりも暗いイメージとなっているのは、

「しかし切嗣、私たちは」↑レンゲル（綺礼）

「強化フォームすらないんですけど…」↑グレイブ（渉）

案の定、この2人である。

「フィギュアでは…ギヤレンはキングフォーム、レンゲルはジャックフォームあるけど…（小声）」

「ん？楓、なんか言つたか？」

「…!?いや、何も？」

これは楓さん、危ない。聞こえていたら一部の味方に甚大な被害を及ぼす一言を聞かずに済みました。

「そんなに強化フォームが欲しいなら、作者に直談判すれば良いじゃないか。アニメやライダー系の妄想とかは、よくしてやるだろうし」

「…ほう？」

とここで、切嗣さん。まさかの提案…つて、こちらに丸投げしないでくださいよ!?!メタくなるから！

「おい作者！グレイブの強化フォームなんか作れ！無茶苦茶でもいいからよお！」

「あ、これ。アブゾーバーです。レンゲルのジャックフォームは手に装甲が現れるので、目立たないように使えばアブゾーバーの存在は、なんとかバレないかと…（小声）」

「すまん、助かる。こちらは一応、フィギュアでは強化フォームがあるからな…。切嗣、ここはジャックフォームで留めておけ。そこからキングフォームになったら、間違いなく渉がこちら側に着くぞ…（小声）」

「（ビクッ）あ、ああ…分かってる…（小声）」

「（今、切嗣〈この人〉を止めなかったら使ってたな…）」

…何故アブゾーバーを持つてゐるかは聞かないでおこうか。面倒そうだ…。

うーむ…グレイブのオリジナルフォーム…ねえ…

どうしよう？読者の声でも聞く？

追加分③ H達の長い夜・FILE・6 / 重力の死神・グレイブ

メタサイド

…うん。リアルの友人すごい。重力で剣を使うってだけで当てはまるものを教えてくれたよ…。しかも、こちらも知ってるアニメで…

ただ…

元ネタ知ってる人、または覚えてる人ってどれくらいいるのかな…。

渉サイド

うん、正直…作者には無理だと思ってた。これには作者の友人に感謝する他にない。確かに作ったのは作者だけど、友人の鶴の一声が元だし…。

で、どんな能力なんだ？

『君もよく知ってると思うよ。では問題だ。』

【重力】、【死神使い】、そして【ナマクラ刀】。これらの特徴を併せ持つキャラといえば？』

…？

……

……

……あ。

「あああああああ!!? え!! マジ!! ちよ、それ…ええ? いや、確かに俺の起源に含まれてる重力操作とかとは合ってるんだろうけどさあ…?」

『つべこべ言わない。正直…重力操作の魔術使いすぎて、作者もそれが君の起源だつて考えてる節あるからしょうがない。それに、無茶振りしたのは君でしょ? 作者もない頭

で考えて、読者の声も取り入れようとして、それでもなお出来なかったから友人に声をかけたんだよ？そしたら一発で解決。作者、言ってたよ。《もつと早く相談すべきだったかも…》って。つと、裏話はこの辺で。使い方とかはわかるよね？』

メタな話をあんまり持つてくんな！

大体はわかったけど…いや！だとすると武器はどうなる！まさか…

『いやいや、ちゃんと斬れるのを用意するから、安心したまえ』

…ならいいけど…。

で？どうやってなれるの？

『このカードをラウザーに直接通してねー』

と、言われた途端に目の前に見たことのないラウズカードが現れた。そのカードには『REAPER（リーパー）』の文字が記されている。

「『REAPER』…なるほど、死神か…ピッタリだなこりや！」

俺はそう言いながら、グレイブラウザーにラウズする。

『リーパー』

綺礼サイド

ほう、あれがグレイブのオリジナルフォームか…。

ドクロの留め具がある黒いボロボロのマントを纏っている以外には、姿形にさほど変化はない。

しかし、武器がかなり変わった印象がある。

刃は幅広のものとなった。

また、ナツクルガードがエイのようなものになり、特徴的な三つ目のドクロが。

…ん？あの三つ目、今…赤く発光したような気がしたが…？

…まあ、気にすることでもなからう。

問題は、どれほど戦えるかだが…一体どんな能力を保有している…？

まあいい。あちらはフォームチェンジした。こちらもどさくさに紛れ、ジャックフォームになるとしよう。

全体サイド

作者（組み立て）と作者の友人（全体的なモチーフの提案）の超協力プレイ（友人に

よるファインプレーがほとんどのウエイトを占めている)により誕生した『仮面ライダーグレイブ／リーパーフォーム』と、テレビ本編や劇場版では出てくることなくお蔵入りとなり、その後フィギュアで登場した『仮面ライダーレンゲル／ジャックフォーム』も発現し、さすがに敵も焦りを見せる。

『ええい、貴様ら！さすがにこの戦力差は卑怯であろう！誇りはないのか、誇りは！』

『誇りならある！ただしガーネルム、テメーはダメだ！』↑ライダー勢の方々

『畜生がああああ！お前らは、私の血肉にしてやるわ！』

「ヤダね！喰われる前に俺らがお前を狩ってやるよ！俺が、俺たちが！天罰を下してやる！」

『ほざけええええええ！』

そう言いながら巨大肉塊(以下肉塊)は、自身に付いている無数の顔の一部を射出。そこから人型のゾンビが生まれていくと同時に、脚のツメで標的を斬り裂こうとしてくる。標的は…

「む、こちらか…！」

綺礼である。

しかし飛行能力がないために素の攻撃・防御力が増加されているためか、防御力を活かし肉塊のツメの攻撃を受け切り、左手に持った鉄球で脚を薙ぎ払い、体勢を崩す。

「今だ！行くぞ！」

体勢を整えさせまいと攻撃を加えて行くが…

「くっ!?!こいつ…柔らかすぎる！」

「斬撃が通じない!?!なら…」

ぶよぶよで柔らかすぎる肉塊の胴体が、斬撃の勢いを吸収し、無力化してしまう。

それを見たカリスが少し下がり、エネルギー波の矢を放つが

グニョーン…ボシユ！

「なっ!?!」

矢がその柔らかい胴体を貫く前に、柔軟性を以ってエネルギー波を押し返してしま
う。

カリスはそれをなんとか避けるが、攻めあぐねている間に体勢が整ってしまふ。

懐に入り込んだ綺礼が寸勁を入れるが、やはり衝撃を吸収されてしまい、思うように

ダメージが入らない。

「どうする!?!このままじゃこっちがやられるぞ！」

ブレイドは焦るが、カリスがあることに気づいた。

「待て剣崎。確かにあいつの胴体には斬撃、射撃も通じなかった。

だが、脚には通じた。それならどこか別の場所も通じると考えてもいいと思う。それ

か…」

「そういった攻撃でない特殊系攻撃…だが、あの肉塊に通じるカードは限られるぞ…」
「確かに…どうするべきか…」

そんなことを言っていると、肉塊は尻尾を伸ばし、意趣返しのもりか全員の足を払いかかる。ライダー勢と雁夜はなんとか避けるが、周囲の雑兵に目を向けていた楓は、それに気づけず転倒してしまう。それを機に楓に集るゾンビと肉塊。

それでも、楓は笑っていた。

懐から聖書のようなものを取り出したかと思えばそれを開く。それは一見すると聖書そのものなのだが、実際には箱であり、中がくり抜かれている。そこには…

「はっ…そう簡単にやられるかっての!」

なんと手榴弾が入っていた。

それを真上に投げ、そこから辺の石を当て、起爆。ゾンビを吹き飛ばした。が、肝心の肉塊は吹き飛ばせていない。もちろん、迫ってくる

すると、楓のポケットの中に、入れた覚えのない、聖書（こちらは本当に本）が入っていた。

それを見てからグレイブを見る。そして何かを感じた。『なるほど、そういうことかと。』

楓は聖書を開き、口にする。

「渉！死神の発動を許可する！」

「待つてました！生まれ肉塊！」グラビトン 「重力」！」

「な!?なぜライダーの状態でカードの力もなく魔術が使える!?」

こう発言しているのは切嗣だ。

実は魔術師が仮面ライダーに変身する場合、その魔術師が使う本来の魔術は変身している間は使えなくなる。使いたい場合は危険承知で一度変身を解くか、以前の14（フォーティーン）の時みたく『ルーツ』のカードなどを使用しなければならないのだ。ならなぜ、グレイブは自身の魔術であるはずの重力操作を使用できるのか。

「決まってんだろ！このフォームの能力、『重力形成』だ！」グラビトン

そう。魔術でなくそのライダー自身の能力なら、魔術とライダーシステムの相性など関係ないのだ。

「(´▽｀)でこいつだ！」

『マイティ』

「圧せよ！ 『死神—岩盤牢獄—』！」

重力形成を発動しながらマイティのカードをラウズする事で、マイティの重力斬で肉塊を留めながら、重力により押しつぶされ、めくれ上がった岩盤が骨だらけの死神の手のように獲物を握り潰す。それがグレイブの『死神—岩盤牢獄—』である。

『グヌヌヌ……このまま終わってたまるかあ！』

「何?！」

しかし、肉塊は一瞬だけ肉体を縮め、瞬時に膨張させる事で縮めた時にできた重圧の隙間を押し広げ、押しつぶされる事なく脱出して来た。これにはグレイブも驚く。

「くそ、何か策は……」

あ、待てよ……確か……!」

自分の能力の出所を思い出したグレイブが、ある策を思いついた。

あの肉塊に通じうる上、消滅まで持つていけそうな策が。

「何か策があるのか!？」

「あるんですが……かなり難しいです!最終的には、あいつをある程度の高さまで浮かせなきゃならない!」

「ある程度の高さまで吹き飛ばせばいいのか?」

「俺たちに出来ることは!？」

「何かあるかい?」

「はい、では説明します!特にトドメには劍崎さん!あなたも加わってもらいます!でないで成立しません!」

「…ウエ?俺?」

(劍崎のあの反応…久々に見た気がする…)

しげらぐらして。

『ヒハハハハ!人間ども、小細工をしようと同じことだ!』

「ハッ。その小細工に負けたらお前超弱いぞw」

『言わせておけば!』

渉のちよつとした挑発にマジギレして突進して来る肉塊。

(『うわあ、チヨロすぎ…』) ↑ライダーの方々

こう思ってしまうのも仕方ない。

「とりあえず、あいつを弱らせる!」

「脚以外で効くと思うのは!?!」

「頭と尻尾くらいか。首と呼べる部位が存在しないからな…」
「ならその方針で！」

そう話しながら肉塊に対し攻撃を仕掛けていく。胴体が邪魔をするが、脚の他に頭・尻尾も予測通り攻撃が通る部位だと分かり、それと同時に勢いを強めていく。
もちろん、相手も黙っっちゃいない。反撃もしてくる。

…大体は涉に。

「はあ!？」

先ほどの挑発で、ターゲットは涉に集中している。それをなんとか避けながら、涉も聖書を取り出す（どこから取り出したか？考えるな、感じるのだ…）。

「聖書にはこうある。

『右のほおを殴られたら、

左の方へパイルドライバー！』」

※ありません

※ありません（大事なことなので二回言いました）

ぶっ飛んだ引用をしながら、肉塊の攻撃を避け、剣で攻撃を加える。

ギヤレンは、

「この距離、この部位なら柔らかさは関係ないな！」『バレット・ラピッド・ファイア』
『バーニングショット』

肉塊の頭にディアマンテエッジを突き刺し、まさに0距離でバーニングショットを放つ。当然、肉塊の頭は焼け焦げる。

肉塊も反撃を試みるが、肉塊自身も言っていた通り、かなりの戦力差。脚を碎かれ、尻尾は断たれ、ボロボロになっていた。

「風が強すぎる…まずい、姿勢の制御が…！」

「飛ばずに私の後ろに下がれ！あれはまさしく…」

嵐だ」

嵐とも呼ぶべき、巨大な竜巻の出来上がりである。

『ロールアウト オールバレットクラリア フリーステアウトデフベストレトルアルオブ』
『工程完了！全投影、待機……停止解凍、全投影連続嵐射』！！』

『どおオオオオオオオ！』

グラビトン

これにより、先ほどの『重力』を抜きにしてもかなりの高度まで上昇した。屋根が吹き飛んだことにより、天井より高い位置まで上昇しているため、星空が見える。

「さっすが始！期待以上の結果だ！」

「そんな事はない。剣崎！崇身！一気に決めろ！」

「おう！」

渉は敵の真上、ブレイドは真下へ行き、

グラビトン

「こっから落ちろ！『重力』！」

「これで、終わらせる！」『マグネ』

肉塊に向けられ放たれる『重力』と『マグネ』

肉塊は、断末魔も上げられぬまま肉片も残さず消滅した。

「さーて、あの作品なら、終わりのセリフはこうでなくっちゃ……！」
渉は肉塊の消滅を確認し、その場所から背を向け、

「判決、死刑！」

そう言いながら、右手で大きく十字を切った。

追加分③ H達の長い夜・FILE・7 / 長い夜の終わり

全員サイド

CANJARADA

「それでは、ガーネルム討伐成功を祝し、乾杯！」

『カンパニー！』↑綺礼以外の参加メンバー

ここはいつもの飲み屋、『CANJARADA』。

とはいっても、22時に突入して3時間で終わらせたとはいえ、今は25時。つまり深夜1時なのである。この店も夜の12時にはその日の営業を終了するのだが：

「そういえば綺礼、何故ここが開いている？表からではなく裏から入ったが、それと何か関係があるのか？」

始もやはり気になる様子。

その理由としては、

「店長は、自分が本当に信頼できる客にのみ、深夜でも出入りができる裏口の鍵を授け

る。私もこの1年強通いつめ、ようやく頂いたのだ…。もちろん、飲んでいいのはキープしている物のみ。レンジやコンロなどは使用可能だが、食べ物や他に飲みたいものなどは自前で持ち込む必要はあるがな…」

なんとも不思議な店長だ…。

そう思いながら始は、剣崎と買ってきた焼き鳥（冷凍食品・20本入り198円＋税）を日本酒を飲みながら食べる。

「最近の冷凍食品はクオリティ高いな…チンするだけでここまで美味しいとは…」

「鶏肉の味もしつかりしている上に、このタレもなかなか…」

クオリティの高さに驚く剣崎と、しつかり吟味している始。

その横では

「今回は雁夜のとっさの判断でどうにか事なきを得たが…まだまだフォーメーションに改善の余地がありそうだな…」

「今回は、地形がほとんどぐつちやぐちやだったからな…あそこまでされると連携も取りづらいしなあ…」

「地形が安定していない時に使うフォーメーションも考えていこうか。何か案は？」

それぞれ自分のお気に入りの酒を飲み、こちらはこちらで買ってきたドライソーセージ（1個80グラム／96円＋税×15）とさきいか（一袋100グラム／108円＋

税)をつまみにしながら、今回の反省会を行なっている。

またその横では、

「私が一で相手が多の時に起こる、あのトラウマ発症はどうか出来ないのか…?」

「アレでもマシになっただろ…?」

実はこのガーネルム討伐戦以前にも、楓が一で相手が多の時があった。

その時、涉はトラウマを初めて発症。手は震え呼吸も乱れ、楓が声を掛けても反応できないくらいのものであったのである。それを考えれば、反応が出来ただけまだマシだと
言える。

「けど根本的な解決は先か…」

「悪い…けど、こういうのは時間がなんとかしてくれと思う…こうして楓が側にいてくれるからさ…」

「…うん。それはいいけどさ…」

ちよつと飲み過ぎ！明日は休みだからつてきすがに…!」

「あー…おつかしいな…楓が6人くらいいる……かえでー。分身のエネルギーアイテム

「使ったー?」

「使つてない! あ、すいません綺礼さん! 渉が酔い潰れちゃいました!」

「む、では本日はここまでとするか」

「えー? 誰が酔い潰れてるのー? ねえ、かえでー。誰ー?」

「だからお前! あ、タクシー呼んでください。あとはなんとかしますんで!」

「ああ。気をつけて」

「すいません…」

そして楓と渉が帰った後、解散したメンバーはそれぞれの帰路につく。

「あ、劍崎…店行くぞ。あの人が待ってる」

「…あ、そうだった。切嗣! 先帰ってていいぞー。俺たちちよつと野暮用があるからさー」

「分かった。では雁夜、帰りながら新しい陣形案を組み立てるぞ」

「了解。始! 早めに帰って来いよー」

「分かってる」

そして店の前に来ると、

「お帰り！つて…お酒飲んでた？」

「あ、少し」

「すいません。まずかったですか？」

「ううん。でも酔つてここに來ること忘れてなくて良かったよ…。よし、明日は休みね

！2人とも、おやすみにゃ〜」

「はい、おやすみなさい」

そして2人になり、

「なあ、始」

「どうした？」

「俺、この世界に來れて良かったと思う。始がいて、始と戦わなくてよくて、もちろん戦いを強要するモノリスも無くて…俺を頼ってくれる人もいて。なんかさ、こつちに來てから幸せなんだよ、俺。始はどうだ？」

そう言われ、始は

「俺もそうだ。こつちに來てから護りたいと思える子も出來た「ロリコン発症？」断じて違ふ。」

…死んでもなお、人を護れること。俺はそれが嬉しい」

「そうか…確かに初めて会った頃を考えると、かなり人間らしくなってるな、始は」
「今は人間だがな」

「あ…それもそうか…なんだか、喋っててよくわからなくなってきた…」

「ふっ。酔いが回って来たか…つと、俺もなんだかんだ回ってるな…」

「酒飲むと口が軽くなるから…それで舌が回ってただけかもな…」

「確かにそうかもしれん。では帰るか」

「おう」

「また明日」

そして間桐家の自分の部屋の布団に倒れこみ、始は静かに眠る。

次の目覚めも、幸せだと確信しながら…。

メタサイド

やあ、読者の皆。ここまで読んでくれて本当にありがとう。

正直、自身に課した課題がことごとく達成されるとは思ってもみなくてね…ストックとかまだ出来てなかったんだ…本当にすまない。

ここまで書き上げることが出来たのも、読者の皆が待っていてくれたからだ。『毎日1人でも見てくれる人がいるだけで俺自身に対しての励みになった』って作者も言ってる。待ってくれてる人がいなかったら、最悪削除することも考えられたけどね。そうならなくて良かったよ。

この物語はここで終わるけど、もし別の機会、別の場所で会えたら光栄だね。その時まで、俺も休むとしよう。

ではおやすみ。また会おう。